鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（１６８）

県道伊集院蒲生溝辺線（有川工区）道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

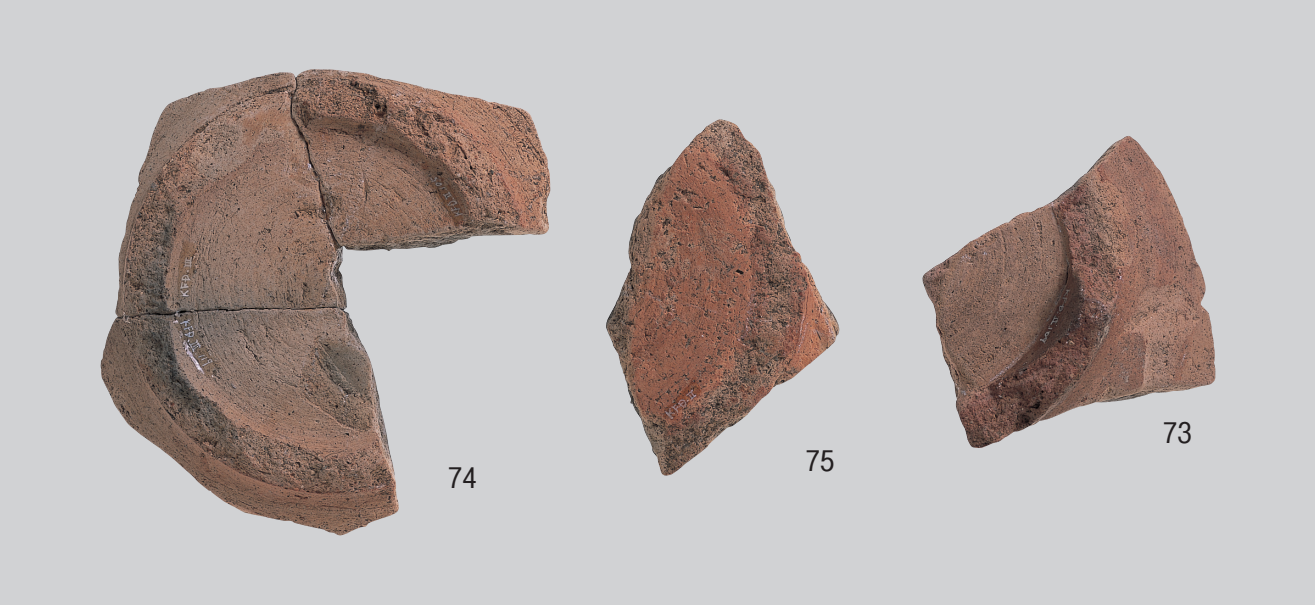
北麓原（きたふもとばる）Ｄ遺跡

（霧島市溝辺町）

2012 年 1 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

遺跡近景



赤色高台を有する椀

巻頭カラー図版の解説

写真はＡ～Ｄ－4～6区の様子である。該当する区の中で東側と西側に「畝状遺構群」がみられる。その間に「不定形土坑群」が並んでいる。

序　　文

この報告書は，県道伊集院蒲生溝辺線の改築に伴って，平成21年度から23年度にかけて実施した霧島市溝辺町に所在する北麓原Ｄ遺跡の発掘調査の記録です。

北麓原Ｄ遺跡では，古代の遺構・遺物が発見されました。なかでも，古代の「はたけ」とみられる畝状遺構や，焼土を伴う掘立柱建物は，当時の生産・生活を考えるうえで重要な遺構です。また,南北に並ぶ不定形土坑も類例の少ない特徴的な遺構です。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々がご覧になり，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財の普及･啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査にあたりご協力をいただいた鹿児島県土木部道路建設課，姶良伊佐地域振興局建設部土木建築課，霧島市教育委員会，関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成２４年１月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　　長　　寺　田　仁　志

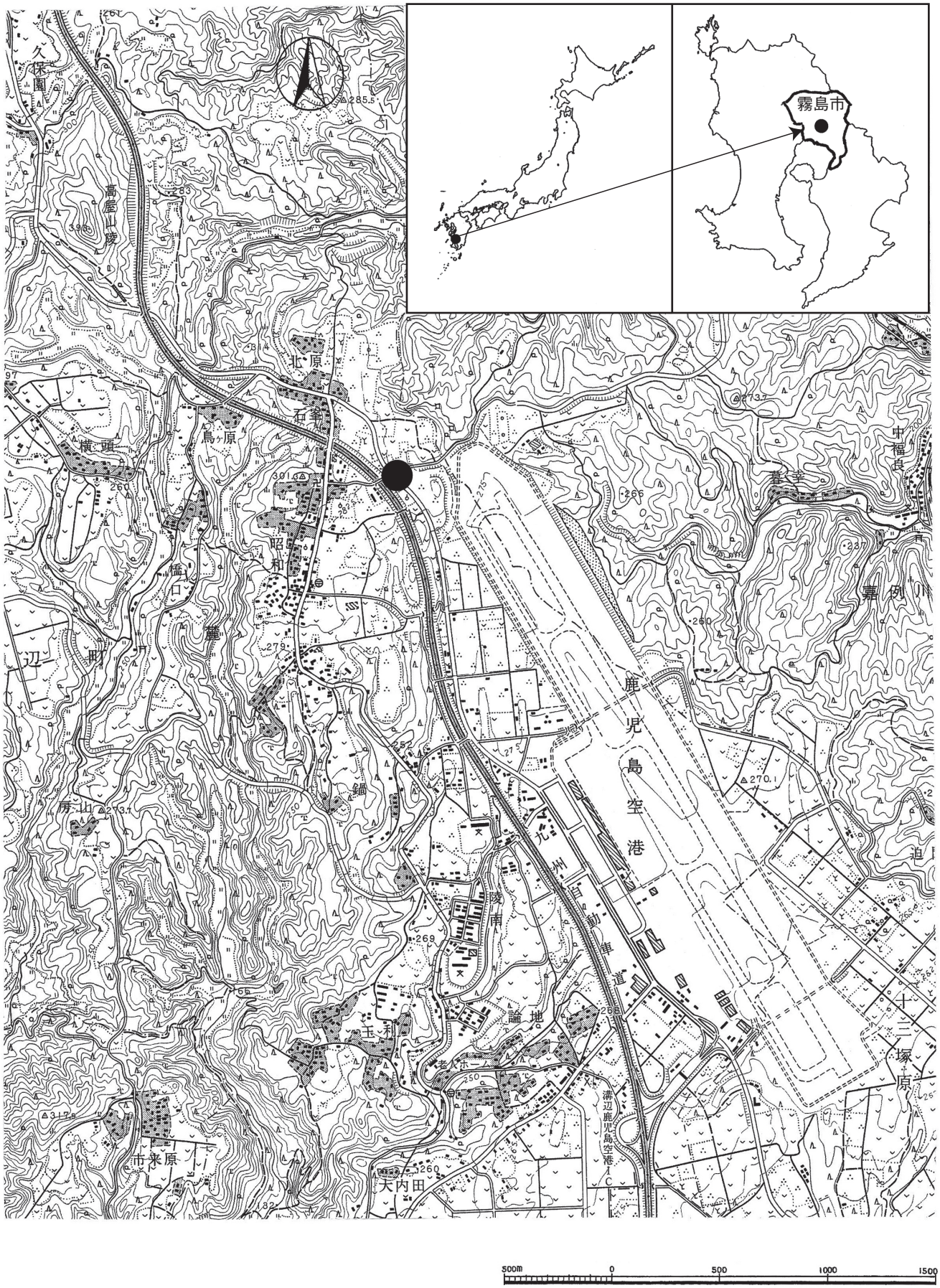
報　告　書　抄　録

ふりがな	きたふもとばるＤ　いせき
書　　名	北麓原Ｄ遺跡
副 書 名	県道伊集院蒲生溝辺線（有川工区）道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	１６８
編著者名	上床　真　　吉元　輝幸
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番１号　℡　0995-48-5811
発行年月日	西暦2012年１月20日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	発掘原因
北麓原Ｄ遺跡（きたふもとばるでぃーいせき）	鹿児島県（かごしまけん） 霧島市 溝辺町（みぞべちょう） 字横大道（あざよこだいどう）	46218	55- 49	31° 81′ 61″	130° 70′ 60″	本調査 20091201 ～ 20091224 20110601 ～ 20110628	950 (450) (500)	県道伊集院蒲生溝辺線道路改築事業に伴う記録保存調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北麓原Ｄ遺跡	散　布　地 散　布　地 集落・生産遺跡 散　布　地	縄文時代 古墳時代 古　　代（９世紀中頃） 中世以降	掘立柱建物跡 焼土３基 不定形土坑６基 畝状遺構群２カ所 土坑11基 帯状硬化面(古道)８条（うち波板状凹凸面を伴うもの２条）	石鏃・石鏃未製品 成川式土器（中津野式・東原式） 土師器（甕・坏・椀・鉢） 須恵器（甕・椀・小壺） 軽石製品 青磁・染付・銭貨（寛永通寶）	古代の畝状遺構は県内でも出土例が少ない。

遺跡の概要	北麓原D遺跡は，古代の集落遺跡・生産遺跡である。地床炉を持つ掘立柱建物跡1棟と畠の可能性のある畝状遺構や不定形土坑，土坑，焼土などが検出された。また，平安時代前半（９世紀中頃）の土師器，須恵器，焼塩土器，紡錘車などが出土した。この中で，畝状遺構については畠と考えられるものである。古代の畠に関する遺構は県内でも発見例が少なく，自然災害（火山噴火や洪水）に伴って埋もれたもの以外で検出できた稀有な例である。 本遺跡から出土した畝状遺構や掘立柱建物，焼土などの遺構は，古代の十三塚原台地における生活，生産の様子を窺い知ることができる貴重な資料である。


霧島市
久保園
高屋山陵
北原
石峯
鳥ヶ原
横瑞
昭和
橋口
麓
辺
町
房山
鍋
陵南
玉利
論地
老人ホーム
市来原
大内田
鹿児島空港
九州自動車道
沸辺鹿児島空港AC
中福良
春幸
霧島川
迫
十三塚原
500m
0
500
1000
1500

第１図　遺跡位置図

例　　言

1　本書は，県道伊集院蒲生溝辺線の改築事業に伴う北麓原Ｄ遺跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡は，鹿児島県霧島市溝辺町2524-1番地ほか（字横大道）に所在する。

3　発掘調査は，姶良伊佐地域振興局建設部土木建築課（事業主体）から依頼を受け，鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。

4　発掘調査事業は，平成21年度から平成23年度に実施し，整理・報告書作成事業は平成23年度に　鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。

5　掲載遺物番号は通し番号であり，本文，挿図，表，図版の遺物番号は一致する。

6　遺物注記等で用いた遺跡記号は「ＫＦＤ」である。

7　挿図の縮尺は，挿図ごとに示した。

8　本書で用いたレベル数値は，海抜絶対高である。

9　本書で使用した方位は，すべて磁北である。

10　発掘調査における実測図作成及び写真撮影は，調査担当者及び辻明啓が行った。

11　遺構図，遺物分布図の作成及びトレースは，上床・吉元が整理作業員の協力を得て行った。

12　出土遺物の実測・トレースは，上床・吉元が整理作業員の協力を得て行った。

13　出土遺物の写真撮影は，辻明啓が行った。

14　本報告書に係る自然科学分析は，内山伸明が行った。

15　本書の編集は，上床が担当し，執筆の分担は次のとおりである。
第１・２章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・上床　真・吉元輝幸
第３章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・上床　真
第４章　第１節（１）（２）第２節（３）（４）・・・・・・・・・・・上床　真
　　第１節（３）第３節・・・・・・・・・・・・・・・・・・・吉元輝幸
　　第２節（１）（２）・・・・・・・・・・・・・・上床　真・吉元輝幸
第５章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・内山伸明
第６・７章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・上床　真・吉元輝幸

16　本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，　展示・活用を図る予定である。

目　次

巻頭図版
序文
報告書抄録
例言
凡例

第１章　発掘調査の経過
第１節　調査に至るまでの経緯…… 1
第２節　事前調査…… 1
１　分布調査…… 1
（１）調査概要 …… 1
（２）調査体制 …… 1
（３）調査経過 …… 1
２　試掘調査…… 1
３確認調査…… 2
第３節　本調査…… 3
第４節　整理・報告書作成作業…… 3

第２章　遺跡の位置と環境
第１節　地理的環境…… 4
第２節　歴史的環境…… 4

第３章　調査の方法
第１節　調査の方法…… 9
１　発掘調査の方法（方針）…… 9
２　遺構の認定と検出方法…… 9
３　整理作業の方法（方針）…… 9
４　出土遺物の分類…… 9
第２節　層序……10

第４章　調査の成果
第１節　調査成果の概要……12
第２節　古代の調査……13
（１）調査の概要 ……13
（２）遺構 ……14
（３）遺物 ……21
第２節　その他の調査……30
（１）古墳時代以前の調査 ……30
（２）中世以降の調査 ……30

第５章　自然科学分析……38

第６章　まとめ……40

第７章　調査後の状況……42

写真図版……43

挿図・表・図版目次

挿図目次

第１図　遺跡位置図…… 3
第２図　周辺遺跡分布図…… 7
第３図　土層断面図①……10
第４図　土層断面図②……11
第５図　遺跡全体図及び総点ドット図……12
第６図　古代遺構配置図……13
第７図　掘立柱建物跡……14
第８図　柱穴跡及び出土遺物実測図……15
第９図　焼土……16
第10図　焼土内出土遺物実測図……17
第11図　不定形土坑①……19
第12図　不定形土坑②……20
第13図　畝状遺構断面図……21
第14図　古代遺物出土状況図……22
第15図　Ｃ－４区周辺拡大図……23
第16図　土師器甕実測図①……24
第17図　土師器甕実測図②……25
第18図　土師器坏・椀ほか実測図……26
第19図　黒色土器椀・文字資料
・焼塩土器実測図……27
第20図　須恵器・土製品・軽石製品実測図……28
第21図　中世以降の遺構配置図……31
第22図　土坑①……33
第23図　土坑②……34
第24図　波板状凹凸面断面図
及び溝状遺構断面図……35
第25図　その他の時代の遺物実測図……36
第26図　その他の時代の遺物出土状況図……37
第27図　分析結果……39
第28図　調査終了後の状況……44

表 目 次

表１　周辺遺跡地名表…… 8
表２　基本層序……10
表３　掘立柱建物柱穴跡内出土遺物観察表……14
表４　焼土内出土遺物観察表……17
表５　古代出土遺物観察表……29
表６　古代石製品観察表……29
表７　中世以降の土坑一覧……30
表８　土坑内出土遺物観察表……33
表９　溝状遺構内出土遺物観察表……35
表10　その他の時代の出土遺物観察表……37
表11　その他の時代の陶磁器観察表……37
表12　石器観察表……37
表13　鉄器観察表……37

図 版 目 次

図版１　Ⅲａ層上面検出状況(南から)……巻頭１
図版２　赤色高台を有する椀……巻頭２
図版３　図版１の解説……巻頭３
図版４　調査状況・掘立柱建物跡
及び焼土検出状況①……43
図版５　焼土②及び不定形土坑①検出状況……44
図版６　不定形土坑②・畝状遺構
・土師器検出状況……45
図版７　中世以降の土坑①検出状況……46
図版８　中世以降の土坑②遺物出土状況
・帯状硬化面検出状況……47
図版９　古代遺物①……48
図版10　古代遺物②……49
図版11　古代遺物③・その他……50

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき，鹿児島県土木部道路建設課（姶良・伊佐地域振興局建設部土木建築課・以下道路建設課）は，伊集院蒲生溝辺線（有川工区）道路改築事業を計画し，事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下，文化財課）に照会した。

この計画に伴い文化財課は，平成14年５月に事業区域内の埋蔵文化財の分布調査を実施した。その結果，事業区域内に石峰遺跡ほかの遺跡の所在が判明した。

この結果をもとに，事業区域内の埋蔵文化財の取扱いについて，道路建設課・文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下埋文センター）の三者で協議を行い，埋蔵文化財の保護と事業推進の調整を図るため，事業着手前に試掘調査を実施することになった。

試掘調査は，文化財課及び埋文センターが担当することとし，平成21年３月10日に実施した。その結果，遺物の存在が確認された。

そこで，再度三者で協議を行い，石峰遺跡ほかについて確認調査及び本調査を実施することとなった。調査は埋文センターが担当し，平成21年12月１日～12月24日（実働15日間）にかけて実施した。この結果，周知の遺跡である北麓原Ｄ遺跡の範囲を拡張することになった。この際に未買地であった部分が隣接していたが，平成22年度中に解決したので平成22年10月12日に試掘調査を実施した。この結果，遺物が発見された。この結果を受け，更なる協議を行い，この部分についても本調査を行うこととなった。

本調査・残りの部分の確認調査については，平成23年度に実施し，整理・報告書作成作業についても平成23年度に実施した。

第２節　事前調査

１　分布調査

北麓原Ｄ遺跡に関する分布調査を，平成14年５月29日に実施した。調査の結果，石峰遺跡周辺に遺物の散布がみられた。

調査体制（分布調査：平成14年度）

事 業 主 体　　鹿児島県土木部道路建設課
　　加治木土木事務所
調 査 主 体　　鹿児島県教育委員会
企画・調整　　鹿児島県教育庁文化財課
調 査 統 括　　鹿児島県教育庁文化財課
　　課長　吉永　和人
調 査 企 画　　鹿児島県教育庁文化財課
　　課長補佐　堂前　博文
　　埋蔵文化財係長　倉元　良文
調 査 担 当　　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　文化財主事　富山　孝一
　　文化財研究員　西園　勝彦

２　試掘調査

①平成21年度

平成21年３月10日に実施した。事業対象面積約15,000㎡のうち，買収済みの地点に６か所のトレンチを設定して調査を行った。調査面積は約40㎡である。調査の結果，１トレンチで古代の遺物包含層（Ⅱ層）を確認した。残りの５か所については，シラスの二次堆積層まで掘り下げたが，遺構・遺物は発見されなかった。この結果を受けて，北麓原Ｄ遺跡の範囲が拡大すると判断された。

調査体制（試掘調査：平成20年度）

事 業 主 体　　鹿児島県土木部道路建設課
　　姶良・伊佐地域振興局建設部土木建築課
調 査 主 体　　鹿児島県教育委員会
企画・調整　　鹿児島県教育庁文化財課
調 査 統 括　　鹿児島県教育庁文化財課
　　課長　有川　昭人
調 査 企 画　　鹿児島県教育庁文化財課
　　課長補佐　福山　徳治
　　埋蔵文化財係長　堂込　秀人
調 査 担 当　　鹿児島県教育庁文化財課
　　文化財研究員　川口　雅之
　　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　文化財主事　西園　勝彦
調査協力者　　霧島市文化振興課
　　サブリーダー　三好　健一

②　平成22年度

平成21年12月に実施した本調査区の隣接地点の調査を

平成22年10月12日に実施した。この地点は，茶畑の造成によって削平されている可能性が想定されたため，遺物包含層の把握を目的とした調査を行った。調査は２カ所のトレンチを設定して行った。調査面積は約28㎡である。その結果，遺物包含層が残存していることが確認された。

調査体制（試掘調査：平成22年度）

事業主体　鹿児島県土木部道路建設課
　　姶良伊佐地域振興局建設部土木建築課
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県教育庁文化財課
　　課長　有川　昭人
調査企画　鹿児島県教育庁文化財課
　　課長補佐　中尾　純則
　　埋蔵文化財係長　堂込　秀人
調査担当　鹿児島県教育庁文化財課
　　文化財主事　川口　雅之
　　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　文化財研究員　平　美典

立会者　姶良・伊佐地域振興局建設部
　　技術主査　寺園　竜也

3　確認調査・本調査

全体の用地買収が進んだため，北麓原Ｄ遺跡の確認調査・本調査を，平成21年12月１日から12月24日に実施した。確認調査は，地形や買収状況に応じて，確認トレンチを５か所設定し，表土下を二次シラス層まで掘り下げを行った。調査の結果，遺構･遺物は確認されなかった。試掘・確認調査の結果をもとに残存範囲を絞り込み，平成21年３月の試掘調査によって遺物の存在が確認された部分について，買収が終了している範囲の本調査を行った。

調査体制（確認調査・本調査：平成21年度）

事業主体　鹿児島県土木部道路建設課
　　姶良伊佐地域振興局建設部土木建築課
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　所長　山下　吉美
調査企画　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　次長兼総務課長　齋藤　守重
　　次長兼南の縄文調査室長　青崎　和憲
　　調査第一課長　中村　耕治
　　主任文化財主事兼第一調査係長
　　兼南の縄文調査室長補佐　井ノ上秀文
調査担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　主任文化財主事兼第一調査係長
　　兼南の縄文調査室長補佐　井ノ上秀文
　　文化財主事　岩澤　和徳
事務担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　総務係長　紙屋　伸一
　　主査　髙崎　智博

調査の詳細（日誌抄）

H21.12.1～12.4

調査開始，本調査区表土剥ぎ（重機）。本調査区・九州縦貫道に面する西側のⅡ層掘り下げ。１・２トレンチ掘り下げ。遺物取り上げ（No.1～46）。

青﨑和憲次長（埋文センター）現地指導。

H21.12.7～12.11

本調査区Ⅲ層掘り下げ。１トレンチ完掘，埋め戻し。溝検出･完掘，焼土域３か所検出。２・３トレンチ掘り下げ。Ⅲ層遺物取り上げ（No.47～63）。本調査区内Ⅳ層トレンチ掘り下げ。

三好健一氏（霧島市教育委員会）来跡。

H21.12.14～18

本調査区（Ⅲ層）掘り下げ。本調査区内トレンチ掘り下げ（Ⅳ･Ⅴ層）。ピット・焼土域検出，掘り下げ。遺構配置図図面作成。遺物取り上げ(No.64～143)。溝･古道･ピット群検出。一部埋め戻し，表土剥ぎ（重機）。

H21.12.21～12.24

本調査区掘り下げ（Ⅱ･Ⅲ層）。ピット群掘り下げ及び写真撮影及び実測。溝（２～５号）検出・掘り下げ・実測。Ⅲ層遺物取り上げ(No.144～146)本調査区埋め戻し。調査終了。

第３節　本調査

本遺跡の本調査を，平成23年６月１日～６月28日の16日間にわたり実施した。なお，平成21年度には確認調査とあわせて一部本調査も行っているが，上述したので割愛する。

調査体制（本調査：平成23年度）

事業主体　鹿児島県土木部道路建設課
　　姶良・伊佐地域振興局建設部土木建築課
調査主体　鹿児島県教育委員会

企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調 査 統 括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　寺田　仁志
調 査 企 画　鹿児島県立埋蔵文化財センター
次長兼総務課長　田中　明成
次長兼南の縄文調査室長　井ノ上秀文
調査第一課長　堂込　秀人
主任文化財主事兼第一調査係長
兼南の縄文調査室長補佐　東　和幸
調 査 担 当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財主事　上床　真
文化財主事　吉元　輝幸
事 務 担 当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
総務係長　大園　祥子
主査　下堂薗晴美

調査の詳細（日誌抄）

H21.5.30～6.3

表土剥ぎ・作業員用駐車場の整地，オリエンテーション，本調査区表土剥ぎ（重機），環境整備。

本調査区Ⅱ層掘り下げ。

レベル移動。

H21.6.6～6.10

Ｂ－４～６区遺物取り上げ（№201～347）。

Ｂ・Ｃ－４～６区Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ

寺田所長現地指導。

大園係長・東係長現地指導。

坂元祐己氏（霧島市教育委員会）来跡。

H21.6.13～6.17

西側調査区（本調査区と九州縦貫道を隔てた地点）トレンチ調査。遺構・遺物なしのため埋め戻し。

Ｂ－４～６区Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ・遺構検出。

上牧幸男氏・重久淳一氏（霧島市教育委員会）来跡。

中山誠氏･三好健一氏（霧島市教育委員会溝辺出張所）来跡。

H21.6.20～6.24

Ｂ・Ｃ－４～６区遺物取り上げ（№348～423）。

Ｂ・Ｃ－４～６区Ⅲａ層掘り下げ

土坑・畝状遺構検出・掘り下げ・実測。

遺跡全景写真撮影。

H21.6.27～6.28

作業員勤務終了（27日）。

土坑・畝状遺構掘り下げ・実測・写真撮影。

重機による埋め戻し。

調査終了。

なお，調査中に課長，係長の指導，係長の支援を受けた。

第４節　整理・報告書作成作業

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は，平成23年７月１日～８月26日にかけて鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。

出土遺物の水洗い，注記，遺構内遺物と包含層遺物の仕分け，遺物の実測・拓本，図面のトレース・レイアウトや原稿執筆等の編集作業を行った。整理・報告書作成作業に関する調査体制は以下のとおりである。

作成体制（平成23年度）

事 業 主 体　鹿児島県土木部道路建設課
姶良・伊佐地域振興局建設部土木建築課
調 査 主 体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調 査 統 括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　寺田　仁志
調 査 企 画　鹿児島県立埋蔵文化財センター
次長兼総務課長　田中　明成
次長兼南の縄文調査室長　井ノ上秀文
調査第一課長　堂込　秀人
主任文化財主事兼第一調査係長
兼南の縄文調査室長補佐　東　和幸
調 査 担 当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財主事　上床　真
文化財主事　吉元　輝幸
事 務 担 当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
総務係長　大園　祥子
主査　下堂薗晴美
報告書作成指導委員会　平成23年９月14日
井ノ上次長ほか７名
報告書作成検討委員会　平成23年９月16日
寺田所長ほか10名

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

本遺跡が所在する霧島市溝辺町は，鹿児島県のほぼ中央部に位置し，東は霧島市隼人町，南は姶良市加治木町，西は姶良市姶良町，北は霧島市横川町と接している。平成17（2005）年11月７日、国分市および姶良郡内５町と合併して霧島市となった。

溝辺町の形状は，東西に67㎞，南北に16㎞で北西から南東に斜走する方錘形をなす。地形は，中央部に位置する高屋山陵によっておおむね南北（東南部と西北部）に二分され，対照的な様相を示す。

西北部は，山岳地帯であり長尾山系の稜線が姶良市との境界線を示す。また，溝辺町内の主要河川は全て長尾山系が源である。

東南部は，姶良カルデラの噴出物による広大なシラス台地で平地に富み，その中でも水尻原から十三塚原は特に広く，その範囲は約20ｋ㎡にも及ぶ。この十三塚原台地には，農地が広がっているがシラスが厚く堆積しており農業用水が得にくいことから，水田には不向きで，ほとんどが畑地である。作物は,昭和初期には菜種が主で,戦後には「溝辺ゴボウ」が著名であったが,現在は「キャベツ」が「溝辺茶」とともに県内有数の生産量を誇っている。十三塚原台地全体を見た場合，比較的高所に多くの水源がある。これはシラス台地としては珍しい。水源付近に迫間・糸走・論地・上野・朝日などの集落が形成されている。この中でも，論地集落は本遺跡から近距離に存在する。

北麓原Ｄ遺跡は,霧島市溝辺町麓2524-１番地ほか（字横大道）に所在する。地理的には，鹿児島空港の北西約280ｍのシラス台地（通称十三塚原台地）の北部に位置している。また，崎森川の水源からほぼ１㎞の位置にある。

遺跡は，九州縦貫自動車道に隣接している。また，周辺には茶園を中心とした畑地が広がっており，その中には住宅や事務所・倉庫などもみられる。

現在，遺跡周辺には平坦な景観が広がっているが，本来はある程度の地形の起伏があったことが今回の調査でも確認されている。これは，太平洋戦争時の飛行場建設や，終戦後と昭和38（1963）年頃の二度にわたる農業構造改善事業，昭和40年代の集団茶園化などにより土地の改良が行われ，起伏をもった土地が平坦化されていった結果と考えられる。

なお,遺跡の小字名は「横大道(よこだいどう)」であり,本遺跡周辺に古代駅路の支線が通っていた可能性が指摘されている（武久1994など)。具体的には，十三塚伝説との関わりが指摘されており,『三國名勝図會』等で紹介される「宇佐八幡からの使者が正八幡宮に火をつけた後に，宇佐まで逃げ帰った」ルート上に本遺跡周辺がある可能性が指摘されている。現代の「大道」である「九州縦貫道」が本遺跡に隣接しているのも興味深い事実といえよう。

第２節　歴史的環境（周辺の遺跡を中心に）

溝辺町の歴史を知る上で１つの手がかりとなる遺跡は，分布調査・詳細分布調査・確認調査により数多くの遺跡が周知のものとなり,そのエリアも確定しつつある。また，溝辺町における遺跡の大半は，十三塚原台地周辺に集中して立地していることが明らかになった。特に，石峰遺跡の発掘調査は，その成果や調査法など，本県の考古学史においても大きな画期となった。以下，本遺跡周辺の主要な遺跡について時代別に紹介する。

１　旧石器時代

石峰遺跡・長ヶ原遺跡・柳ヶ迫遺跡などで確認されている。

本遺跡に近接する石峰遺跡では，遺構としては細石器文化期を主体とするブロック，遺物としては細石刃核,細石刃が確認されている。

長ヶ原遺跡・柳ヶ迫遺跡でも細石刃核，細石刃が確認されているが,柳ヶ迫遺跡ではナイフ形石器もみられた。霧島市隼人町に所在する東免遺跡では，サツマ火山灰層の直下層である黒色粘質層（通称チョコ層）から磨敲石１点のみが出土している。葛根塚遺跡でも黒色粘質層から黒曜石片が１点のみ出土している。

なお，本地域ではシラスが厚く堆積するため，25,000年前よりも古い遺跡は物理的に調査が不可能であることもあって未発見である。

２　縄文時代

草創期については，石峰遺跡出土の多縄文土器が議論の的になったこともあったが，本地域では類例がなく未解決の問題となっている。

早期の遺構は，東免遺跡では落とし穴状遺構が発見さ

れている。遺物としては，石峰遺跡で吉田式土器・石坂式土器・中原式土器・押型文土器・平栫式土器・塞ノ神Ａａ式土器が，桑ノ丸遺跡で前平式土器・吉田式土器・桑ノ丸式土器・押型文土器・平栫式土器・塞ノ神Ａａ式土器･塞ノ神Ｂｃ式土器が，木屋原遺跡では吉田式土器･石坂式土器・塞ノ神Ｂｃ式土器・苦浜式土器が，水尻原Ｃ遺跡では石坂式土器・押型文土器・手向山式土器が，木佐貫原遺跡では塞ノ神Ａｂ式土器・押型文土器・手向山式土器が，葛根塚遺跡では桑ノ丸式土器が，東免遺跡で押型文土器が，長ヶ原遺跡では塞ノ神Ｂｃ式土器が，山神遺跡で右京西式土器・鎌石橋式土器が，曲迫遺跡では右京西式土器が発見されている。傾向としては早期後半の割合が比較的多い。

前期は，東免遺跡と曲迫遺跡で落とし穴状遺構が発見されている。遺物としては，曲迫遺跡と桑ノ丸遺跡で轟式土器が発見されている。

中期は，石峰遺跡で深浦式土器（石峰段階）・春日式土器（前谷段階）が，東原遺跡と桑ノ丸遺跡で阿高式土器が，山神遺跡で岩崎下層式土器が出土している。

後期の遺構としては，木佐貫原遺跡から土坑が発見されている。焼土を伴うもので，市来式土器の時期のものと考えられている。遺物としては，東免遺跡･曲迫遺跡･中尾遺跡・七ッ次遺跡から指宿式土器，桑ノ丸遺跡から指宿式土器・西平式土器・三万田式土器が，山神遺跡から岩崎上層式土器・市来式土器，木佐貫原遺跡から指宿式土器・岩崎上層式土器・西平式土器・市来式土器が出土している。

晩期については，東原遺跡では黒川式土器が，曲迫遺跡では黒色磨研土器が出土している。その中には，県内でも類例の少ない注口土器も含まれる。

3　弥生時代

弥生時代の遺跡は,本地域にいくつか存在しているが,実際に調査された遺跡はほとんどない。

石峰遺跡からは，中期前葉の北麓式土器・後期の免田式土器が出土している。

また，東免遺跡の古代の１号土坑内から出土した小型仿製鏡は，伝世された弥生時代の内行花文鏡と考えられる。

4　古墳時代

東原遺跡からは，竪穴住居跡が発見されている。住居内からは，甕・高坏・坩が出土しており，セット関係が明らかとなった。このことから本遺跡は東原式土器の標識遺跡となっている。

桑ノ丸遺跡からは完形の壺形土器が埋納された土坑と，木炭を伴う窯状遺構が発見されている。

古墳時代の土器が出土した遺跡は多いが，古墳時代前半（中津野式～東原式土器）の遺物が，木屋原遺跡・東免遺跡・南十三塚遺跡・南十三塚Ｃ遺跡・入道遺跡・中尾遺跡・山神遺跡・枦場遺跡・松ヶ迫遺跡・七ッ次遺跡・葛根塚遺跡・桑ノ丸遺跡・石峰遺跡・水尻原Ｃ遺跡で出土しており，本地域での主体を占める。ただし，桑ノ丸遺跡・松ヶ迫遺跡では古墳時代後半（辻堂原式～笹貫式土器）の遺物も出土している。

東免遺跡からは磨製石鏃が出土している。このことから古墳時代においても周辺が「狩り場」であったことが想定される。

5　古代

溝辺町内における古代の遺跡は，おおむね平安時代前半（９世紀～10世紀前半）に該当する。特徴的なものとして，焼土を伴う掘立柱建物が山神遺跡と水尻原Ｃ遺跡で発見されている。同様の遺構が北麓原Ｄ遺跡でも発見されており，本地域での様相が注目される。

木佐貫原遺跡・桑ノ丸遺跡・山神遺跡・石峰遺跡・東免遺跡･曲迫遺跡･水尻原Ｃ遺跡では，土師器（甕･坏）･須恵器（壺・瓶）などが出土している。この中で，山神遺跡では越州窯青磁碗・青銅製小仏像などが，曲迫遺跡からは移動式カマドが発見されている。県内でも類例の少ないものであり注目される。

6　中世以降

この時期になると，文献にも溝辺が登場する。建久８（1197）年の大隅国建久図田帳には，正八幡宮（現鹿児島神宮）領の宮永名の中に「溝部（溝辺）」･「在河（有川）」がみえる。これが溝辺の初見である。

また，嘉吉２（1442）年には，『旧記雑録』の「本田重恒譜」に,「嶋津庄大隅方溝邊六町･同城并向嶋内有村」とあり，溝辺城に関する記録が確認される。

中世の調査事例は多くないが，溝辺町内における中世城館跡については,「鹿児島県中世城館跡」では５か所(高松城【有川】･高松山城【三縄】･溝辺城【麓】･玉利城【崎森】･中丸城【玉利】）が報告されている。うち４か所（中丸城以外）は，略測図（縄張図）が公表されているものの，発掘調査などの詳細な調査はほとんどなされていない。なお，３か所（溝辺城・玉利城・中丸城）に関しては，１㎞圏内に集中することから関連が深い可能性があ

る。また，これらの城跡は北麓原Ｄ遺跡と比較的近距離に所在する。

石峰遺跡では青磁碗･青花（碗･皿）･瓦質土器（羽釜･擂鉢）が発見されている。これらはいずれも中世後半期に該当する遺物であり，中世城館跡とは時期が重なる部分が多い。

７　近世・近代

近世には外城（天明４【1784】年に郷に変更）制が実施されるが，関連するものとして地頭仮屋がある。はじめ麓（溝辺城付近）におかれていたが，宝暦３（1753）年に有川（現溝辺小学校）に地頭仮屋が設置され，以後有川が溝辺郷の中心となった。

近世以降の明確な遺構の発見例は多くないが，石峰遺跡で６基，桑ノ丸遺跡では66基の墓が発見されている。特に，石峰遺跡では近世墓とその周辺から，薩摩焼擂鉢･肥前系染付・ホウロク（フライパン形土器）の把手・寛永通寶・木製念珠（数珠玉）が発見されており，当該時期の墓制についての好資料といえる。

太平洋戦争末期には、国分海軍航空隊の第二基地として十三塚軍用飛行場が建設され、昭和20（1945）年にはここから特別攻撃隊147名が出撃した。

この飛行場跡地には，昭和47（1972）年に鹿児島空港が開設された。この空港建設を契機に昭和49（1974）年から県営十三塚原畑地帯総合土地改良事業が始められた。また，昭和50（1975）年には九州縦貫自動車道溝辺インターチェンジが開通しており，鹿児島の空の玄関口ともいうべき様相を呈している。

【参考文献】

鹿児島維新史料編さん所1980『鹿児島県史料　旧記雑録前編二』鹿児島県
鹿児島県史跡調査会1971『姶良郡溝辺町大型空港建設地内における埋蔵文化財発掘調査報告書』
鹿児島県教育委員会1977「山神遺跡ほか」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』（７）
鹿児島県教育委員会1978「東原遺跡ほか」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(10)
鹿児島県教育委員会1979「木佐貫原遺跡ほか」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(11)
鹿児島県教育委員会1980「石峰遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(12)
鹿児島県教育委員会1985「国分・隼人テクノポリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書』(33)
鹿児島県教育委員会1986「国分・隼人テクノポリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書』(37)
鹿児島県教育委員会1987「鹿児島県の中世城館跡－中世城館跡調査報告書－」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書』(43)
芳即正・五味克夫編1998『日本歴史地名大系　第47巻　鹿児島県の地名』平凡社
五味克夫1960「大隅国建久図田帳小考－諸本の校合と田数の計算について－」『日本歴史』142　吉川弘文館
竹内理三編1983『角川地名大辞典46鹿児島県』角川書店
平田信芳2002「古道を探る方法」『高井田遺跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書【35】）』武久義彦1992「明治期の地形図にみる大隅国の駅路と蒲生駅家」『奈良女子大学地理学研究報告』Ⅳ
武久義彦1994「明治期の地形図にみる大隅国北部の駅路と大水駅」『奈良女子大学研究年報』38
溝辺町教育委員会2002「南十三塚Ｃ遺跡」『溝辺町埋蔵文化財発掘調査報告書』(1)
溝辺町教育委員会2002「水尻原Ａ遺跡ほか」『溝辺町埋蔵文化財発掘調査報告書』(2)
溝辺町郷土誌編集委員会1973『溝辺町郷土誌』

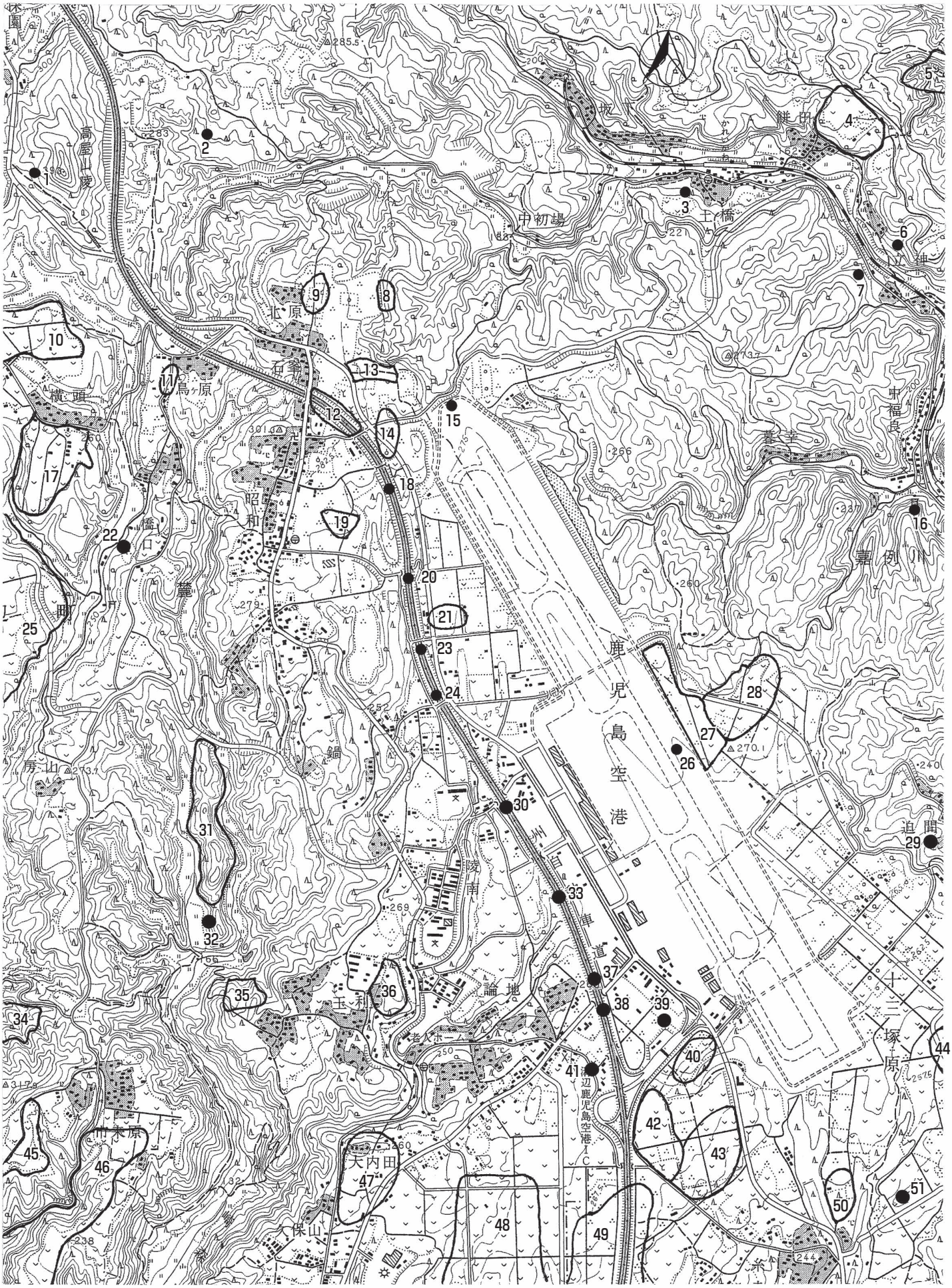

高屋山陵
北原
石倉
横頭
鳥ヶ原
昭和
橋口
麓
町丸
房山
鍋
中初場
土橋
鮮田
坂下
立神
中福良
菅辛
鹿児島空港
陵南
論地
玉利
老人ホーム
百軍道
追間
十三塚原
清辺鹿児島空港IC
大内田
大保山
糸
500m
0
500
1000
1500

表１　周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	鷹屋神社跡	霧島市溝辺町麓字管ノ口	山地			応永18（1411）年に現在地に遷座との伝説あり
2	中野	霧島市溝辺町麓字中野	山地	縄文～古代		
3	上之山王社跡	霧島市隼人町嘉例川字宮園	開折谷	中世		
4	岩井戸	霧島市隼人町嘉例川	段丘	古墳	成川式土器	
5	嘉例川城跡	霧島市隼人町嘉例川	丘陵	中世	空堀，土塁，土橋，曲輪	
6	立神社跡	霧島市隼人町嘉例川	段丘	中世		
7	有木迫	霧島市隼人町嘉例川字有木迫	段丘	縄文(中期)	縄文土器，墨書土器	
8	北麓原B	霧島市溝辺町麓	台地	古代		
9	北麓原A	霧島市溝辺町麓	台地	古代		
10	草水原	霧島市溝辺町麓字水尻原	台地	古代	土師器	
11	後ヶ原	霧島市溝辺町麓字鳥ヶ原	台地	古墳		
12	石峰	霧島市溝辺町麓字石峰	台地	旧石器，縄文	押型文土器，縄文土器(早期～後期)	県報告書(12) 1980
13	北麓原C	霧島市溝辺町麓	台地	古代		
14	北麓原D	霧島市溝辺町麓字横大道	台地	古墳，古代，近世	東原式土器，土師器，焼塩土器，銭貨，青磁	本報告
15	十三塚原第一地点	霧島市隼人町嘉例川	台地	縄文(早期･中期)	手向山式土器，塞ノ神式土器，阿高系土器，石匙	県史跡調査会 1971
16	日枝神社	霧島市隼人町嘉例川	段丘	近世		
17	京ノ峯	霧島市溝辺町麓字水尻原	台地	古代	土師器	
18	柳ヶ迫	霧島市溝辺町麓字柳ヶ迫	台地	弥生～古代	弥生土器，土師器，細石器	県報告書(10) 1978
19	北麓原E	霧島市溝辺町麓字北麓原	台地	古墳		
20	長ヶ原	霧島市溝辺町麓	台地	縄文～古代	縄文土器(中期)，土師器	
21	麓原	霧島市溝辺町麓字麓原	台地	古代		
22	橋ノ口	霧島市溝辺町麓字橋ノ口	台地	縄文～古代	縄文土器，弥生土器，土師器	
23	松木原	霧島市溝辺町麓字松木原	台地	弥生～古代	弥生土器，土師器	県報告書(10) 1978
24	葛根塚	霧島市溝辺町麓字葛根塚	台地	弥生～古代	弥生土器，土師器	県報告書(10) 1978
25	水尻原	霧島市溝辺町麓字水尻原	台地	縄文，古代	古代掘立柱建物，焼土	町報告書(2)2002
26	十三塚原第二地点	霧島市溝辺町鹿児島空港内	台地	弥生	弥生土器	県史跡調査会 1971
27	五右ェ門塚	霧島市溝辺町麓字五右ェ門塚	台地	古墳		
28	表原	霧島市溝辺町嘉例川字表原	台地	縄文早期	環状石斧，貝殻文系土器，黒曜石	
29	虚空蔵菩薩堂跡	霧島市溝辺町嘉例川字堂ノ前	段丘	近世	石仏三体，手水鉢	
30	七ッ次	霧島市溝辺町麓七ッ次	台地	縄文～古代	縄文土器(後期)，弥生土器，土師器	県報告書(10) 1978
31	溝辺城跡	霧島市溝辺町麓字城山	山地	中世		県報告書(43) 1987
32	心慶寺跡	霧島市溝辺町麓字谷	山地			
33	松ヶ迫	霧島市溝辺町麓字松ヶ迫	台地	弥生～古代	弥生土器，土師器	県報告書(10) 1978
34	笹原	姶良市加治木町小山田字笹原	台地	縄文～古代		
35	玉利城跡	霧島市溝辺町崎森字玉利	山地	中世		県報告書(43) 1987
36	中丸城跡	霧島市溝辺町玉利字中ノ丸	台地	中世		
37	木屋原	霧島市溝辺町麓字木屋原	台地	縄文～古代	縄文土器(早期･前期)，弥生土器，土師器，須恵器，青磁片	県報告書(10) 1978
38	山神	霧島市溝辺町麓字山神	台地	縄文～古代	縄文(前後)弥生，土師器，須恵器，	県報告書(7) 1977
39	曲迫	霧島市溝辺町麓字曲迫	台地	縄文～古代	縄文土器，土師器	県報告書(7) 1977
40	曲迫	霧島市隼人町西光寺字曲迫	台地	縄文～古代	縄文土器，土師器，カマド形土製品	埋セ報告書(64) 2004
41	枦場	霧島市溝辺町麓字枦場	台地	縄文～古代	縄文土器(前期･後期)，弥生土器，土師器，石鏃	県報告書(7) 1977
42	山神	霧島市隼人町西光寺字東免	台地	縄文～古代	縄文土器(前期･後期)，弥生土器　土師器，須恵器，青磁片，墨書土器	埋セ報告書(64) 2004
43	東免	霧島市隼人町西光寺字東免	台地	旧石器～古代	細石刃，縄文土器，銅鏡(倣製鏡)	埋セ報告書(64) 2004
44	長迫	霧島市隼人町嘉例川字長迫	台地	縄文，古墳		
45	高峠	姶良市加治木町小山田字高峠	台地	縄文（早期）		
46	下市来原	姶良市加治木町小山田字市来原	台地	縄文（早期・前期・中期）・近世	縄文土器（加栗山式・曽畑式・中期条痕文）・薩摩焼	加治木町報告書(2) 2000
47	榎原	霧島市溝辺町麓字榎原	台地	古墳，中世		
48	南十三塚B	霧島市溝辺町崎森字南十三塚	台地	古代	桑ノ丸式土器	溝辺町報告書(2) 2002
49	西免	霧島市隼人町西光寺字西免	台地	弥生(末期)，古代	成川式土器	県報告書(7) 1977
50	大迫	霧島市隼人町西光寺字大迫	台地	古墳	成川式土器，土師器	
51	立迫	霧島市隼人町西光寺字立迫	台地	古墳		

※　山神遺跡(38及び42)と曲迫遺跡(39及び40)については，それぞれ同一の遺跡範囲に含まれる可能性がある。

第３章　調査の方法

第１節　調査の方法

１　発掘調査の方法

北麓原Ｄ遺跡の発掘調査は，平成21年度と平成23年度の合計２次にわたって，新規に道路を建設する部分についての合計950㎡を対象として行われた。調査地は十三塚原台地上の北部に位置し，旧地は畑地，住宅地などに利用されていた。

本調査に当たっては，表土を重機で除去した後，（10ｍグリッドを設定して）Ⅱ層以下を人力によって掘り下げた。ただし，下層確認については重機を利用して掘り下げを行った。

グリッドの設定にあたっては，基本グリッド間隔を10ｍとし，工事用幅杭Ｊ156（Ｘ：－131271.612,Ｙ:－27812.600）を基点に，Ｊ151（Ｘ：－131261.661,Ｙ：－27823.849）（共に世界測地系による公共座標）を視準した線をグリッドの基軸とした。

測量座標については，グリッドに基づく任意座標系を用いた。任意座標系は，Ａ－１杭を原点として縦軸をＸ，横軸をＹとした。具体的には，南西側から北東側に向かって１，２，３･･･，北東側から南西側に向かってＡ，Ｂ，Ｃ・・・とする10ｍ間隔でそれぞれに設定している。

２　遺構の認定と検出方法

表土を除去後に人力で掘り下げを行った結果，Ⅱ層において遺物の出土がみられた。そのため，遺構の有無の確認をするために，人力による精査を行いながら，掘り下げを行ったところ，Ⅲａ層ないしはⅢｂ層上面で遺構を検出した。

結果として，掘立柱建物跡・溝状遺構・不定形土坑・焼土・畝状遺構が検出された。

３　整理作業の方法

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は平成23年４月～９月にかけて鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。水洗い，注記，遺構図作成，遺物実測・拓本・トレース，写真撮影，レイアウトや原稿執筆等の編集作業を行った。また，遺物に付着した赤色顔料の自然科学分析については当センターで行った。詳細については第５章に記載している。

４　出土遺物の分類

北麓原Ｄ遺跡では，土器･石器などの遺物が出土した。遺物は，土師器・須恵器，石器・石製品，金属製品などが確認される。今回の調査では，古代の成果が最も重要であるので，古代の遺物についての分類についてここで取りあげる。ここでは，土師器・須恵器とその他の大きく３種類に分類した。

①　土師器・須恵器の分類

北麓原Ｄ遺跡から出土した遺物の主体は，古代の土師器・須恵器であった。Ⅲａ・Ⅲｂ層がその主な包含層となる。総数約4,500点の出土遺物の中から抽出した土師器・須恵器は，以下のように分類した。

ア　土師器

甕Ⅰ類：外面調整がナデを基調とするもの
甕Ⅱ類：外面調整がハケメを基調とするもの
坏：体部が直線的で，高台のないもの
碗：体部がやや湾曲し，高台をもつもの
黒色土器：内面にヘラミガキが施される黒色の碗
焼塩土器：内面に布目の圧痕が残るもの
その他：・鉢形土器・ヘラ書土器・刻書土器

イ　須恵器

甕：内面に当て具痕の残るもの
壺：内面に当て具痕がないものとナデがなされているもの
碗：高台のあるもの

②　その他の遺物の分類

土製品：紡錘車・土錘
石製品：軽石製品

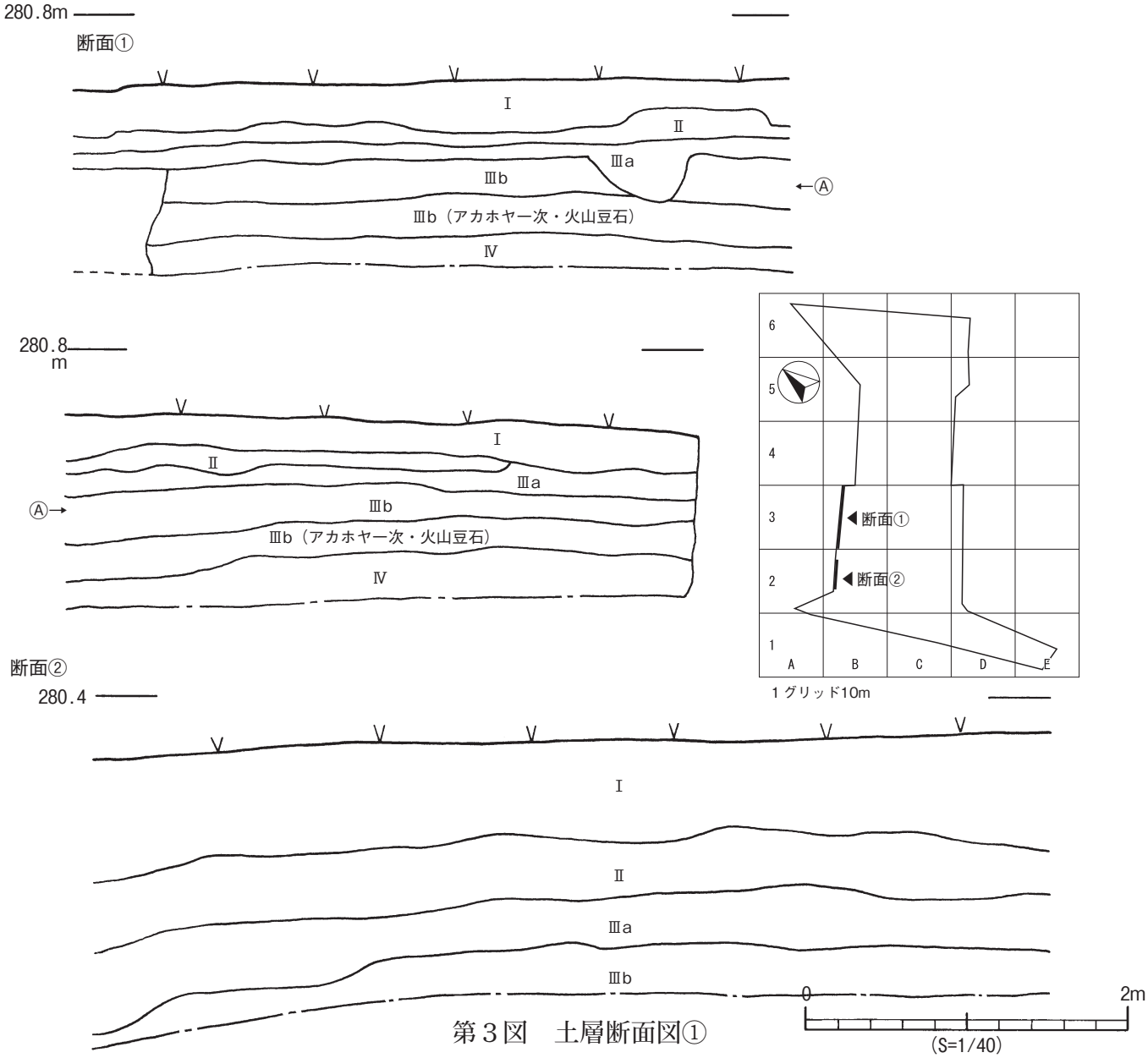
第２節　層序

ここでは層序について示す。本遺跡では，表土下には黒色土があり，さらにその下には明橙色土（アカホヤ火山灰土），黄橙色土（サツマ火山灰土）などの火山噴出起源の堆積土をはじめとする堆積土がみられる。また，掘削可能な範囲（深さ約２ｍ）では暗茶褐色土層（２次シラス）まで確認される。

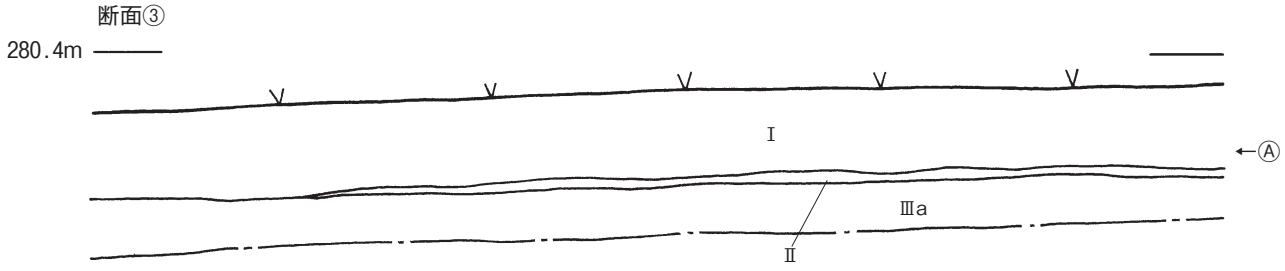
これらの堆積は，上野原遺跡などを代表とする姶良郡周辺の層序と基本的には同様である。本遺跡では，遺構・遺物の発見は基本的にはⅡ・Ⅲ層に限られ，Ⅳ層以下では確認されなかった。ただし，試掘及び確認調査については下層の確認を行っているので，その際確認された層序についてはここで紹介する。これによって，本遺跡の成り立ちの参考となれば幸いである。以下に，各層の特徴を示す。

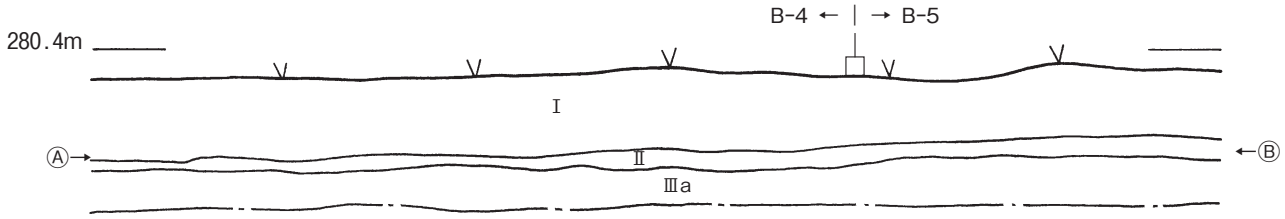
表２　基本層序

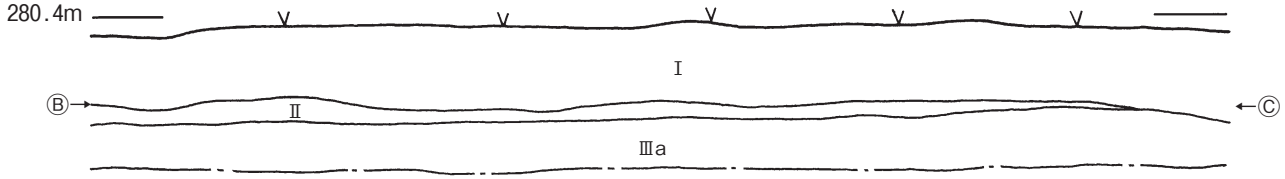
層序		厚(cm)	備考
Ⅰ	表土	40	
Ⅱ	黒色土	15	
Ⅲa	褐色土層	10	**古代の包含層**
Ⅲb	アカホヤ火山灰	35	
Ⅳ	暗褐色粘質土層	10	
Ⅴ	黒褐色粘質土層	10	
Ⅵ	サツマ火山灰	5	ブロック状
Ⅶ	暗褐色粘質土層	10	
Ⅷ	褐色粘質土層	15	
Ⅸ	茶褐色土層	20	
Ⅹ	暗茶褐色土層		2次シラス

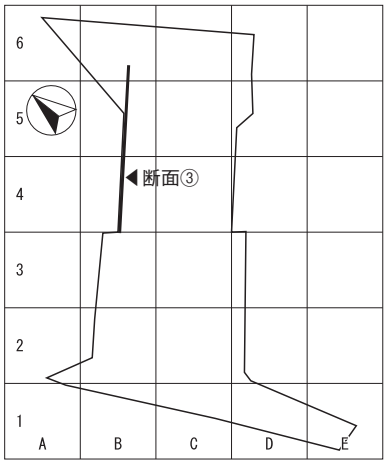


第３図　土層断面図①

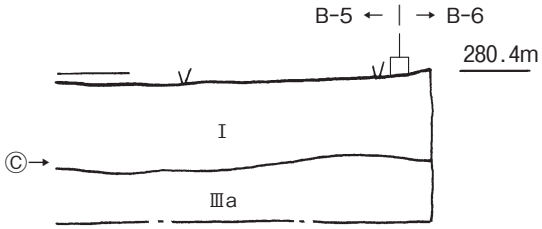




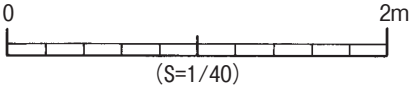




1グリッド10m



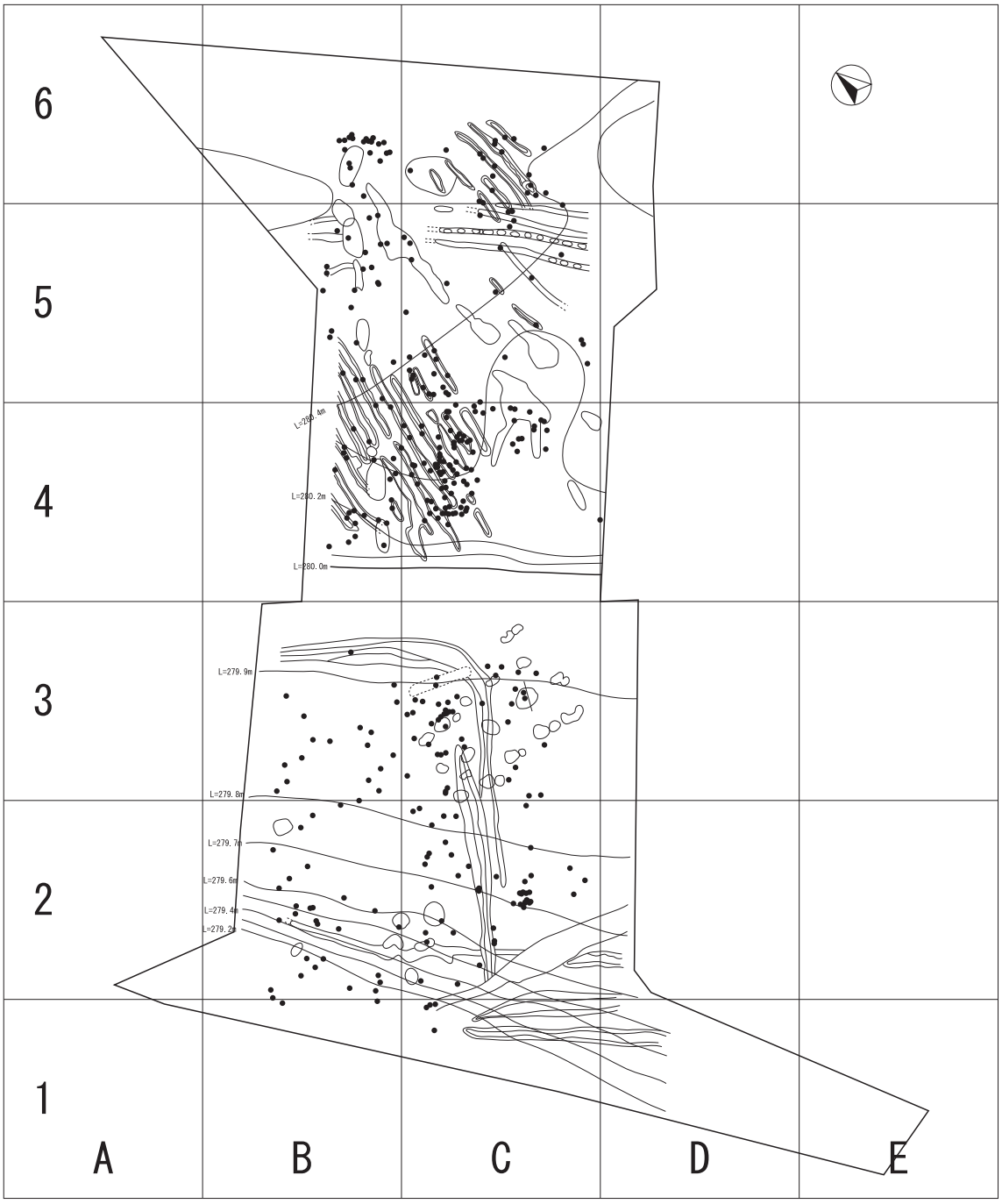
第４図　土層断面図②



第４章　調査の成果

第１節　調査成果の概要

調査の結果，遺構は古代及び中世以降のものが，遺物は縄文時代後晩期から近世・近代に該当するものが発見された。第５図には，本遺跡で発見された全ての遺構及び取上遺物の出土位置（ドット図）を示した。本図からほぼ全域に渡って遺構・遺物が存在することが明らかである。本報告書では，今回の成果の中で「核」となる古代の遺構・遺物から述べることとし，古代以外の時期の成果はその後に一括した。



１グリッド10m

第５図　遺跡全体図及び総点ドット図

第２節　古代の調査

（１）調査の概要

基本的には，Ⅲａ層が遺物包含層，Ⅲｂ層上面が遺構検出面である。

遺構は，掘立柱建物１棟，焼土３基，不定形土坑５基，畝状遺構群が検出された。遺物は，土師器（甕・坏・碗・鉢），須恵器（甕・小壺・碗），焼塩土器，紡錘車，土錘，軽石製品などが発見された。

時期については，おおむね平安時代前半頃に該当する。

（２）遺構

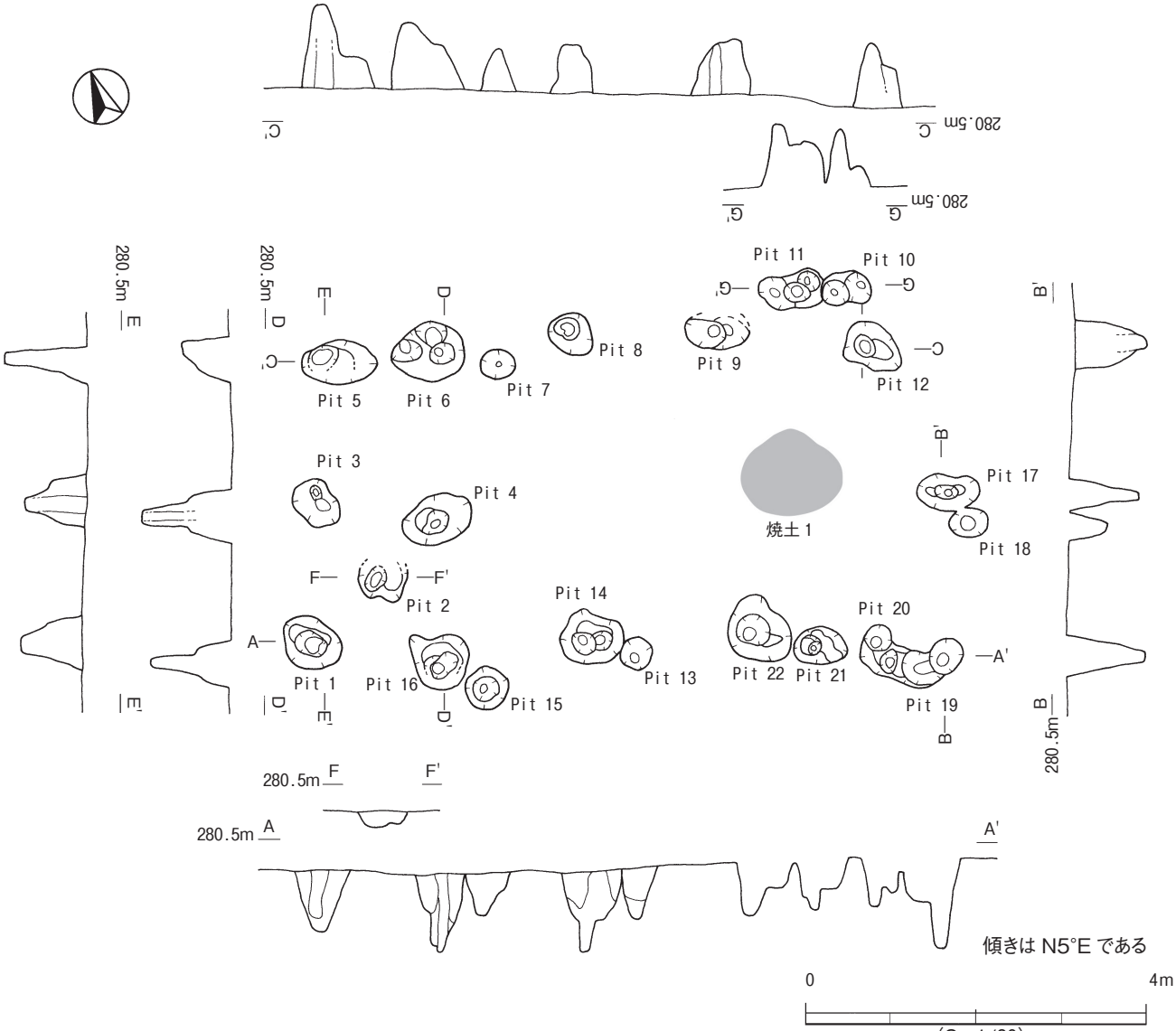
掘立柱建物跡と焼土，不定形土坑，畝状遺構群等が発見された。

①　掘立柱建物跡（Ｃ－３区）

合計22のピット（柱穴跡）が発見された。これらは１

１グリッド10m

第６図　古代遺構配置図



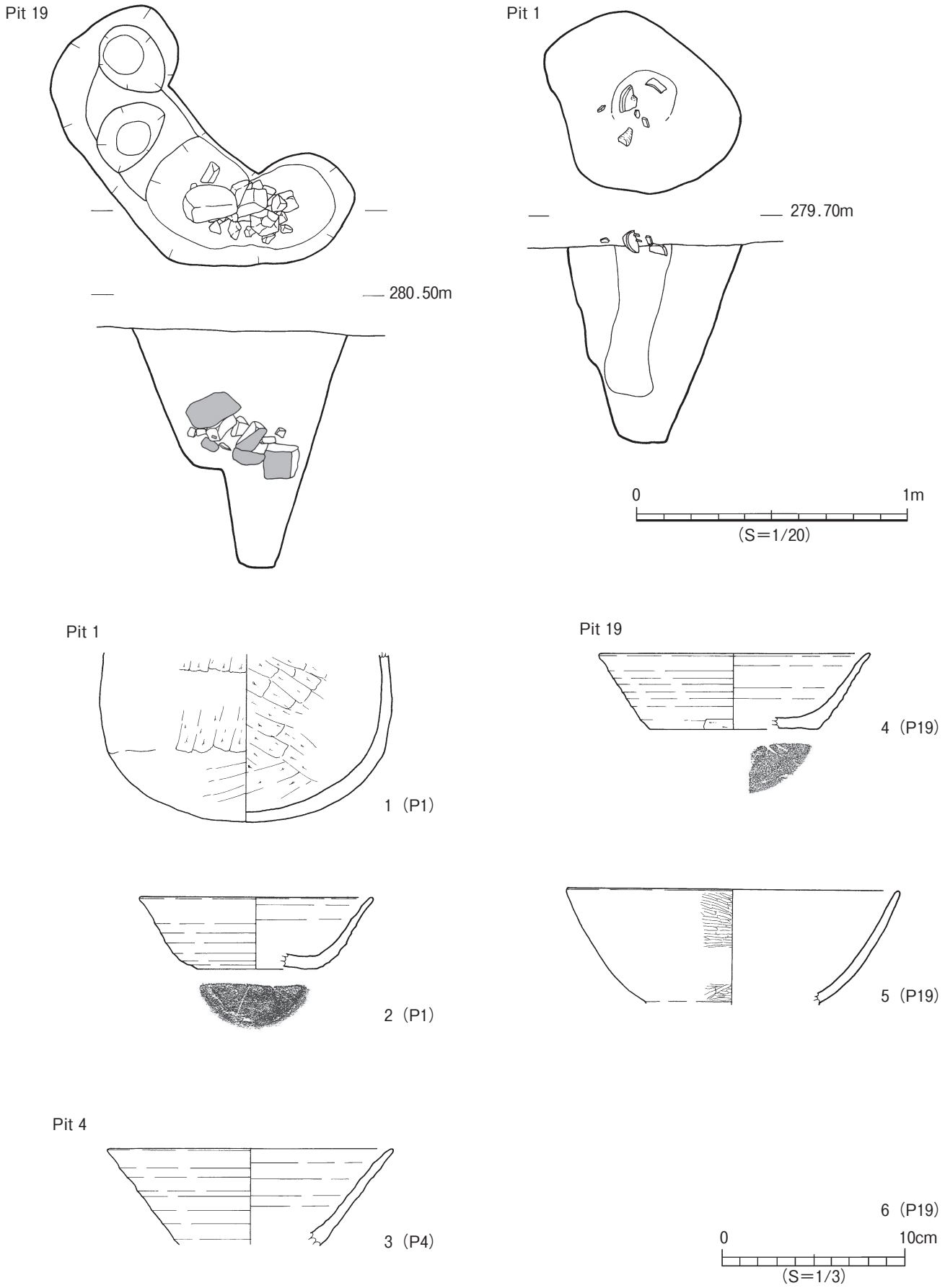
第７図　掘立柱建物跡

表3　掘立柱建物柱穴跡内出土遺物観察表

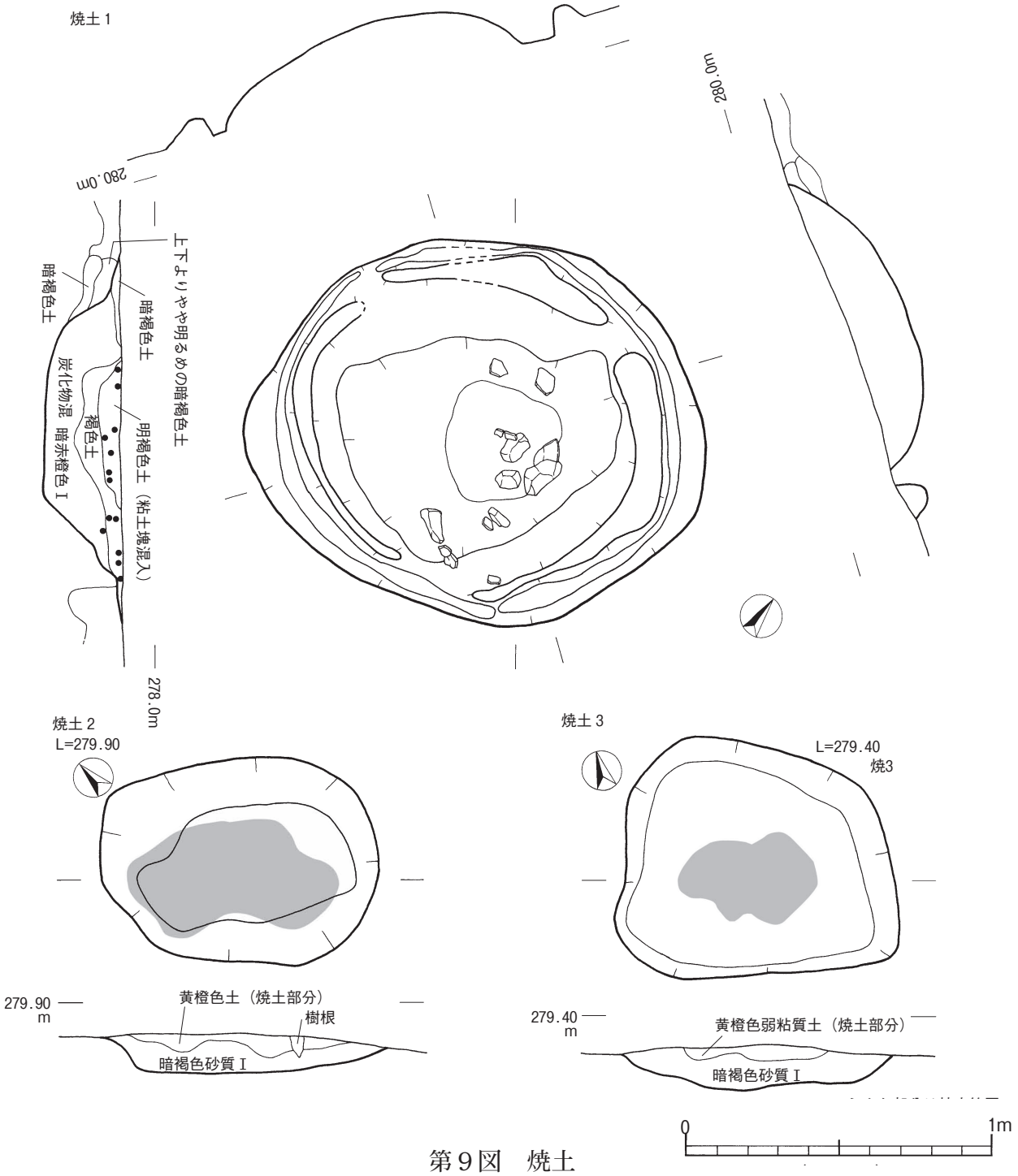
挿図No.	No.	遺構名	類別	器種	部位	器高(cm)			色調		器面調整		胎土				備　考
						器高	口径	底径	内面	外面	内面	外面	石英	長石	角閃	他	
第8図	1	ピット1	土器	甕	底部			15.0	橙色	にぶい赤褐色	ヘラケズリ	ヘラケズリ		○	○		
	2		土器	坏	完形	4.0	13.0	6.6	橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ		○			底部外面にヘラ書
	3	ピット4	土器	坏	口縁部		15.6		浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ		○			
	4	ピット19	土器	坏	完形	4.1	15.0	9.4	明褐色	明褐色	ナデ	ナデ					底部外面にヘラ書
	5		黒色土器	椀	口縁部		18.2		にぶい黄橙色	明黄橙色	ミガキ・ナデ	ミガキ				赤色粒	
	6		須恵器	甕	胴部				黒褐色	黒褐色				○			

か所に集中しているので，１棟の掘立柱建物とした。この場合,建物の長軸がほぼ正しく東西方向を向く。また,柱穴跡が連続して並ぶ。北東側隅はＬ字形を呈するが,この中には柱穴跡が数基みられるので溝状遺構で柱穴跡を連結していた可能性もある。この状況から，２回以上の立て替え，あるいは壁立建物の可能性が考えられる。これらの柱穴跡は溝状遺構１・２に切られている。一部の柱穴については，調査区域外に入っていたり，何らかの原因で確認できなかった可能性もある。柱穴の中には,柱痕跡とみられる黒色を呈する柱状の埋土が確認されるものも数基みられた。

また，これらの柱穴の中には，遺物を伴うものもあった



第８図　柱穴跡及び出土遺物実測図



第９図　焼土

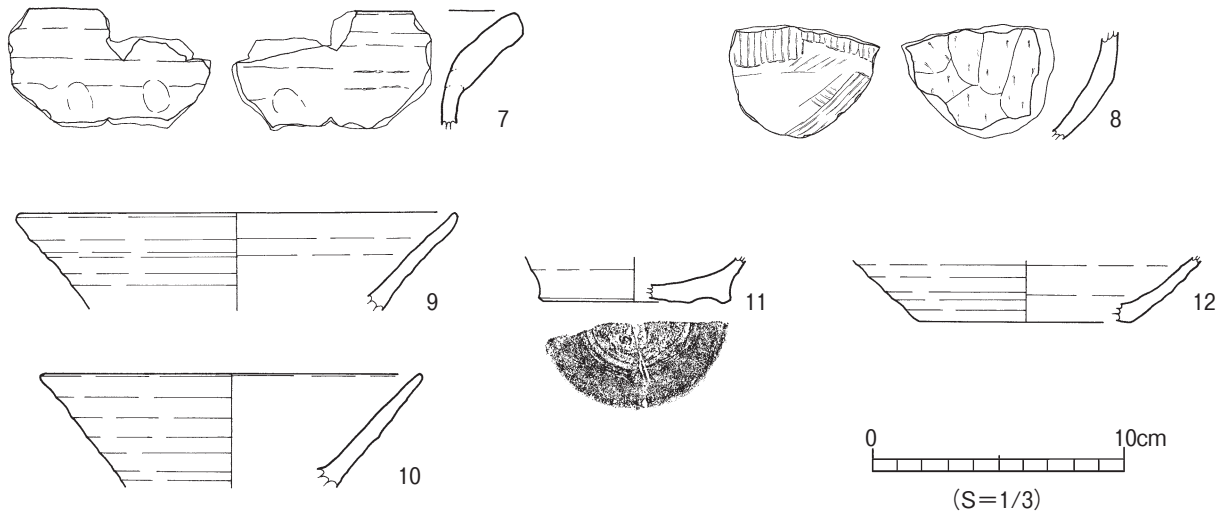
ので，遺物出土状況の記録のある２基について詳述する。

ピット１は，検出面において甕形土器や坏などが確認されたものである。これらの遺物は，柱痕跡とみられる埋土中のもので，建物廃棄に伴う遺物の可能性がある。

ピット19は，検出面と底面との中間付近に礫や土器などが集中して検出されるものである。これらの遺物は，柱を安定して支えるための「栗石」の可能性があるが，他のピットには確認されなかったことから検討を要するものである。

上記のピットのほかには，ピット４から遺物の出土がみられた。

掘立柱建物の範囲内において，焼土が検出されているが，これは掘立柱建物に伴う地床炉の可能性が高いものと考えられる。



第10図　焼土内出土遺物実測図

表4　焼土内出土遺物観察表

挿図No.	No.	遺構名	類別	器種	部位	器高(cm)			色調		器面調整		胎土				備　考
						器高	口径	底径	内面	外面	内面	外面	石英	長石	角閃	他	
第10図	7	焼土	土器	甕	口縁部				にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	ナデ・ユビオサエ	ナデ		○	○		
	8		土器	甕	胴部～底部				橙色	橙色	ヘラケズリ	ハケメ・ナデ		○	○		
	9		土器	坏	口縁部		17.4		浅黄橙色	にぶい黄橙色						赤色粒	
	10		土器	坏	口縁部		15.2		橙色	黄橙色							
	11		土器	椀	底部			7.6	橙色	橙色						赤色粒	
	12		土器	坏	底部			8.0	赤褐色	赤褐色						赤色粒	

遺物

柱穴内から土師器の甕・坏・椀などが出土した。

１は比較的小型の甕の底部で，内外面にヘラケズリの痕跡がみられるものである。２～４は坏である。このうち２・４については，底部外面に焼成前にヘラ状の工具によって「＋（もしくは×）」に類似する文字ないしは記号が刻まれるものである。５は椀で，赤色を呈するもので，外面にはヘラミガキが観察される。

②　焼土

３基が検出された。これらは地床炉の可能性がある。１基については掘立柱建物に伴う可能性があり，また遺物の出土がみられた。

焼土１

Ｃ－３区の掘立柱建物の中で検出された。140㎝×130㎝の楕円形状を呈するもので，検出面からの深さは約20㎝である。一旦土坑を構築して，その側面から底面にかけて粘土を貼り付けたとみられる遺構で，「カマド」に類似する遺構の可能性がある。検出面においては，中央付近で軽石製品の破片や，土器等が確認された。

遺物（第10図）

甕（７・８），坏・椀（９～12）が出土した

焼土２

Ｃ－３区の掘立柱建物の中で検出された。90㎝×65㎝の長方形ないしは楕円形状を呈する。熱による変化が検出面からの深さ約14㎝まで達する。

焼土３

Ｂ－２区で検出された。110㎝×100㎝の長方形ないしは楕円形状を呈する。熱による変色が検出面からの深さ約17㎝まで達する。

③　不定形土坑

本遺跡においては,二箇所の畝状遺構群が検出された。これらの畝状遺構群の間に主軸をほぼ同じくする不定形状を呈する土坑群が検出された。

いずれの不定形土坑も，①畝状遺構群に添うように，ほぼ南北に一直線に並ぶ　②不定形状を呈するが，南北方向に長い形状　③遺構内からの出土遺物がみられない

という特徴がみられた。また，全てではないが，底面の一部に溝状ないしはピット状の部分がみられるものもあった。

以下に，それぞれの遺構について詳述する。

ア　不定形土坑１号

Ｂ－５・６区で検出された楕円形状もしくは倒卵形を呈する土坑である。南端部が，１号土坑（中世以降の土坑）に切られる。検出面においては，一部に硬化面がみられたが，この硬化面は帯状硬化面であったことが検出後に判明した。

イ　不定形土坑２号

Ｂ－５・６区，Ｃ－５区にまたがって検出された南北に長い土坑で，最大長720㎝，幅140㎝，検出面からの深さ90㎝である。本遺跡で確認された同様の遺構で最大のものである。北端から240㎝と南端から140㎝の部分については，溝状になっており埋土も異なる。溝状部分の検出面からの深さは８㎝である。

ほぼ中央部が，柱穴状であり，１本の柱が立てられていた可能性も考えられる。

埋土中には炭化物を含む。特に底面付近では比較的多くの炭化物が確認された。このうち一部をサンプリングしたが，分析等は行っていない。今後の課題としたい。検出時においては，中世以降に属する帯状硬化面を除去した跡に検出された。

ウ　不定形土坑３号

Ｃ－５区で検出された。水滴状の形状を呈し，北端部付近で最大幅となるものである。底面は，ほぼ北側から半分については溝状部分が馬蹄状に巡り，南側から半分については中央に向かって緩やかに傾斜する。

最大長は270㎝，最大幅は94㎝，検出面からの最大の深さ25㎝（溝状部分）である。土坑内の埋土は，Ⅲａ層土に類似する。また，埋土中には少量の炭化物が含まれる。

エ　不定形土坑４号

Ｃ－５区から検出された。不定形土坑５号の西北西方向に隣接する。南北方向に水滴形を呈するもので，最大長310㎝，最大幅134㎝である。

土坑内の底面からは，大小三箇所の円形状のピット（ａ・ｂ・ｃ）が検出された。深さは，検出面からそれぞれ54㎝・58㎝・110.5㎝である。

埋土は三枚に分層が可能で，上層は黒みがかった橙褐色土で，中層はにぶい黄褐色土，下層は褐色土となっており，レンズ状に堆積する。また，埋土中には少量の炭化物が含まれる。

オ　不定形土坑５号

Ｃ－４・５区で検出された。楕円形もしくは三角形に類似した形状を呈する土坑で，三方向に溝状遺構が連結する。土坑部分のみの場合，最大長224㎝，最大幅168㎝，検出面からの深さ60.5㎝である。なお，この土坑の壁面には多くの横方向の窪みが確認された。埋土は三枚に分層が可能で，上層から黒褐色土・褐色土・にぶい褐色土となっており，レンズ状に堆積する。

本土坑には，南西側から２本，北側から１本の幅15～20㎝，深さ約10㎝の溝状遺構が連結する。いずれも埋土は二枚に分層が可能であり，上層はやや暗い褐色土，下層は黒褐色土で，レンズ状に堆積する。これらの溝状遺構は土坑部分を切っていることが確認されるので，溝状遺構が新しい時期のものであることが明らかである。

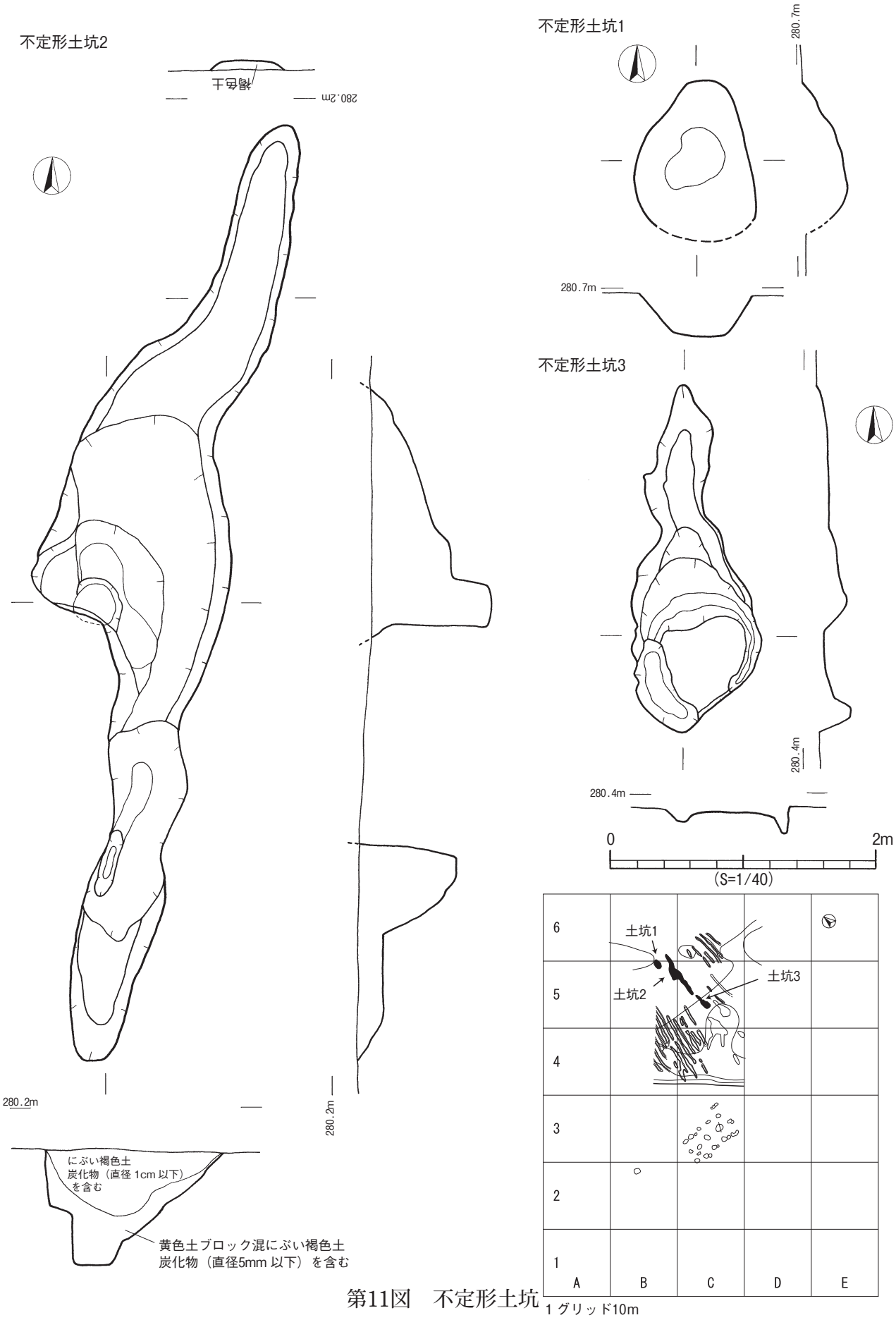
カ　不定形土坑６号

Ｃ－４区で検出された。楕円形状もしくは卵形に類似した形状を呈する土坑である。最大長120㎝,最大幅72㎝,深さ32㎝である。東側が比較的緩やかな掘り込みであるが，他の三方は垂直に近い掘り込みがなされるという特徴がある。

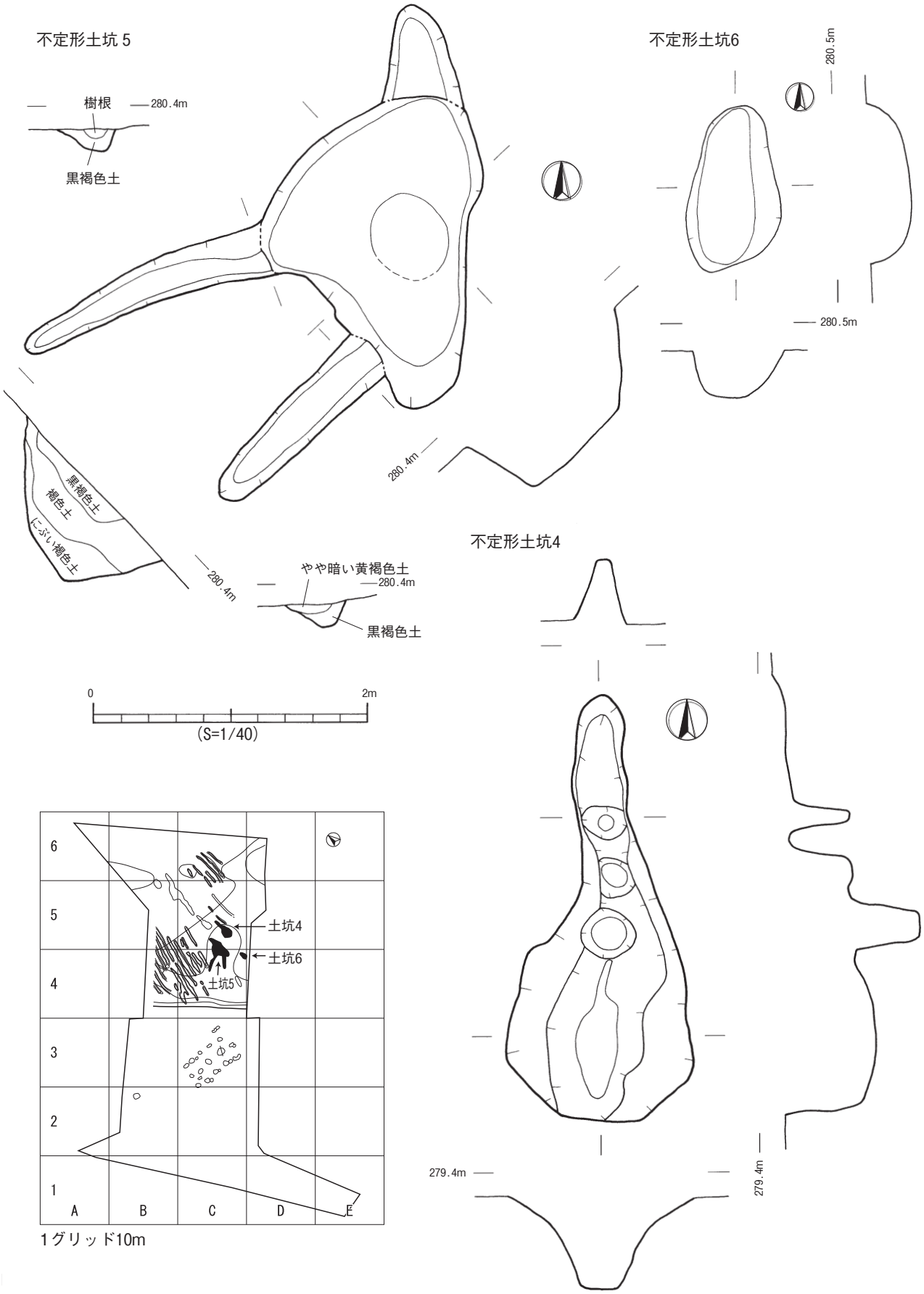
④　畝状遺構群

２～５ｍの長さの溝状遺構が並行するもので，Ｂ・Ｃ－４・５区（11条）と，Ｃ－５・６区（６ないし７条）の二か所に存在する。それぞれの畝状遺構の検出面からの深さはまちまちであるが，深さ５～10㎝程度である。埋土はいずれも褐色で，他の当該時期の遺構埋土と大きく変わらない。本県では畝状遺構は火山灰にパックされた状態で検出されることが多いが，本遺跡では畝状遺構の埋土中には火山灰土は全く確認されなかった。

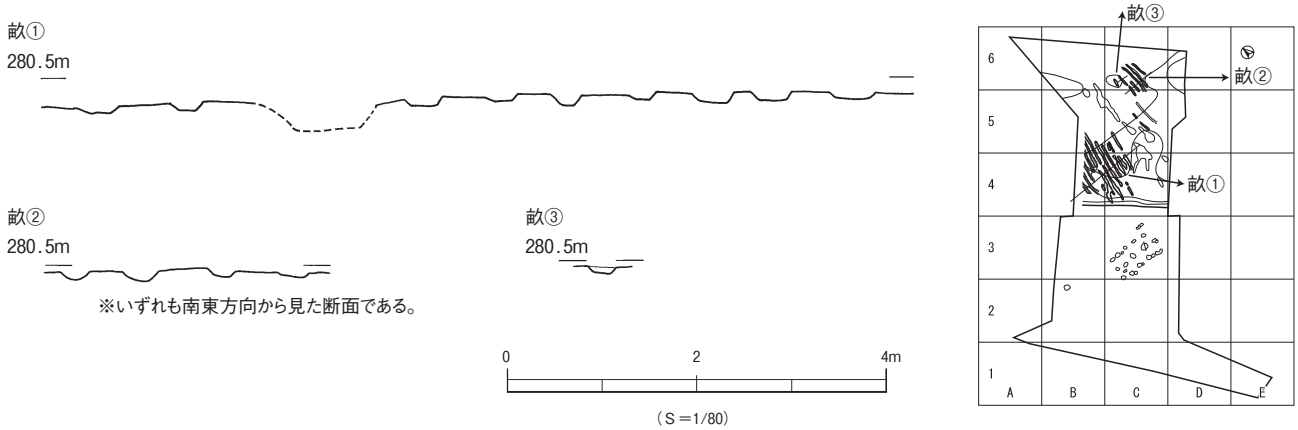
いずれの畝も主軸はほぼ南北方向である。埋土は褐色土で,中世以降の帯状硬化面（一部波板状凹凸面を含む）に切られる。


不定形土坑2
褐色土
280.2m
280.2m
280.2m
にぶい褐色土
炭化物（直径 1cm 以下）
を含む
黄色土ブロック混にぶい褐色土
炭化物（直径5mm 以下）を含む
不定形土坑1
280.7m
280.7m
不定形土坑3
280.4m
280.4m
0
2m
(S=1/40)
6
5
4
3
2
1
A
B
C
D
E
土坑1
土坑2
土坑3
1 グリッド10m

第11図　不定形土坑


不定形土坑 5
樹根
280.4m
黒褐色土
黒褐色土
褐色土
にぶい褐色土
280.4m
280.4m
やや暗い黄褐色土
280.4m
黒褐色土
不定形土坑6
280.5m
280.5m
不定形土坑4
0
2m
(S=1/40)
6
5
4
3
2
1
A
B
C
D
E
土坑4
土坑6
土坑5
1グリッド10m
279.4m
279.4m

第12図　不定形土坑②



第13図　畝状遺構断面図

（3）遺物

本遺跡では古代の遺物が中心となるが，第14図に示すように当該時期の遺物は本遺跡のほぼ全域から出土している。特筆すべきは99で，これは後述するように須恵器の小壷であるが，20ｍ以上離れて接合している。　また，Ｃ－２・３区及びＣ－４区に遺物の集中があり，かつその周囲で接合している例もみられる。Ｃ－２・３区には掘立柱建物が検出されているので，この建物との関連性が窺える。Ｃ－４区については，畝状遺構が検出されているが，生活遺構ではなく生産遺構であると考えられる遺構であるので，検討を要するものといえよう。以下に本遺跡から出土した遺物について分類に沿って詳述する。

①　土器（土師器）

・甕Ⅰ類（13～29）

外面を最終的にケズリ・ナデなどで丁寧に仕上げるもの。内面については基本的に頸部から下はヘラケズリによる器面調整が施される。中には内面にハケメ(工具痕)の痕跡が残るもの（24）もある。

口径によって，大型（13～15・口径25㎝以上）・中型（16～25・口径18～25㎝未満）・小型（26と27・口径16㎝未満）のおおよそ３種類に細分が可能である。

・甕Ⅱ類（30～38）

外面にハケメ・ケズリ・ナデの痕跡が残るもので，特にハケメが明瞭なもの。少数であるが，外面にタタキとみられる痕跡が残るものもある。

33は頸部外面以下に鋸歯状ないしは綾杉状にハケメを施すもので，全体的に赤みが強く他の土器とは印象が異なるものである。38は外面には基本的に斜め方向のハケメが残るものであるが，胴部下半の一部にはタタキとみられる痕跡が残る。そのため，この土器に関しては外面の拓本を掲載した。

・甕Ⅲ類（39～41）

底部を一括した。底面までハケメがみられるもの(39)，外面は丁寧なナデが施され，内面にはケズリがみられるものがある。

・坏（42～56）

底部に回転ヘラ切りの痕跡が残るものである。いずれもわずかに上げ底となっている。また，底部が残存していないものでも体部が直線的なものは坏に含めた。この中で特に42・43については，体部の底部付近について横方向のヘラケズリを施すもので，９世紀中頃の特徴を有するものである。51・52については，51が小型椀，52が蓋・皿である可能性も考慮されるものであるが，全形が明らかでないので残存部の中で最も形態が類似する「坏」に分類した。

・椀（57～61）

柱状高台（充実高台）を有するもの（57・58）と，通常の高台を有するもの（59～61）がある。通常の高台を有するものはいずれも高台部分が外れてしまっている。

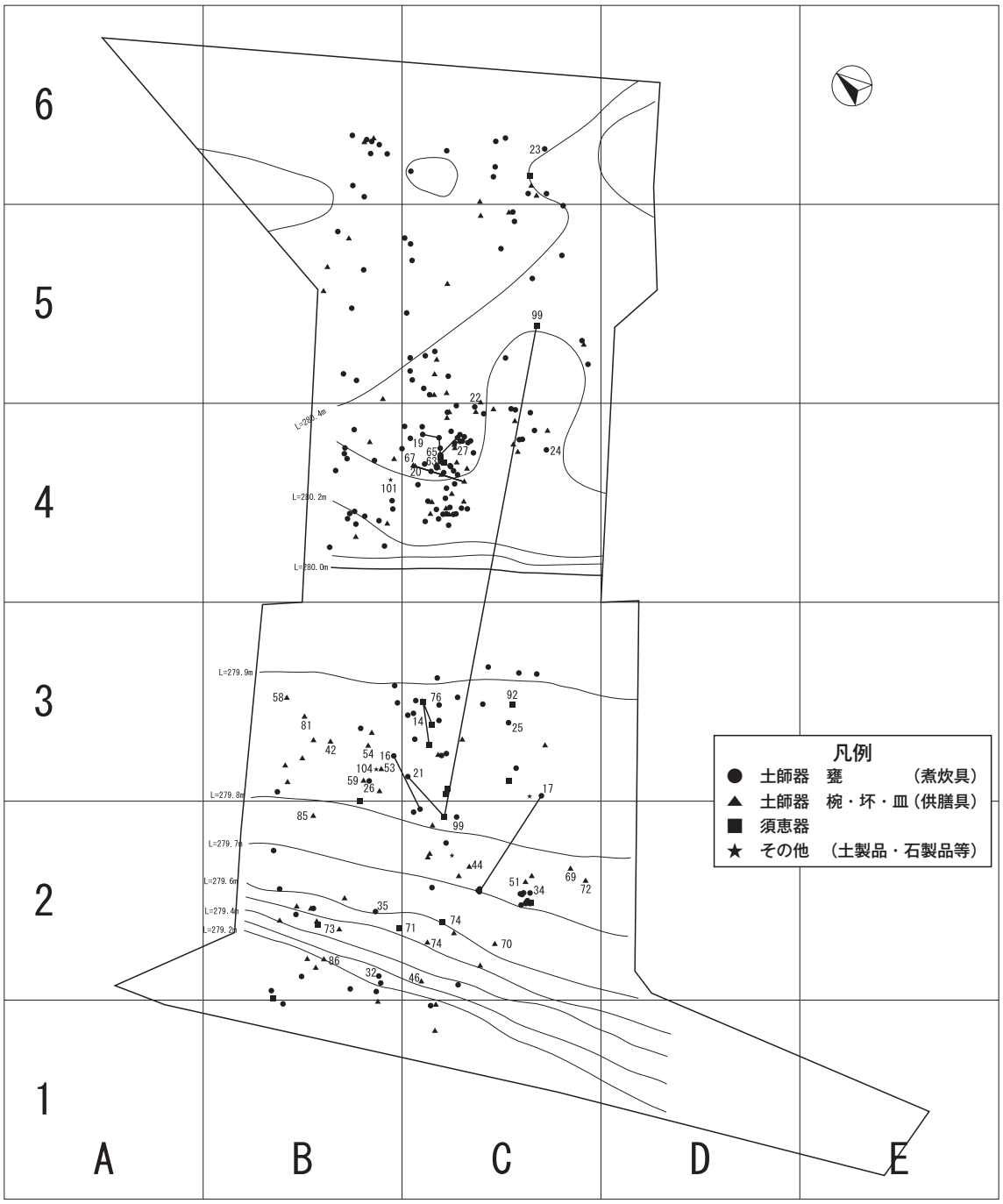
59は，比較的器壁の厚いもので，鉢の可能性も考慮されるが，残存部の状況から器高が他の椀とそれほど変わらないと想定されるので，椀に分類した。

・その他（62）

62は，底部の一部のみの残存であるので全形は明らかではない。上記の分類のいずれにもあてはまらないもので，鉢の可能性があるものである。

・黒色土器椀（63～75）

全国規模では黒色土器にはＡ類とＢ類があり，Ａ類は内面のみ（内黒土師器）が，Ｂ類は内外面が黒色のものを指す。本遺跡では，Ａ類のみが存在する。また，本来は皿・鉢などの器種も存在するが，本遺跡では椀のみが確認されるにとどまったため，「黒色土器椀」として分類した。



第14図　古代遺物出土状況図　　1グリッド10m

体部はやや湾曲するもので,基本的には高台を有する。内面にはヘラ状工具によってミガキが施される。ただし,本遺跡で発見されたものは特に内面が風化しているものが多い。また，土師器椀と同様に高台の根本部分から外れてしまっているものが多い。また，一部には高台部分のみ赤色を呈するものもみられる（64・71～75，巻頭カラー写真参照)。

・ヘラ書土器・刻書土器（76～84）

底部外面に「十（もしくは×)」またはそれに類似する記号ないしは文字が，焼成前にヘラ状工具によって施されたものである。土師器坏（76～79)・椀（80・82)，黒色土器椀（81・83・84）のいずれにもみられる。ただし，85のみは体部外面に施される。82は，他よりも太いヘラ書で,「ナ」にも類似するものである。

83・84については一見すると,「○に十」としがちなものであるが,「十」の周囲を巡る「○」部分は実は高台を貼り付けるためのものであり,「ヘラ書」とは異なるものである。

また，１点のみ体部外面に鋭利な工具によって垂直方向や斜め方向の数条の直線を施された「刻書土器」(焼成後の線刻）とみられるものもある。

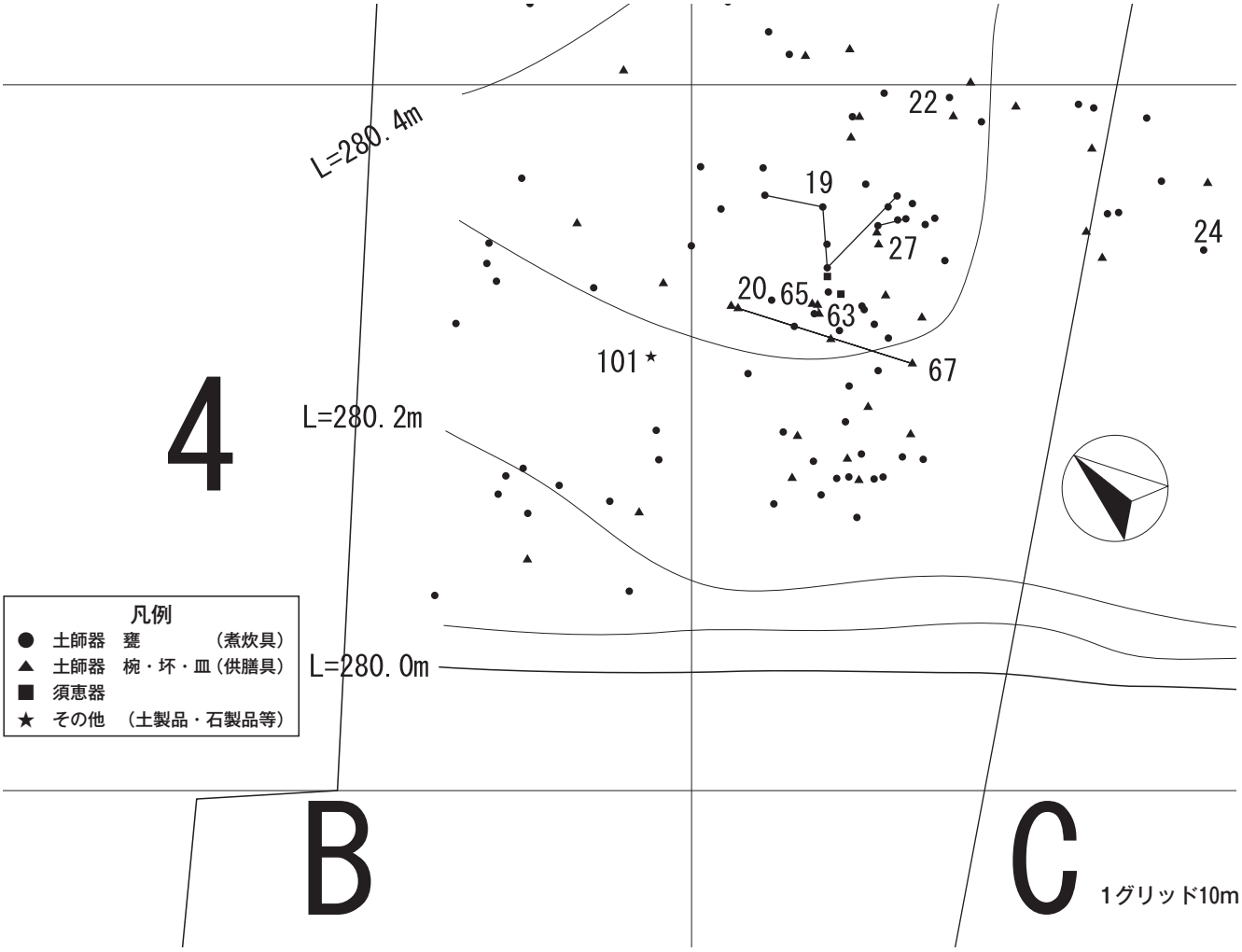
焼塩土器（87～91）

外面にはユビオサエ・ナデが，内面には目の粗い布目痕が残るものである。器形は円錐状を呈する。全体的にあまいつくりで残存状況は良好ではない。この中で90については，外面に自然釉がわずかに付着するので窯で焼成されたものであることが理解される。

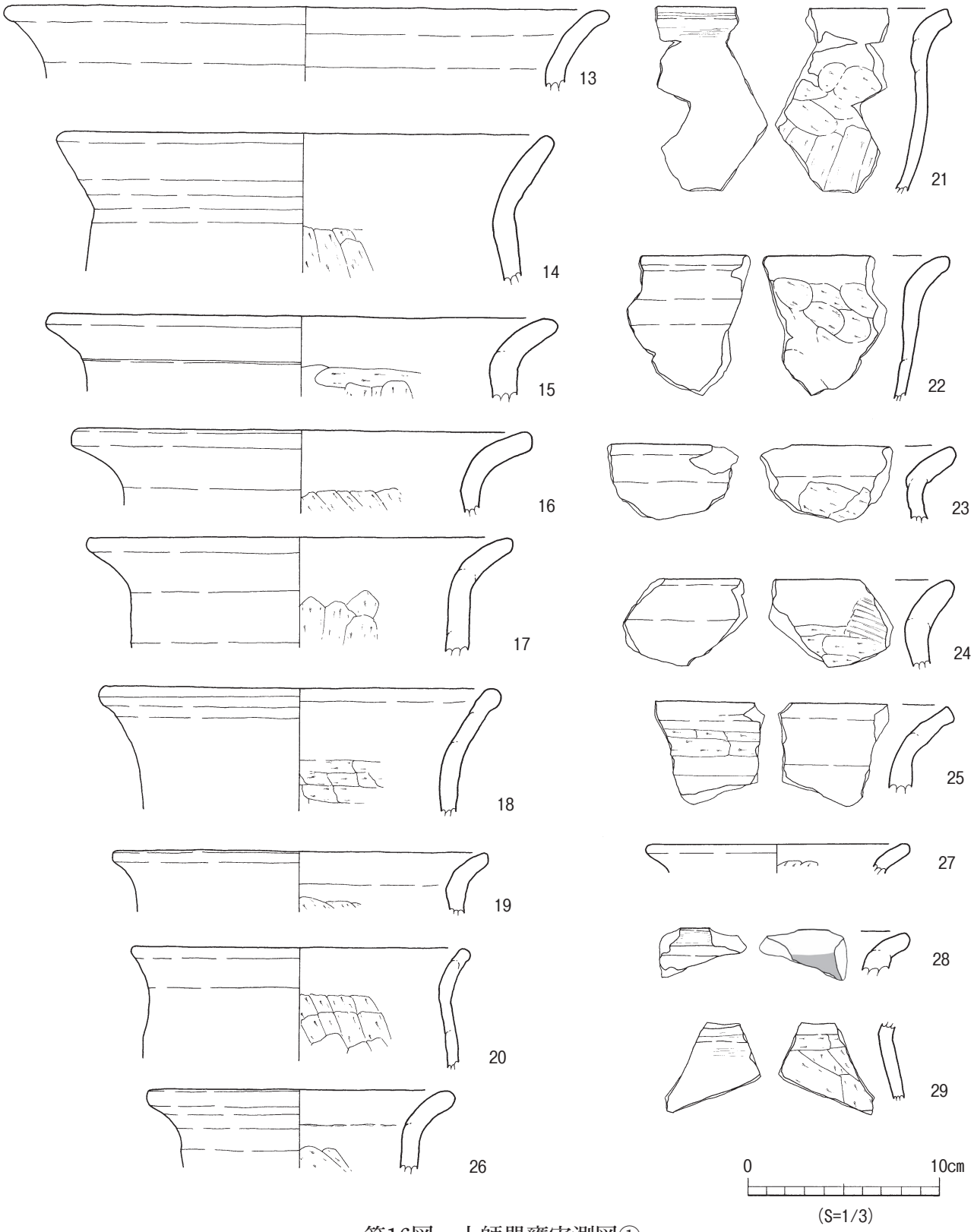
② 須恵器（92～100）

・甕（92～95）

外面には格子目ないしは平行タタキ目が，内面には同心円状（青海波）ないしは放射状の当て具痕が施される



第15図　C－4区周辺拡大図

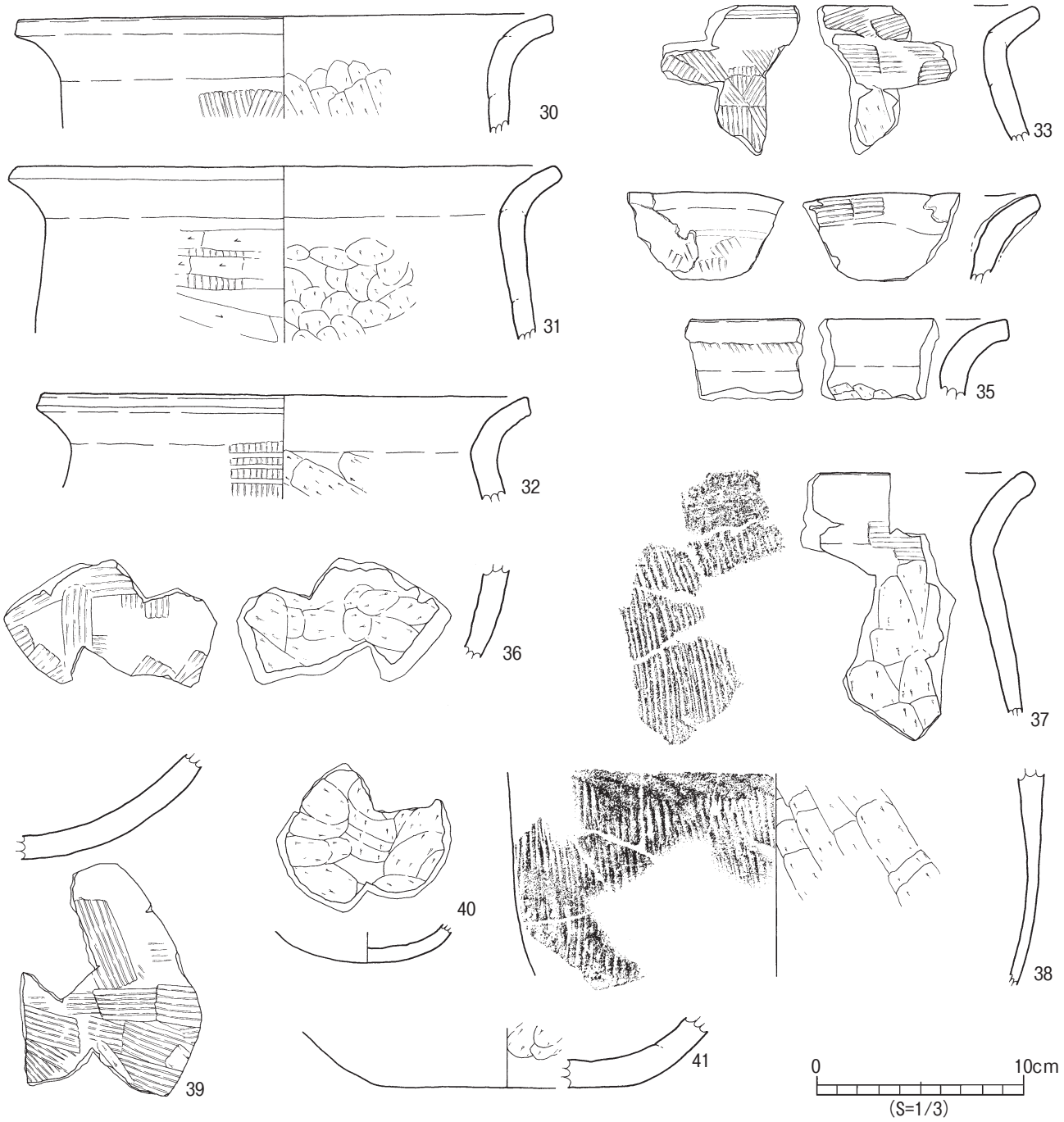


第16図　土師器甕実測図①

ものである。内面アテ具痕は，92・94・95が同心円状，93が放射状である。また，93の外面は一見すると格子目タタキ目にみえるが，よく観察すると平行タタキ目が縦横に施されたものであることが理解される。

・その他（96～100）

壺の頸部（96），瓶の口縁部（97），碗（98），小壺（99・100）などがある。99は頸部以下がほぼ完形に復元できるもので，底部外面にはヘラケズリが観察される。



第17図　土師器甕実測図②

③　その他（軽石製品など）

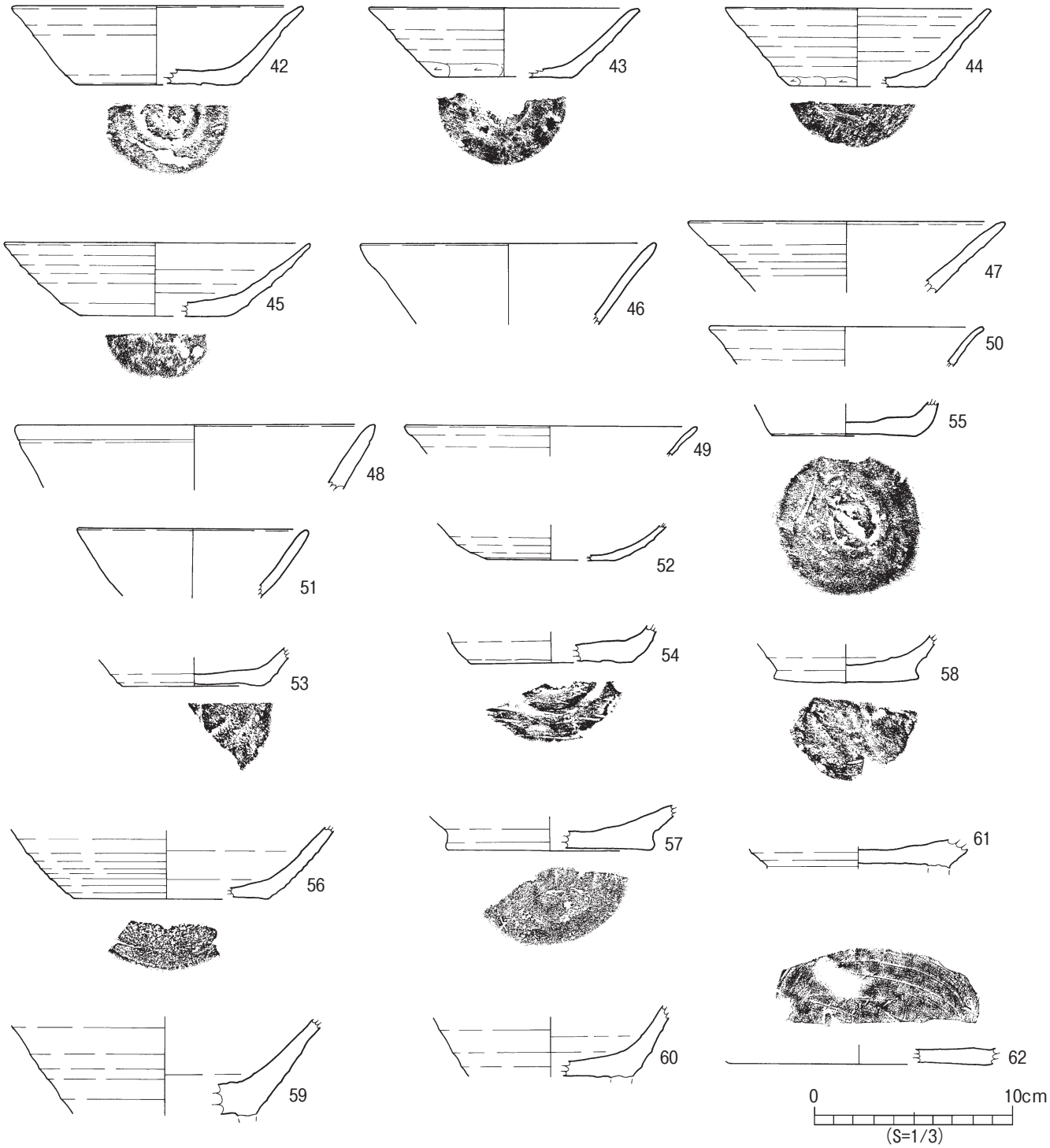
・土製品（101～103）

土錘・土製紡錘車がある。101は管状を呈するもので土錘である。穿孔されているが，孔はまっすぐではなく，断面では「くの字」となるもので，両方からそれぞれ穿孔されたことが窺えるものである。102・103は土製紡錘車で，県内において類例の多い土師器椀・坏底部の転用品ではなく，当初から紡錘車として製作されたものである。

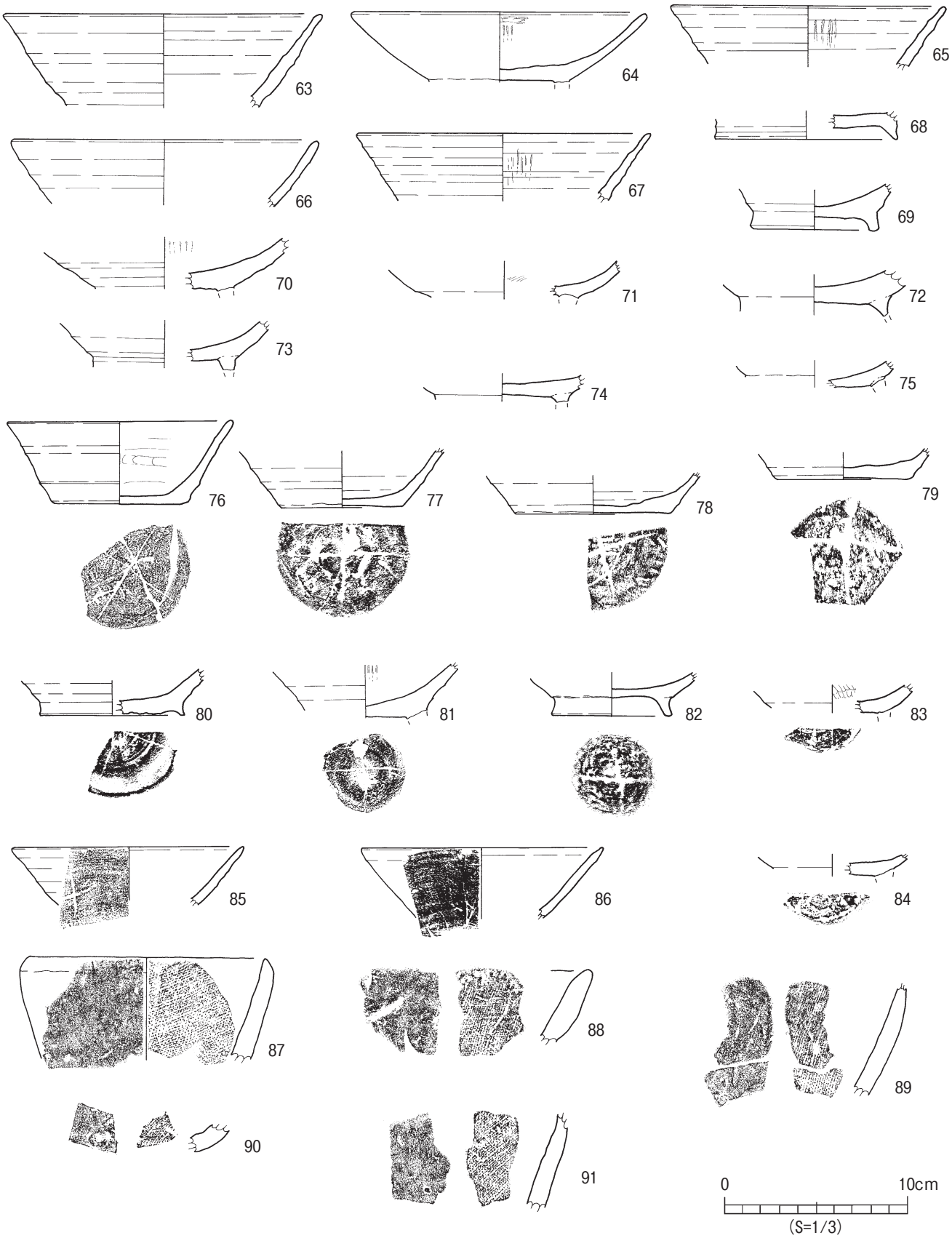
第３節　その他の調査

（１）古墳時代以前の調査

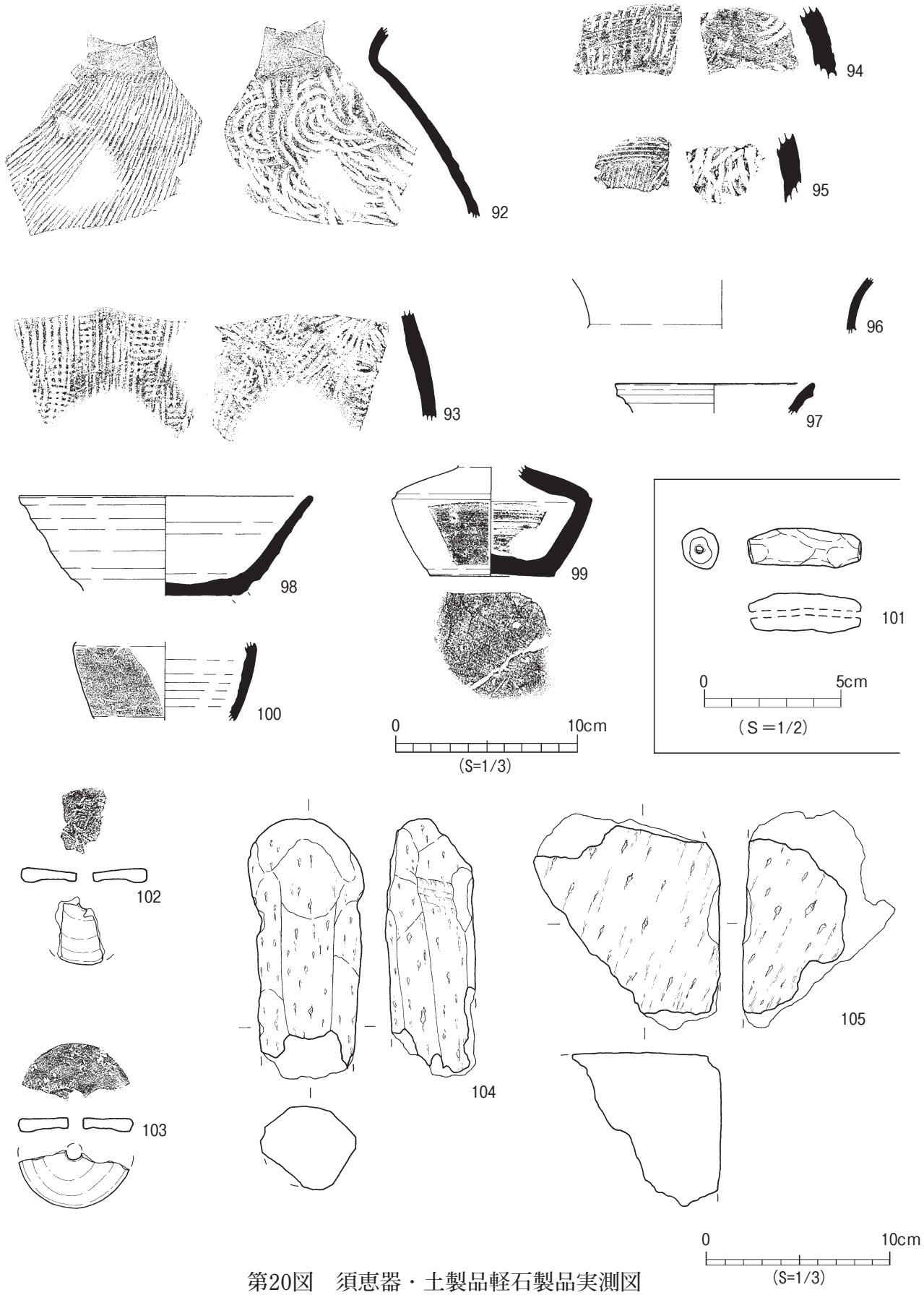
当該時期の遺構は発見されなかったが，若干の遺物が出土した。多くは上層の遺物の沈み込みとみられるが，これらの遺物の中には，古墳時代の土器，縄文時代の石器なども含まれる。ここでは，これらを「古墳時代以前」



第18図　土師器坏・椀ほか実測図



第19図　黒色土器椀・文字資料・焼塩土器実測図



第20図　須恵器・土製品軽石製品実測図

表5　古代出土遺物観察表

挿図No.	No.	取上No.	出土区	層位	類別	器種	部位	器高(cm)			色調		器面調整		胎土				備　考
								器高	口径	底径	内面	外面	内面	外面	石英	長石	角閃	他	
第16図	13			Ⅲ	土器	甕	口縁部		31.8		橙色	橙色	ヘラケズリ	ナデ		○	○		
	14	42	C-3	Ⅰ・Ⅲ	土器	甕	口縁部		26.0		にぶい褐色	にぶい赤褐色	ヘラケズリ	ナデ		○	○		外面に刻書あり
	15			Ⅲ	土器	甕	口縁部		26.6		赤褐色	赤褐色	ヘラケズリ	ナデ		○	○	礫・小石	
	16	9・51	B-3・C-2	Ⅲ	土器	甕	口縁部		24.2		橙色	橙色	ヘラケズリ	ナデ		○	○	礫・小石	
	17	89・103	C-2・3	Ⅲ	土器	甕	口縁部		22.4		橙色	明赤褐色	ヘラケズリ	ナデ		○	○	礫・小石	
	18			Ⅱ・Ⅲ	土器	甕	口縁部		21.0		にぶい赤褐色	橙色	ヘラケズリ	ナデ		○	○		
	19	380・381・388・405	C-4	Ⅲa・Ⅲb	土器	甕	口縁部		19.6		褐色	褐色	ヘラケズリ	ナデ		○	○	礫・小石	
	20	268	C-4	Ⅱ	土器	甕	口縁部		17.6		にぶい赤褐色	赤褐色	ヘラケズリ	ナデ		○	○	礫・小石	
	21	5・8	C-2・3	Ⅱ	土器	甕	口縁部～胴部				黒褐色	明赤褐色	ヘラケズリ	ナデ		○	○	礫・小石	スス付着
	22	365	C-4	Ⅲa	土器	甕	口縁部				にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	ヘラケズリ	ナデ	○	○	○	礫・小石	
	23	346	C-6	Ⅲa	土器	甕	口縁部				黒褐色	黒褐色	ヘラケズリ	ナデ		○	○		
	24	373	C-4	Ⅲa	土器	甕	口縁部				明褐色	褐色	ヘラケズリ・ハケメ	ナデ		○	○	礫・小石	
	25	91	C-3	Ⅲ	土器	甕	口縁部				にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	ナデ	ヘラケズリ・ナデ		○	○	礫・小石	
	26	12	B-3	Ⅱ	土器	甕	口縁部		16.0		橙色	にぶい赤褐色	ヘラケズリ	ナデ		○	○	礫・小石	
	27	384・402	C-4	Ⅲa・Ⅲb	土器	甕	口縁部		13.8		にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	ヘラケズリ	ナデ		○	○		
	28			Ⅲ	土器	甕	口縁部				にぶい褐色	褐色	ナデ	ナデ		○	○	礫・小石	
	29			Ⅲ	土器	甕	胴部				暗赤褐色	赤褐色	ヘラケズリ	ナデ		○	○		
第17図	30			Ⅰ・Ⅱ	土器	甕	口縁部		26.0		にぶい褐色	橙色	ヘラケズリ	ハケメ・ナデ・ヘラケズリ		○	○	礫・小石	
	31			Ⅱ・Ⅲ	土器	甕	口縁部		26.8		橙色	橙色	ヘラケズリ	ハケメ・ナデ		○	○	礫・小石	
	32	133	B-3	Ⅱ・Ⅲ	土器	甕	口縁部		24.0		橙色	橙色	ヘラケズリ	ハケメ・ナデ	○	○	○	黒曜石	
	33			Ⅲ	土器	甕	口縁部				赤褐色	赤褐色	ヘラケズリ・ハケメ	ハケメ・ナデ		○	○	礫・小石	
	34	72	C-2	Ⅲ	土器	甕	口縁部				赤褐色	にぶい赤褐色	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ		○	○	礫・小石	カマドの可能性あり
	35	120	B-2	Ⅲ	土器	甕	口縁部				にぶい褐色	にぶい褐色	ヘラケズリ	ハケメ・ナデ		○	○	礫・小石	コゲ付着
	36				土器	甕	胴部				にぶい赤褐色	灰褐色	ヘラケズリ	ハケメ・ナデ	○	○	○	礫・小石	
	37			Ⅱ	土器	甕	口縁部				橙色	橙色	ヘラケズリ・ハケメ	ハケメ・ナデ	○	○	○	礫・小石	
	38			Ⅲ	土器	甕	胴部				にぶい褐色	にぶい褐色	ヘラケズリ	ハケメ・ナデ	○	○	○	黒曜石・小石	
	39				土器	甕	底部				橙色	橙色	ヘラケズリ	ハケメ・ナデ		○	○	礫・小石	内面ケズリは風化により摩滅
	40			Ⅱ・Ⅲ	土器	甕	底部				にぶい黄褐色	明褐色	ヘラケズリ	ナデ	○	○	○		
	41			Ⅱ・Ⅲ	土器	甕	底部			12.0	赤褐色	赤褐色	ヘラケズリ	ナデ		○	○	礫・小石	
第18図	42	47	B-3	Ⅲ	土器	坏	完形	4.0	14.6	8.0	にぶい橙色	橙色	ナデ	ナデ		○	○	赤色粒	
	43			Ⅲ	土器	坏	完形	3.5	13.6		橙色	橙色	ナデ	ナデ・ケズリ					
	44	82	C-2	Ⅲ	土器	坏	完形	4.0	13.4	7.0	橙色	橙色	ナデ	ナデ・ケズリ				赤色粒	
	45			Ⅲ	土器	坏	完形	3.8	15.6	7.4	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ			○		
	46	131	C-2	Ⅲ	土器	坏	口縁部		14.8		浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ		○		赤色粒	
	47			Ⅲ	土器	坏	口縁部		16.0		にぶい黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ				赤色粒	
	48			Ⅱ・Ⅲ	土器	坏	口縁部		18.0		にぶい橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ・ケズリ				赤色粒	
	49			Ⅲ	土器	坏	口縁部		14.8		橙色	橙色	ナデ	ナデ					赤色土器
	50				土器	坏	口縁部		14.5		橙色	橙色	ナデ	ナデ		○			赤色土器
	51	77	C-2	Ⅲ	土器	坏	口縁部～胴部		11.8		橙色	橙色	ナデ	ナデ		○	○	赤色粒・小石	赤色土器・分析
	52			Ⅱ	土器	皿か	底部			6.4	橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ・ケズリ		○			やや赤色。
	53	10	B-3	Ⅱ	土器	坏	底部			7.0	にぶい黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ		○		赤色粒	
	54	17	B-3	Ⅲ	土器	坏	底部			7.8	にぶい橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ		○	○		
	55			Ⅲ	土器	坏	底部			7.2	にぶい黄橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ		○	○	赤色粒	見込みわずかに黒色化。ススか
	56			Ⅲ	土器	坏	底部			9.6	橙色	橙色	ナデ	ナデ		○			赤色土器
	57			Ⅲ	土器	埦	底部			10.2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ		○			柱状高台（充実高台）
	58	16	B-3	Ⅲ	土器	埦	底部			7.4	橙色	橙色	ナデ	ナデ		○		赤色粒	
	59	12	B-3	Ⅲ	土器	埦・鉢	底部			9.3	淡黄色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ・ケズリ				赤色粒・小石	
	60			Ⅲ	土器	椀	底部			8.4	明黄褐色	浅黄橙色	ナデ	ナデ・ケズリ		○		赤色粒	赤色土器
	61			Ⅲ	土器	坏	底部			9.2	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ・ケズリ			○	赤色粒	
	62			Ⅲ	土器	鉢か	底部			13.2	浅黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ		○			内面スス・わずかに上げ底
第19図	63	271・310	C-4	Ⅱ	黒色土器	埦	口縁部		17.6		黒色	にぶい黄橙色	ミガキ	ナデ		○	○	赤色粒	内黒
	64			Ⅱ・Ⅲ	黒色土器	埦	口縁～底部		16.0	7.6			ミガキ	ナデ				赤色粒	内黒・赤色高台か
	65	270	C-4	Ⅱ	黒色土器	埦	口縁部		15.0		黒色	浅黄橙色	ミガキ	ナデ		○			内黒
	66			Ⅱ・Ⅲ	黒色土器	埦	口縁部		16.4		黒色	にぶい橙色	ミガキ	ナデ					内黒
	67	267・296・311	C-4	Ⅱ	黒色土器	埦	口縁部		16.0		黒色	にぶい黄橙色	ミガキ	ナデ				赤色粒	内黒
	68			Ⅱ・Ⅲ	黒色土器	埦	底部			10.0	黒色	灰白色	ミガキ	ナデ				赤色粒	内黒
	69	146	C-2	Ⅲ	黒色土器	埦	底部			7.0	褐灰色	浅黄色	ミガキ	ナデ・ケズリ				赤色粒	内黒
	70	117	C-2	Ⅲ	黒色土器	埦					黒色	にぶい黄橙色	ミガキ	ナデ				赤色粒	内黒
	71	107	B-2	Ⅱ	黒色土器	埦	底部			8.0	黒色	にぶい黄橙色	ミガキ	ナデ				赤色粒	内黒・赤色高台
	72	145	C-2	Ⅲ	黒色土器	埦	底部			8.0	橙色	赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	赤色粒	内黒・赤色高台
	73	109	B-2	Ⅱ	黒色土器	埦	底部			7.8	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	ミガキ	ナデ		○	○		内黒・赤色高台
	74	105・119	C-2	Ⅲ	黒色土器	埦	底部			7.2	黒色	浅黄色	ミガキ	ナデ		○		赤色粒	内黒・赤色高台
	75			Ⅱ	黒色土器	埦	底部			6.0	黒色	橙色	ミガキ	ナデ		○	○		内黒・赤色高台
	76	7・22・41	C-3	Ⅱ・Ⅲ	土器	坏	完形	4.5	12.4	7.2	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ					底部外面にヘラ書「＋」
	77			Ⅲ	土器	坏	底部			6.6	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ				赤色粒	底部外面にヘラ書「＋」。見込みわずかに黒色化。ススか
	78				土器	坏	底部			7.0	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ				赤色粒	底部外面にヘラ書「＋」。内面風化。
	79			Ⅲ	土器	坏	底部			8.4	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ				赤色粒	底部外面にヘラ書「＋」
	80			Ⅲ	土器	坏	底部			8.0	橙色	橙色	ナデ	ナデ				赤色粒	底部外面にヘラ書「＋」
	81	15	B-3	Ⅲ	黒色土器	埦	底部				黒色	橙色	ミガキ	ナデ				赤色粒	内黒・底部外面にヘラ書「＋」
	82			Ⅲ	黒色土器	埦	底部			6.5	黒色	浅黄橙色	ミガキ	ナデ				赤色粒	内黒・底部外面にヘラ書「＋」
	83			Ⅰ	黒色土器	埦	底部			4.8	黒色	浅黄橙色	ミガキ	ナデ			○	赤色粒	内黒・底部外面にヘラ書「＋」
	84			Ⅱ	黒色土器	埦	底部			4.5	褐灰色	灰黄褐色	ミガキ	ナデ					脚部欠・底部外面にヘラ書「＋」
	85	98	B-2	Ⅲ	土器	埦	口縁部		12.8				ナデ	ナデ				赤色粒	胴部外面にヘラ書「＋」。分析。
	86	137	B-2	Ⅲ	土器	埦	口縁部		13.2		浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ				赤色粒	胴部外面に刻書「＋」。
	87			Ⅲ	焼塩土器	鉢	口縁部		12.8		橙色	橙色	布目痕	ユビオサエ・ナデ					
	88			Ⅲ	焼塩土器	鉢	口縁部				橙色	橙色	布目痕	ユビオサエ・ナデ					
	89			Ⅱ	焼塩土器	鉢	胴部				にぶい黄橙色	にぶい橙色	布目痕	ユビオサエ・ナデ					外面に自然釉付着
	90			Ⅲ	焼塩土器	鉢	底部				明赤褐色	にぶい黄橙色	布目痕	ユビオサエ・ナデ					外面に自然釉付着
	91			Ⅲ	焼塩土器	鉢	胴部				橙色	橙色	布目痕	ユビオサエ・ナデ					
第20図	92	34	C-3	Ⅰ・Ⅲ	須恵器	甕	頸部～胴部				褐灰色	黒褐色	同心円アテ具	平行タタキ					
	93			Ⅰ	須恵器	甕	胴部				暗灰黄色	黄灰色	放射状アテ具	平行タタキ				礫・小石	
	94			Ⅱ	須恵器	甕	胴部				褐灰色	褐灰色	同心円アテ具	平行タタキ				黒色粒	
	95				須恵器	甕	胴部				灰黄褐色	にぶい黄褐色	同心円アテ具	平行タタキ				赤色粒	
	96			Ⅰ	須恵器	甕	胴部				黒褐色	黒褐色	ナデ	ナデ					
	97				須恵器	瓶	口縁部			11.0	黒褐色	黒褐色	ナデ	ナデ					
	98			Ⅲ	須恵器	碗	口縁部～底部		16.0	8.0	浅黄色	浅黄色	ナデ	ナデ				礫・小石	高台部分が欠
	99	5・322	C-2・C-5	Ⅲa	須恵器	小壷	胴部～底部			7.0	褐灰色	褐灰色	ナデ	ナデ					
	100			Ⅰ・Ⅲ	須恵器	小壷	胴部				灰色	オリーブ黒色	ナデ	ナデ					
	101	262	B-4	Ⅲ	土製品	土錘						にぶい黄褐色	―	ユビオサエ				礫・小石	穿孔が「くの字」
	102			Ⅲ	土製品	紡錘車			6.8		橙色	橙色	ナデ	ナデ				礫・小石	紡錘車
	103			Ⅲ	土製品	紡錘車			6.0		橙色	橙色	ナデ	ナデ					紡錘車

表6　古代石製品観察表

挿図No.	No.	取上No.	出土区	層位	類別	器高(cm)			備　考
						長さ	幅	厚さ	
第20図	104	10	B-3	Ⅱ	軽石製品	14.0	6.3	4.9	男根状を呈する。
	105				軽石製品	11.0	9.0	8.1	方柱状製品の破片か

のものとして一括して扱う。

遺物

① 石器

本遺跡からは，黒曜石製の石器・剥片や瑪瑙・玉髄系の石材による剥片などが出土した。この中で，明確な石器についてここで扱う。

108は石鏃未製品である。一部に押圧剥離がみられるが，完成に至る前に何らかの理由で廃棄されたものと考えられる。

109は黒曜石製の五角形状の石鏃である。将棋の駒形の形状を呈し，基部には３㎜程度の抉りがみられる。最大長は1.7㎝，最大幅は1.2㎝である。下部に若干の欠損がみられるがほぼ完形である。表面には細かい押圧剥離が多数みられ，側縁は鋸歯状を呈する。

いずれの石材も光沢はみられず，にぶい黒色を呈するもので，若干の不純物を含む黒曜石である。これらの特徴から上牛鼻（薩摩川内市）産の黒曜石の可能性が高いと考えられる。

以上の石器のほかに，瑪瑙・玉髄系の石材を用いた剥片類が出土しているが，明確な石器ではないため，巻末に写真を掲載するのみにとどめた。

② 土器

ここで扱うのは，古墳時代の土器であり，いわゆる「成川式土器」である。その中でも，古墳時代前半期に該当するとみられる土器である。

110は，壷の胴部で，２条の刻み目を有する突帯が巡るものである。本遺跡出土の古墳時代遺物の中でも，古式の様相を持つもので，弥生時代の可能性も含まれるものである。111・112は，甕の頸部付近で，いずれも頸部に突帯が巡るものである。また，頸部内面には明瞭な稜が確認されない。これらの特徴から，東原式土器の可能性が考えられるものである。113は口縁部で，一見すると土師器甕に類似するが，内面にヘラケズリなどが確認されないことから壺形土器とみられるものである。114･115･116は底部である。いずれも上げ底状であるが，116は小型品の底部で色調も他のものよりも赤みが強い。

（２）中世以降の調査の概要

当該時期の遺構は，Ⅲａ層上面で検出されるもので，溝状遺構，帯状硬化面（一部に波板状凹凸面），土坑などがある。

遺物は，青磁・青花・染付・陶器・鉄器・銭貨などがあるが，中には「馬のしりがい」と呼ばれる近代の遺物も含まれている。

① 遺構

土坑，溝状遺構，帯状硬化面が発見された。

ア 土坑

本遺跡からは，中世以降の土坑が13基検出された。いずれの土坑もⅢａ層上面から検出されており，埋土はⅡ層土類似の黒色土である。

これらの土坑群は，おおよそ北西部（Ｂ－４・５・６区）と南西部（Ｂ・Ｃ－２区）の二箇所で検出された。特に，北西部で検出された土坑群には，①桜島を噴出起源とする火山灰土（大正年間あるいは安永年間か）とみられる若干の堆積物がみられる ②南西方向から北西方向に向けてほぼ一直線に並ぶ という共通する特徴がある。また，上記の特徴から新しい時期（ともすれば現代）の遺構の可能性が高いもので，本遺跡の主たる時期である「古代の遺構」ではないため，最低限の調査に留めることとし，北西部の土坑については２基の実測を行うのみとした。

（ア） １号土坑

Ｂ－６区で検出された。ほぼ南西から北東方向に向かう長楕円形状を呈する。最大長205㎝，最大幅95㎝である。検出面からの深さは最深で35㎝である。底面には窪みが多く，安定しない部分が多い。

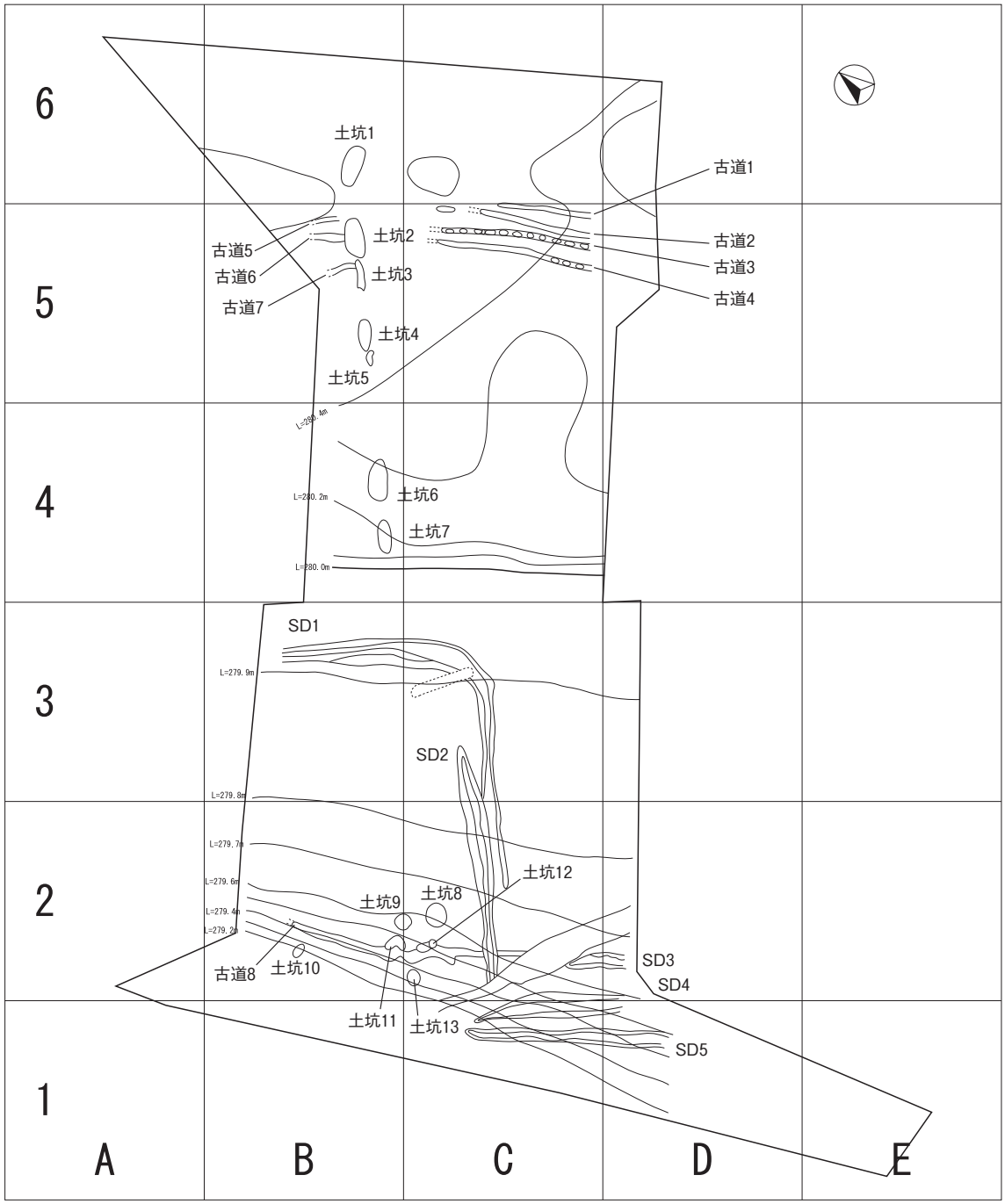
表7 中世以降の土坑一覧

No.	遺構名	検出区	大きさ（cm）		
			最大長	最大幅	深さ
1	１号土坑	Ｂ－６	205	95	35
2	２号土坑	Ｂ－５	190	78	15
3	３号土坑	Ｂ－５	160	42	7
4	４号土坑	Ｂ－５	162	66	21
5	５号土坑	Ｂ－５	78	38	9
6	６号土坑	Ｂ－４	195	100	31
7	７号土坑	Ｂ－４	155	67	39
8	８号土坑	Ｃ－２	120	105	26
9	９号土坑	Ｃ－２	82	78	8
10	10号土坑	Ｂ－２	74	45	19
11	11号土坑	Ｂ－２	98	89	26
12	12号土坑	Ｃ－２	44	37	27
13	13号土坑	Ｃ－２	70	63	7

（イ）　6号土坑

Ｂ－４区で検出された。ほぼ南西から北東方向に向かう卵形を呈する。最大長195㎝，最大幅100㎝である。検出面からの深さは最深で31㎝である。

埋土は上部が一部撹乱を受けていたが，上部から数㎝の位置で10㎝程度の厚さの灰色砂質土の堆積がみられた。この埋土は，安永８（1779）年もしくは大正３（1914）年の桜島噴火に伴う堆積物の可能性がある。下層には軽石を多く含む黒色土が堆積する。これらの埋土はいずれもしまりがなく，容易に掘り上げることが可能であった。遺構内から肥前系染付磁器の猪口（106）が出土しているので，江戸時代の可能性がある。



1グリッド10m

第21図　中世以降の遺構配置図

イ　溝状遺構

５条の溝状遺構が発見された。

（ア）　ＳＤ１

溝状遺構の始点は，調査区外であるので明らかではない。調査区内においては，北西方向から進み，10ｍほど進んだところで南西方向へとほぼ直角にカーブし，７ｍほど進んだところで溝２に切られて不明瞭になるものである。北西端部と南西端部の比高差は21.3㎝である。

（イ）　ＳＤ２

北東方向から南西方向へ一直線に進むもので，12ｍほど進んだところで帯状の攪乱に切られる。その後は不明瞭となるものである。溝１と重なる部分もあるが，溝２が切っていることから溝２の方が新しいことが理解される。北東端部と南西端部の比高差は35.6㎝である。

（ウ）　ＳＤ３

帯状の攪乱を受けているのと，南東部が調査区外へと伸びるため，残りは少ない。北西方向から南東方向へと進むもので，北西端部と南東端部の比高差は5.5㎝である。

（エ）　ＳＤ４

北西方向から南東方向へと進むものである。南東部は調査区外へと伸びるため，全長は不明である。北西端部と南東端部の比高差は１㎝である。

（オ）　ＳＤ５

北西方向から南東方向へと進むものである。南東部は調査区外へと伸びるため，全長は不明である。北西端部と南東端部の比高差は2.5㎝である。

遺物

溝状遺構からは古代～近世にかけての遺物が出土しているが，基本的には小破片であり実測が可能なものはほとんどなかった。107はＳＤ５から出土したものの中で比較的良好なもので，古代の土師器坏である。口縁部内面にはススが付着しているので，灯明皿などとして使用された可能性も考慮される。

ウ　帯状硬化面

８条の古道とみられる帯状を呈する硬化面が発見された。この内７条（帯状硬化面１～７）に関しては，Ｂ・Ｃ－５区に集中して検出された。帯状硬化面３及び４には，ピット状の凹凸面がみられるので，いわゆる「波板状凹凸面」に類似する。また，帯状硬化面５～７は，帯状硬化面１～４のいずれかと連結する可能性が高いが，途中が残っていないため明らかでない。

帯状硬化面８はＢ・Ｃ－２区で検出されており，ＳＤ３と連結する可能性があるが，南東部分が帯状の撹乱を受けているため，明らかではない。

南東側については，里道や他の造成などによるものと考えられる地形改変によって帯状硬化面をはじめとする遺構も削平を受けていた。

③　遺物

117～123は中国製の輸入陶磁器である。青磁・白磁・青花・陶器がある。

117は龍泉窯系の青磁の碗である。胴部のみの残存であるので，全形は明らかではないが，文様と色調などの特徴から大宰府分類のⅣ類・上田分類のＢⅣ類であり，おおよそ15世紀頃とされるものである。118は白磁の碗である。直行する口縁部，色調などの特徴が大宰府分類のⅨ類に類似するもので，12世紀以降とされるものであるが，小破片であるので検討を要する。

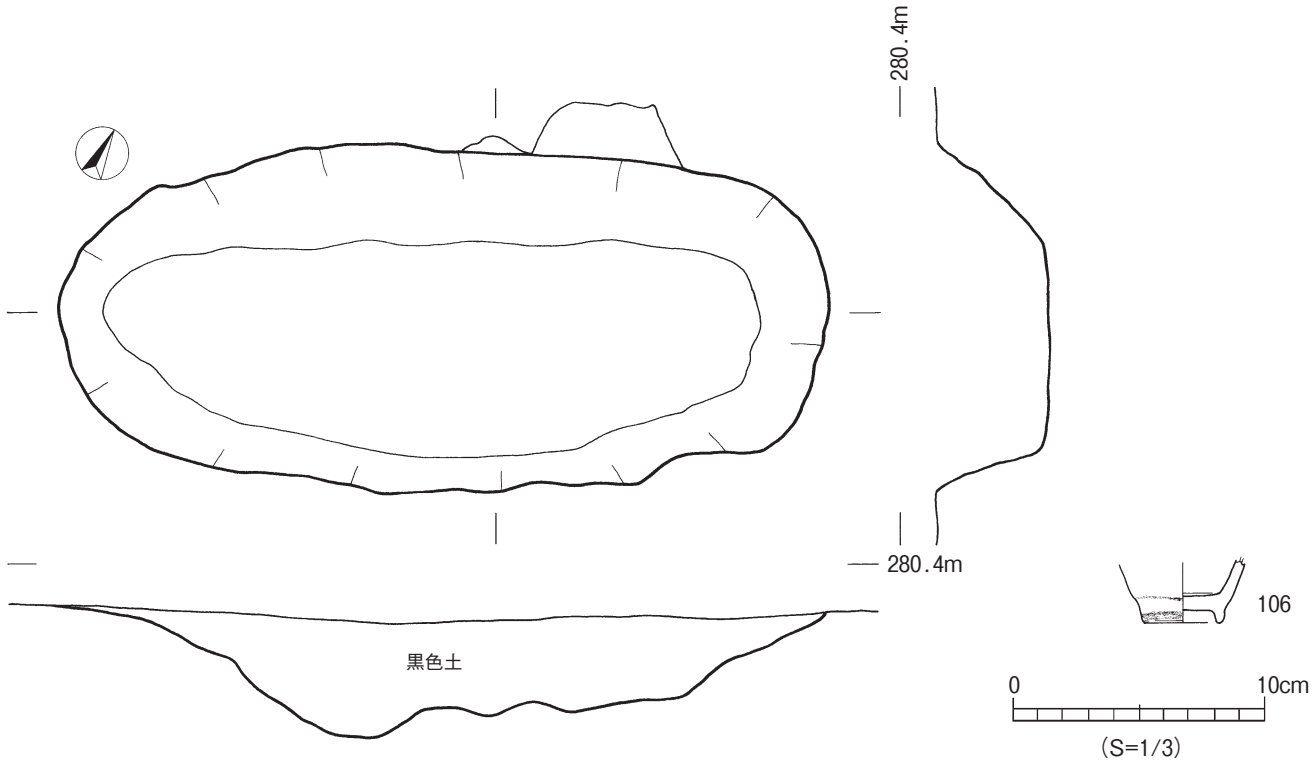
119～122は，青花（中国製の染付）である。景徳鎮窯ないしは漳州窯産の可能性がある。

119・120は，底部が碁笥の形状に類似した上げ底を呈する皿である。外面には芭蕉文が鉅歯状に描かれる。121は碗であるが，口縁部がやや外に開くものである。胎土が良質でないので，漳州窯産の製品の可能性がある。122は袋物の（水注･壷などの器種）の口縁部であり，フタを受ける部分の「返し」がつくものである。外面には「十字唐草文」が描かれる。123は高台脇付近まで厚く釉がかかる磁器の碗で，通称「天目」と呼称されるものである。高台脇部分に明瞭な屈曲部があるが，これは中国製の天目の特徴でもある。

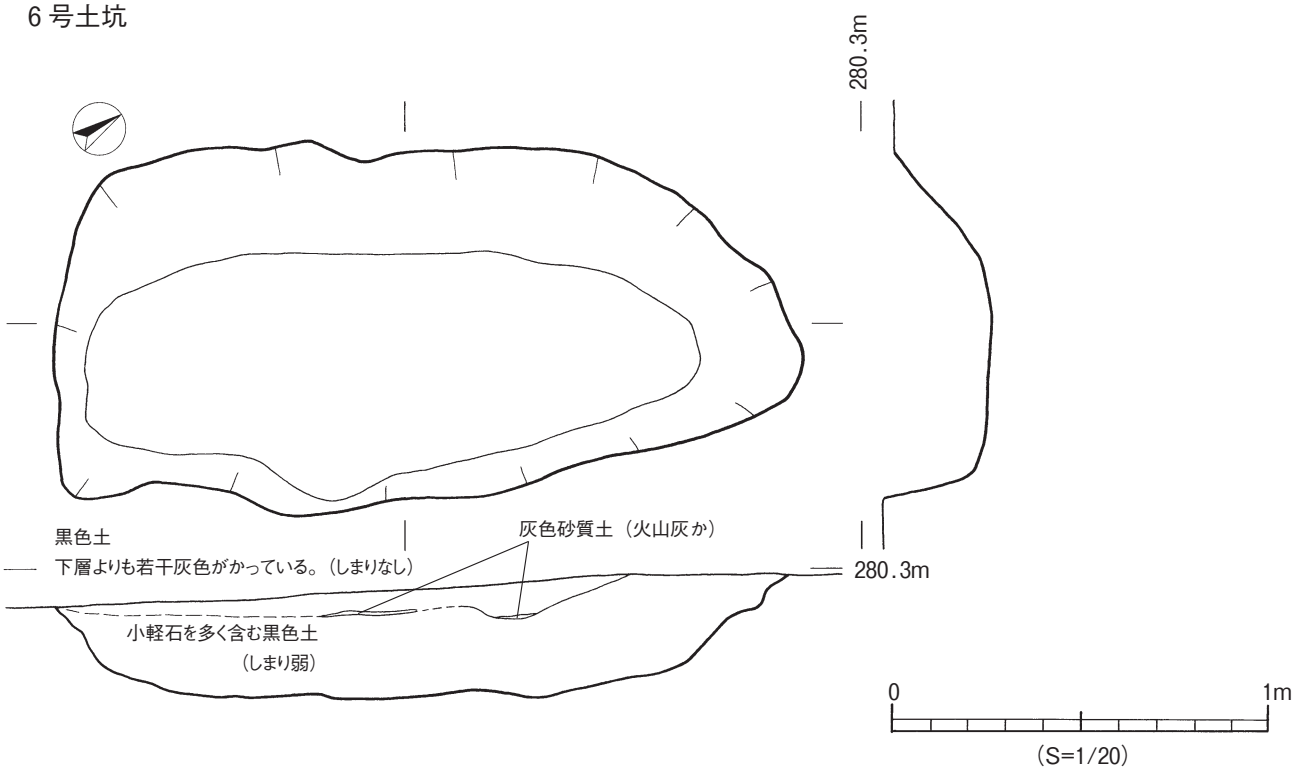
124～127は国産の陶器・土器である。

124は口縁部が強く開くもので，縁が溝状となって周囲をめぐる皿である。肥前系の陶器で，通称「溝縁皿」と呼称されるもので，1600年代から1640年代にかけて生産・流通するものである。125は胴部に突帯をめぐらせる陶磁器の甕である。突帯部分には等間隔にユビオサエ状の押圧が施される。器壁の薄さ，突帯の特徴などから，初期薩摩焼の「堂平窯」（日置市）の製品の可能性がある。126は把手部分であるが，基部と端部に破損が見られる。127は皿もしくは坏状に復元できるもので，外面にはススが付着する。この２点の土器は，接点は確認できなかっ

1号土坑



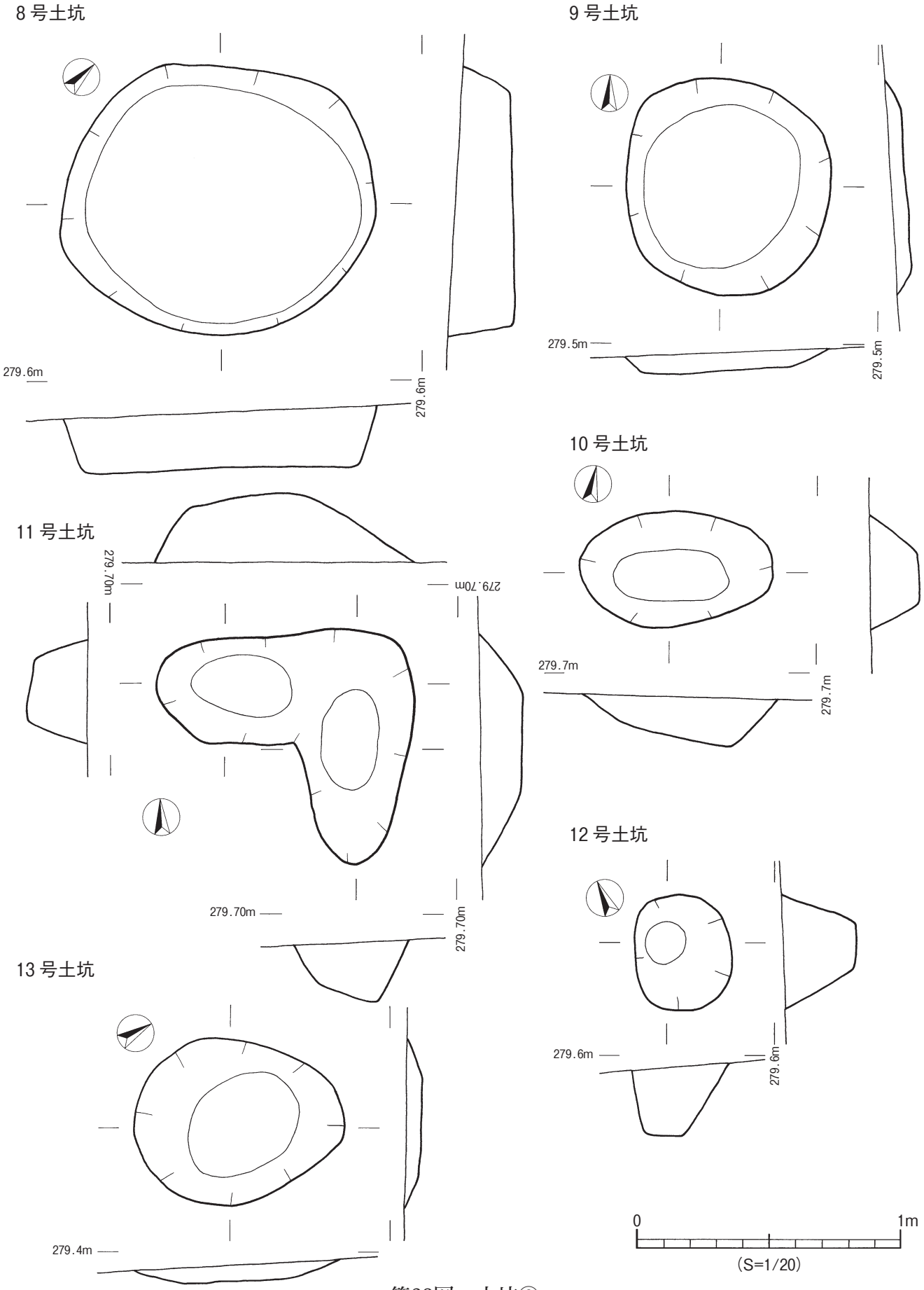
6 号土坑



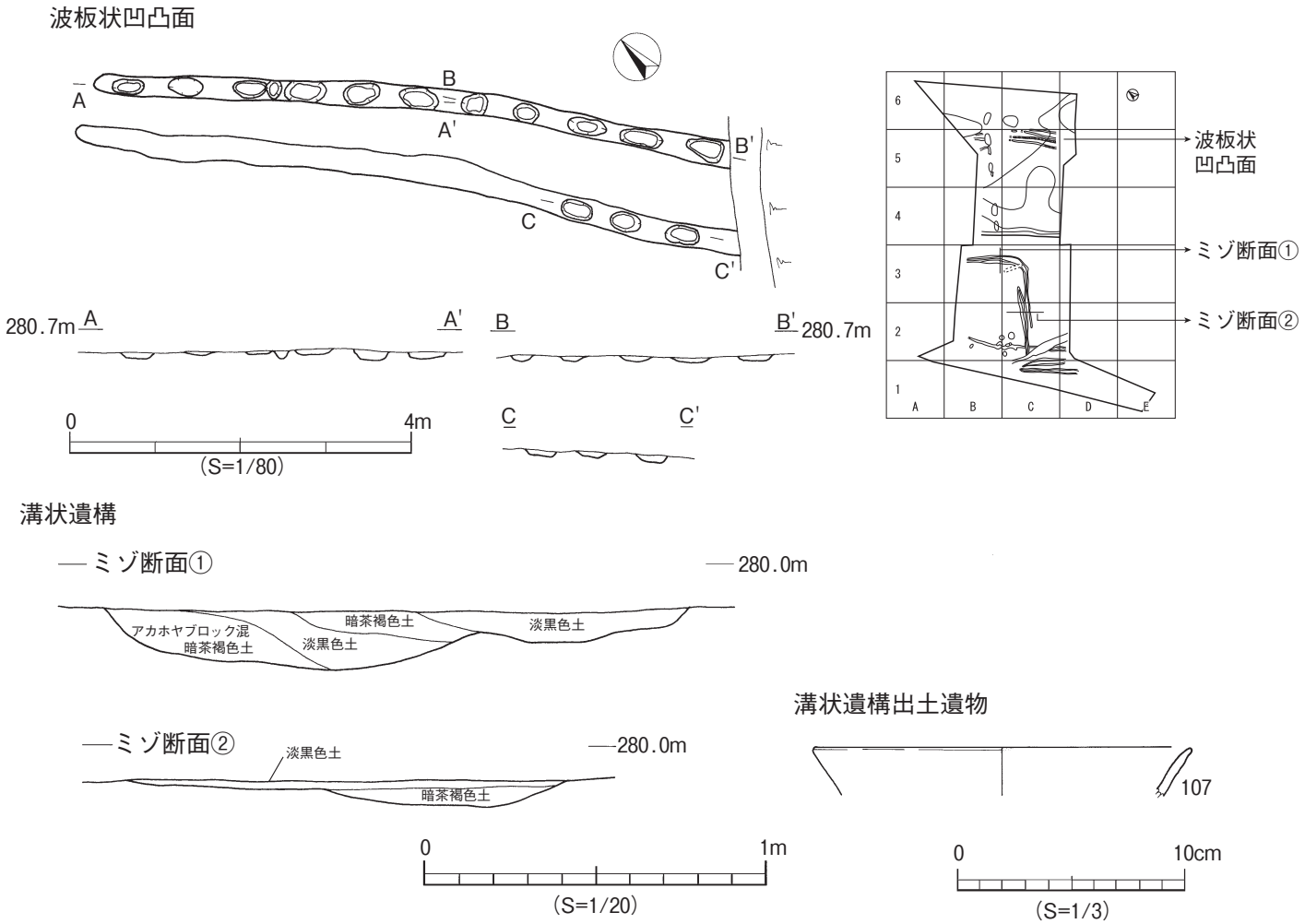
第22図　土坑①

表8　遺構内出土遺物観察表

挿図No.	No.	遺構名	類別	器種	部位	器高(cm)			色調		備　考
						器高	口径	底径	内面	外面	
22	106	土坑14	染付(肥前系)	猪口	底部			3.2	シルバーグレイ	シルバーグレイ	


8 号土坑
279.6m
279.6m
9 号土坑
279.5m
279.5m
10 号土坑
279.7m
279.7m
11 号土坑
279.70m
279.70m
279.70m
279.70m
12 号土坑
279.6m
279.6m
13 号土坑
279.4m
0
1m
(S=1/20)

第23図　土坑②



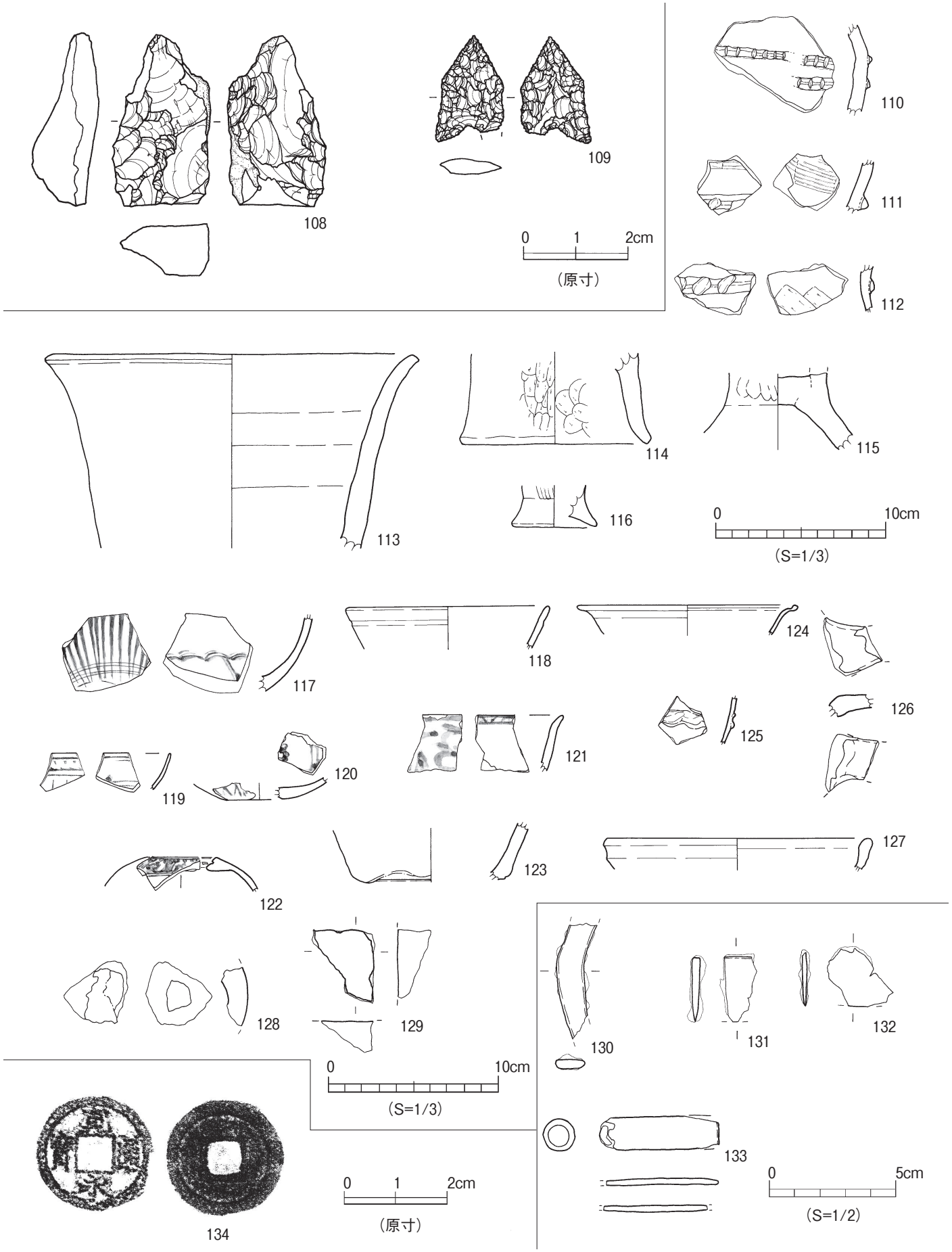
第24図　波板状凹凸面断面図及び溝状遺構断面図

表9　遺構内出土遺物観察表

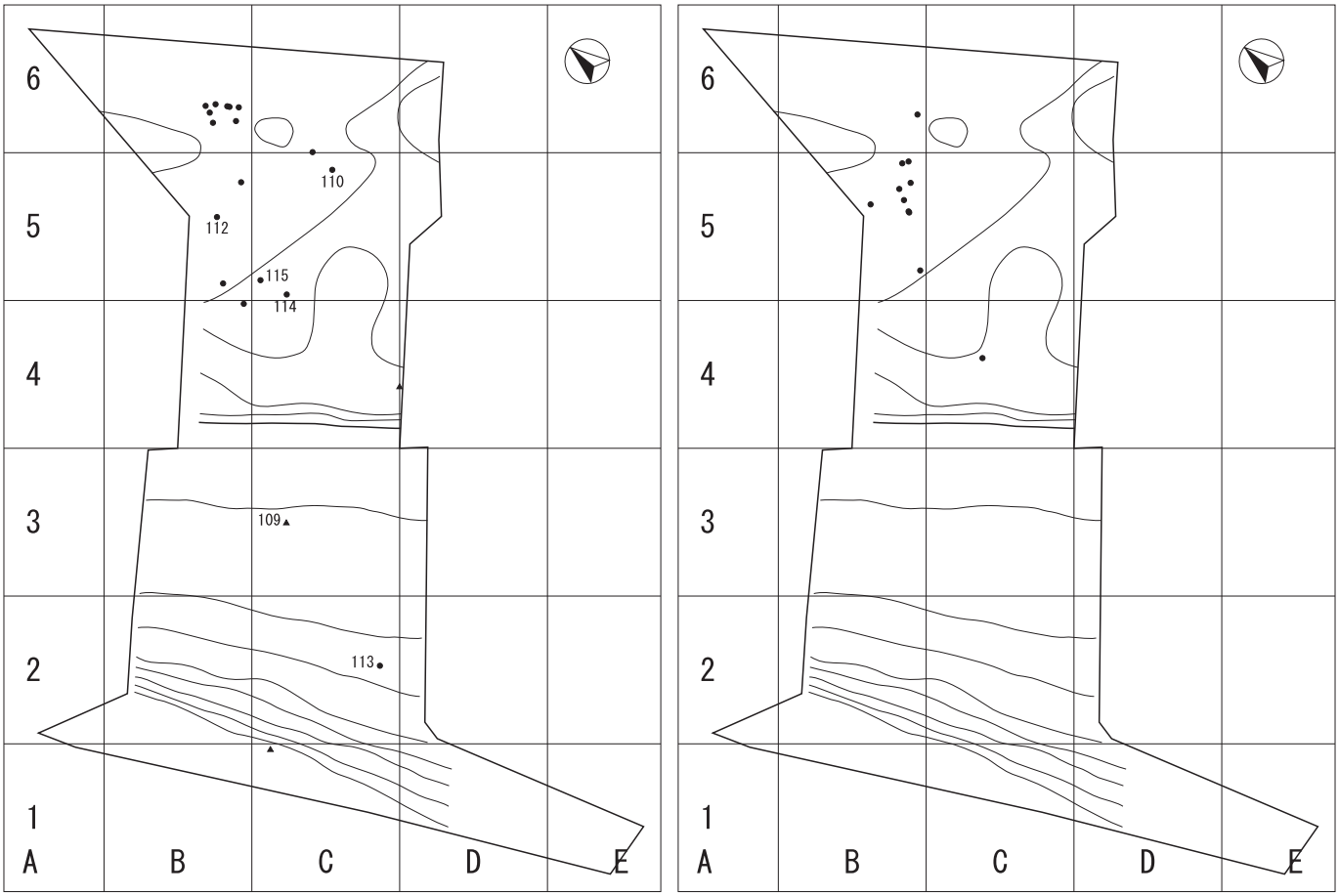
挿図No.	No.	遺構名	類別	器種	部位	器高(cm)			色調		器面調整		胎土				備考
						器高	口径	底径	内面	外面	内面	外面	石英	長石	角閃	他	
24	107	ミゾ5	土器	坏	口縁部		16.6		淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ				赤色粒	口縁部内面にスス付着(古代土器)

たが同一個体の可能性のあるものである。全形はフライパン形を呈するとみられ，「ホウロク」と呼称されるものである。

128は「ふいごの羽口」の破片である。外面にはガラス質の付着がみられる。残存状況が良好でないため，全形は明らかでない。129は石皿もしくは砥石の破片である。残存状況が良好でないため，全形が明らかではないが，表面の窪みに赤色顔料とみられる個体が付着する。第５章において，分析結果を掲載しているが，赤色顔料を調整するための道具（石皿等）の一片と考えられるものである。中世以降のものとしたが，縄文時代に該当する可能性も考慮する必要がある。130・131・132は鉄器である。130は「く」の字形に屈曲する板状のもので，和鋏などの可能性があるが刃部は確認されない。131・132はわずかではあるが刃部が残存している。133は管形の磁製品で，民俗資料で「馬の鞦（しりがい）」と呼称されるものである。117は「寛永通寶」で，「寶」の字の貝の部分が「ハ」の字となっているもので比較的新しい時期のものの可能性がある。



第25図　その他の時代の遺物実測図



古墳時代以前　　中世以降

第26図　その他の時代の遺物出土状況図

表10　その他の時代の出土遺物観察表

挿図No.	No.	取上No.	出土区	層位	類別	器種	部位	器高(cm)			色調		器面調整		胎土				備考
								器高	口径	底径	内面	外面	内面	外面	石英	長石	角閃	他	
第25図	110	398	C-5	Ⅲa	土器	壷	胴部				橙色	橙色	―	―		○	○		表面風化
	111				土器	甕	胴部				明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ハケメ・ナデ		○	○		
	112	234	B-5	Ⅱb	土器	甕	胴部				にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ		○		赤色粒	
	113	144	C-2	Ⅲ	土器	大型壷	口縁部		22.0		にぶい褐色	橙色	ナデ	ナデ		○	○	赤色粒	
	114	363	C-5	Ⅲa	土器	甕	脚部			10.8	にぶい黄橙色	褐灰色	ナデ	ケズリ・ナデ		○	○		
	115	356	C-5	Ⅲa	土器	甕	脚部				橙色	橙色	ナデ	ケズリ・ナデ		○	○		
	116			Ⅱ	土器	小型甕	底部				橙色	橙色	ナデ	ケズリ・ナデ			○		
	126				土器	ホウロク	把手				浅黄色	浅黄色	ナデ	ナデ				赤色粒	フライパン形
	127			Ⅱ	土器	ホウロク	口縁部				浅黄色	浅黄色	ナデ	ナデ					フライパン形
	128			Ⅰ	土器	土製品	鞴の羽口				橙色	褐灰色					○		ふいごの羽口ガラス質付着・黒色化・灰色化

表11　その他の時代の陶磁器観察表

挿図No.	No.	取上No.	出土区	層位	類別	器種	部位	器高(cm)			色調		備考
								器高	口径	底径	内面	外面	
第25図	117			Ⅰ	青磁	碗	胴部				オリーブドラブ	オリーブドラブ	
	118				白磁	碗	口縁部		11.9		シルバーグレイ	シルバーグレイ	
	119			Ⅰ	青花	基笥皿	口縁部				監白	監白	
	120			Ⅰ	青花	基笥皿	底部			3.8	パールホワイト	パールホワイト	
	121			Ⅰ	青花	碗	口縁部				パールホワイト	パールホワイト	
	122				青花	水注	口縁部		4.0		パールホワイト	シルバーグレイ	
	123			Ⅰ	輸入陶器	(天目)碗	底部			8.7	焦茶色	焦茶色	高台脇部分に屈曲部あり
	124			Ⅰ	陶器(肥前系)	溝縁皿	口縁部		12.9		オイスター	オイスター	溝縁皿・1600～1640年代
	125			トレンチ内	陶器(薩摩焼)	甕	胴部				暗オリーブ褐色	暗オリーブ褐色	初期薩摩焼。堂平窯産か
	133			Ⅰ	磁器	土錘形製品					パールホワイト	パールホワイト	馬の尻ガイ

表12　石器観察表

挿図No.	No.	取上No.	出土区	層位	時代・時期	類別	器種	大きさ(cm)			備考
								長さ	幅	厚さ	
第25図	108				縄文か	石器	石鏃未製品	3.1	1.8	1.1	黒曜石(上牛鼻産に類似)
	109	130	C-3	Ⅲ	縄文か	石器	石鏃	1.7	1.2	0.3	黒曜石(上牛鼻産に類似)
	129				中世以降か	石器	石皿・砥石	4	3.5	2.1	破片。赤色顔料を分析

表13　鉄器観察表

挿図No.	No.	取上No.	出土区	層位	類別	器種	部位	器高(cm)			備考
								幅	長さ	厚さ	
第25図	130			Ⅲ	鉄器	和ばさみか		1.2	4.4	0.5	破片
	131			Ⅰ	鉄器	刃物	刃部	1.3	2.5	0.4	破片
	132			Ⅱ	鉄器	刃物	刃部	0.2	2.3	0.2	破片

第５章　自然科学分析

赤色顔料について

本遺跡で，赤彩されたと思われる土師器と，赤色顔料と思われる粘質土が残存する石片が出土した。これらについて形状観察と成分分析を試みたので，ここに報告する。

1　資料

資料１　古代土師器坏　№51　（KFDⅢ77）
資料２　古代土師器坏　№85　（KFDⅢ98）
資料３　古代土師器坏　№50　（KFDⅢ）
資料４　古代土師器坏　未掲載（KFDⅢ131）
資料５　Ⅱ層出土石器　№129（KFDⅡ）

2　観察・分析方法

⑴　形状観察

双眼実体顕微鏡（NIKON SMZ1000）による８～30倍観察と，走査型電子顕微鏡（SEM，日本電子製JSM-5300LV）による1000～3500倍観察を行った。

⑵　成分分析

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（堀場製作所製XGT-1000，Ｘ線管球ターゲット：ロジウム，Ｘ線照射径100μｍ）を使用した。分析条件は次のとおりである。

Ｘ線照射径	100μｍ	パルス処理時間	P3
測定時間	200s	X線フィルタ	なし
Ｘ線管電圧	50kV	試料セル	なし
電流	自動設定	定量補正法	スタンダードドレス

3　結果

⑴　形状観察

資料１は，外面ににぶい褐色の縞模様が見られる（写真１の②，○数字は観察・サンプリングのポイントを示す）。また，わずかだが②の縞模様とは異なる赤褐色粒子が見られた（写真１の①）。内面には縞模様と同系色の顔料のようなものが塗布されている（写真２の⑤）。

資料２は外面線刻付近に，資料４は口唇から口縁部外面にかけてにぶい赤褐色顔料を塗布している（写真４，６）。資料３は内面が赤褐色を呈するが，断面を見ると胎土自体も同色に赤変しており，塗布されたとは断定できない（写真５）。資料５は，破砕した石の１面が平滑で，凹部に赤色顔料と思われる粘質土が詰まっている（写真６）。

それぞれの観察・サンプリングポイントから観察用の試料を採取し，電子顕微鏡で観察したところ，いずれもパイプ状の粒子は確認できなかった。

⑵　蛍光Ｘ線分析

分析の結果，資料１～４のいずれの観察・サンプリングポイントからも強い鉄（Fe）のピークが得られた（次頁図１参照）。分析結果を見ると，ほかの元素を含めて明らかな差が見られない。

資料５は，粘土あるいは砂粒等によるアルミニウム（Al）やケイ素（Si）などのピークが見られるものの，顕著な（Fe）のピークが得られた。

4　考察

これまでに当センターで分析した県内出土の土師器は，いずれも胎土そのものに鉄分が多く含まれており，光学顕微鏡観察で赤色顔料（ベンガラ）を塗布したと判断できるものでも胎土と比較して成分分析に顕著な差が得られない場合が多かった。今回の資料もその傾向が強く，資料２，４は赤褐色ベンガラを塗布したと考えられるが，鉄分が若干多めではあるものの，分析結果からは胎土と明らかな差は見られない。

資料３は，断面を見ると胎土そのものも赤変している。鉄分を含む粘土を用いて，焼成により赤変させた可能性もある。

資料１の①は赤褐色を呈し，にぶい褐色の縞模様の方向とは明らかに異なるためベンガラを塗布した可能性も考えられるが，微量のため断定はできない。①の下部に見られる縞模様や②の縞模様は，光学顕微鏡観察では塗布したようには見えないため，製作時に２種類の粘土を混ぜた可能性も考えられる。内面の⑤は，色合いは縞模様と同系色であるが，表面のひびの様子（写真３）や電子顕微鏡画像から，焼成前に塗布したものと考えられる。

資料５の粘質土は，成分分析結果から赤色顔料と考えられる。破砕した石の１面が平滑で，この面だけに残存していることから，赤色顔料を調製するための道具（石皿等）の１片と考えられる。

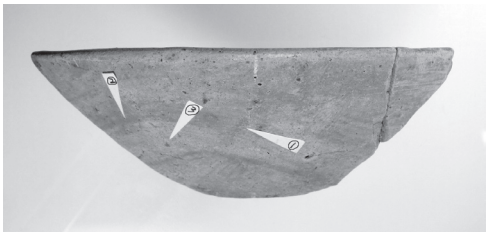


写真１　資料１外面

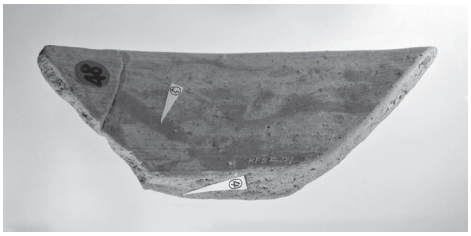


写真２　資料１内面（枠内は拡大部位）

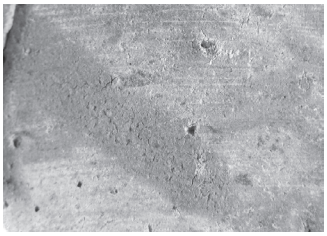


写真３　資料１内面拡大

写真４　資料２

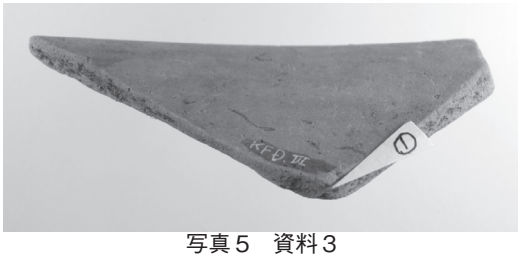


写真５　資料３

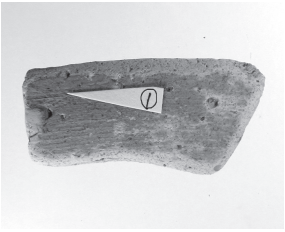


写真６　資料４

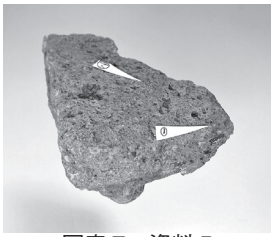
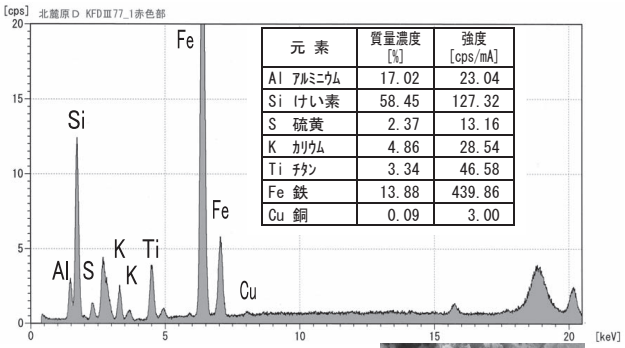
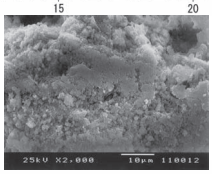
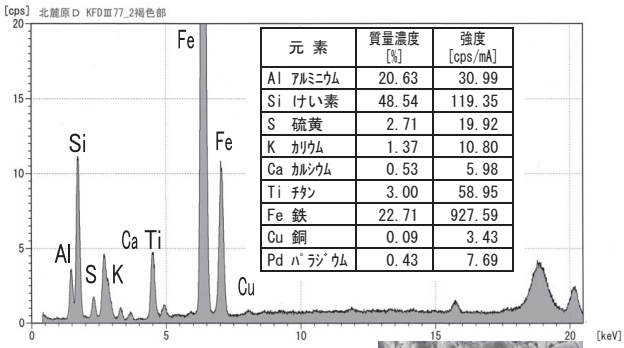


写真７　資料５

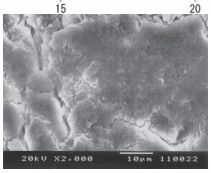


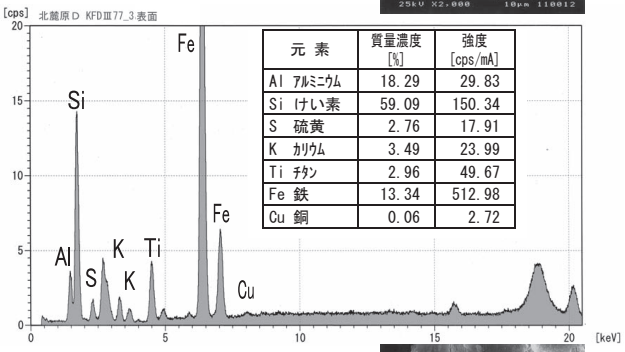
元 素	質量濃度 [%]	強度 [cps/mA]
Al アルミニウム	17.02	23.04
Si けい素	58.45	127.32
S 硫黄	2.37	13.16
K カリウム	4.86	28.54
Ti チタン	3.34	46.58
Fe 鉄	13.88	439.86
Cu 銅	0.09	3.00



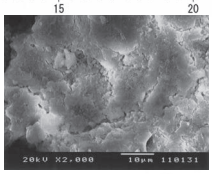


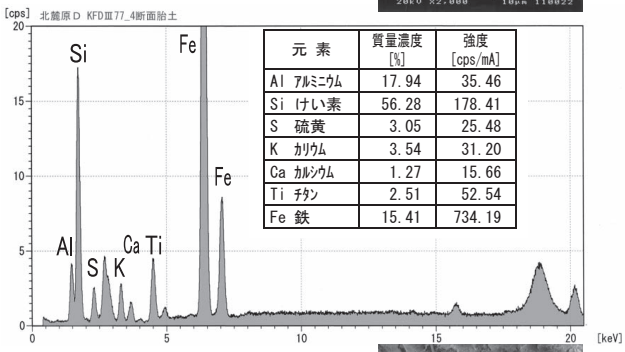
元 素	質量濃度 [%]	強度 [cps/mA]
Al アルミニウム	20.63	30.99
Si けい素	48.54	119.35
S 硫黄	2.71	19.92
K カリウム	1.37	10.80
Ca カルシウム	0.53	5.98
Ti チタン	3.00	58.95
Fe 鉄	22.71	927.59
Cu 銅	0.09	3.43
Pd パラジウム	0.43	7.69



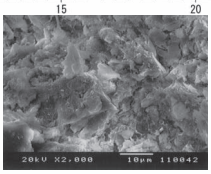


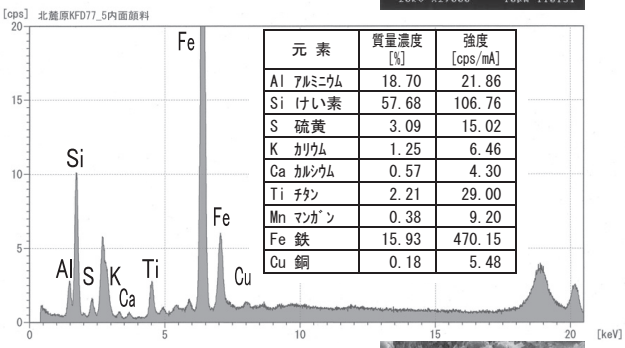
元 素	質量濃度 [%]	強度 [cps/mA]
Al アルミニウム	18.29	29.83
Si けい素	59.09	150.34
S 硫黄	2.76	17.91
K カリウム	3.49	23.99
Ti チタン	2.96	49.67
Fe 鉄	13.34	512.98
Cu 銅	0.06	2.72



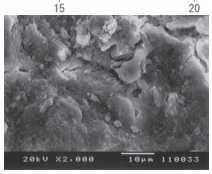


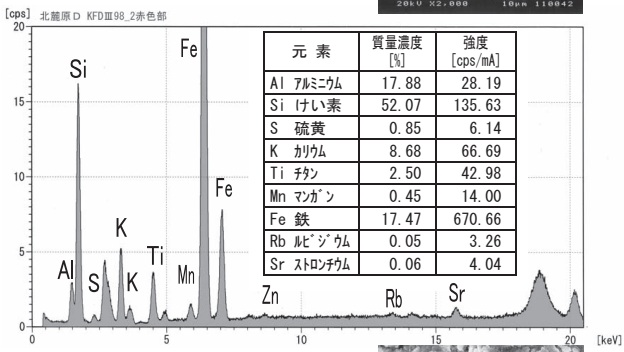
元 素	質量濃度 [%]	強度 [cps/mA]
Al アルミニウム	17.94	35.46
Si けい素	56.28	178.41
S 硫黄	3.05	25.48
K カリウム	3.54	31.20
Ca カルシウム	1.27	15.66
Ti チタン	2.51	52.54
Fe 鉄	15.41	734.19



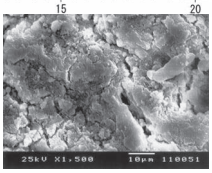


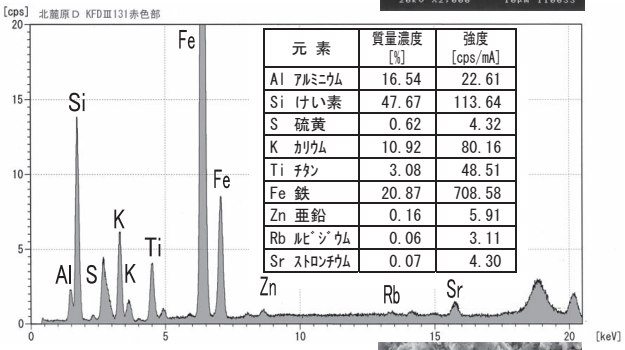
元 素	質量濃度 [%]	強度 [cps/mA]
Al アルミニウム	18.70	21.86
Si けい素	57.68	106.76
S 硫黄	3.09	15.02
K カリウム	1.25	6.46
Ca カルシウム	0.57	4.30
Ti チタン	2.21	29.00
Mn マンガン	0.38	9.20
Fe 鉄	15.93	470.15
Cu 銅	0.18	5.48



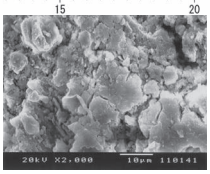


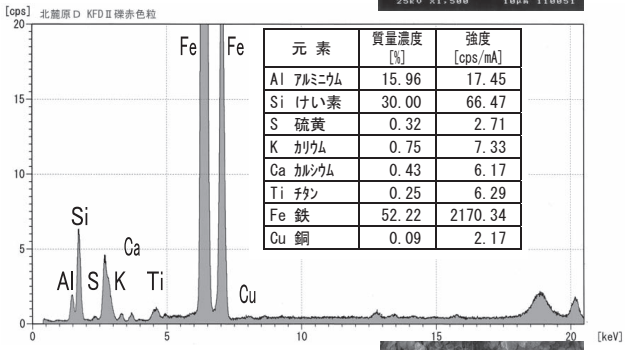
元 素	質量濃度 [%]	強度 [cps/mA]
Al アルミニウム	17.88	28.19
Si けい素	52.07	135.63
S 硫黄	0.85	6.14
K カリウム	8.68	66.69
Ti チタン	2.50	42.98
Mn マンガン	0.45	14.00
Fe 鉄	17.47	670.66
Rb ルビジウム	0.05	3.26
Sr ストロンチウム	0.06	4.04



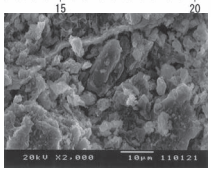


元 素	質量濃度 [%]	強度 [cps/mA]
Al アルミニウム	16.54	22.61
Si けい素	47.67	113.64
S 硫黄	0.62	4.32
K カリウム	10.92	80.16
Ti チタン	3.08	48.51
Fe 鉄	20.87	708.58
Zn 亜鉛	0.16	5.91
Rb ルビジウム	0.06	3.11
Sr ストロンチウム	0.07	4.30





元 素	質量濃度 [%]	強度 [cps/mA]
Al アルミニウム	15.96	17.45
Si けい素	30.00	66.47
S 硫黄	0.32	2.71
K カリウム	0.75	7.33
Ca カルシウム	0.43	6.17
Ti チタン	0.25	6.29
Fe 鉄	52.22	2170.34
Cu 銅	0.09	2.17



第27図　分析結果

第６章　まとめ

第１節　古代

１　掘立柱建物について

掘立柱建物は，おおむね「庇つきの２間×３間」とすることが可能なもので，ほぼ東西南北に沿って建てられている。ただし，建物筋以外にも柱穴がみられるので，１回で終わる建物（壁立建物の如く多くの柱穴が並ぶもの)なのか建て替えによるものかは明らかでない。また，粘土を貼り付けて構築された「地床炉」とみられる焼土が建物内に存在するので，住居の可能性が考えられる。掘立柱建物内の地床炉は，山神遺跡，中尾立遺跡（霧島市）や高篠遺跡（曽於市）などでも発見されており,「カマド」の可能性も指摘されるもの（上床2000）で，本遺跡の例もこれらに類似する。

２　不定形土坑について

本遺跡では，南北に沿って不定形の土坑が数基並ぶように検出された。埋土中から炭化物が検出されるものもあるが，具体的な性格は不明である。可能性としては，畠と考えられる畝状遺構群を区切る役割を果たす遺構(杭跡・畠間を区切るために植えられた木など)・廃棄土坑（ゴミ穴)・祭祀遺構などの用途が考えられる。

また，①一直線に並ぶ　②ほぼ南北を向く　③二箇所の畝状遺構群間の中央に位置する　④不定形土坑の両端に硬化面によくみられるシルト質の塊がみられる

などの点を考慮すると,「道」に関わる遺構も併せて視野に入れる必要があろう。一部にある深いピットについては，熊ヶ谷放牧場（南九州市頴娃町）にみられるような,「牛がぬかるんだ場所を歩いたことによってできた穴」の可能性もある。同放牧場では多くの牛が長年歩いたことによって溝状の道が形成されるとともに，一部80㎝程度の深さの穴も確認される。このような事例を重ねることによって，北麓原Ｄ遺跡例のような不定形土坑の性格や，これに伴うピットの生成起因を探る一助になる可能性がある。今後とも類例を集め，検討したい。

３　畝状遺構について

本遺跡では，畠とみられる畝状遺構群が２箇所発見された。県内における当該時期の遺跡では，橋牟礼川・敷領・慶固などの各遺跡（いずれも指宿市内）のように火山灰や洪水砂に覆われた状態で発見されることが通常であるが，本遺跡のように火山灰以外の埋土がみられる場合は現在のところ類例がみられないものであるので，重要である。掘立柱建物と併せて，古代に一般的な集落形態のひとつとされる「孤立荘宅」(小村の一形態で屋敷の周囲を耕地とするもの・金田1985ほか）に類似するものであるので注目される。

４　遺物について

本遺跡で出土した古代の遺物には様々なものがみられた。土師器の甕については，外面にハケメがみられるものも目立ったが，この中でも「縦方向に長いハケメがあるもの」と「胴部下半にタタキがあるもの」が存在する。いずれも県内では類例が少ないもので，今後は日向や肥後などと比較する必要があろう（註１)。土師器坏体部の底部付近のヘラケズリの痕跡から，９世紀中頃の時期であることが想定される。その他に赤色高台土器や焼塩土器も出土している。両者とも古代の交通路に関わる遺物との指摘（前者は森田1983など，後者は黒川2006）があり，本遺跡の小字も「横大道」であることから関連性も考慮しながら調査を進めたが，当該時期の交通に関わる遺構（道路や轍，側溝など）は発見することができなかった。

軽石製品の出土もあった。方柱状のものと，男根状のものがあり，特に後者は今後は類例などもあたって検討する必要があろう。

第２節　その他の時代

１　土坑について

各土坑の明確な用途は明らかではないが，いずれの土坑もほぼ南西方向から北西方向に向かって一直線に並んで検出された点が注目される。これは,埋土が表土であったため調査しなかった近・現代とみられる畝状遺構の主軸とほぼ同様であったので，関連する可能性も考慮されよう。

２　帯状硬化面について

本遺跡で検出された帯状硬化面は８条であった。このうちの２条については，帯状硬化面の中にピット状の窪みがみられるもので,「波板状凹凸面」と呼称されるものであった。この遺構は,「牛馬歩行痕跡」という指摘がされるもので（東2002ほか)，本遺跡の中世以後の性格を考察するうえで重要な遺構である。

３　遺物について

石器としては,「五角形鏃」が出土している。形態か

ら縄文時代の後晩期頃と推定できるが土器の出土はみられないので，製作や埋納などの意図的なものではなく，狩猟などによる一時的・瞬間的な関わりによるものである可能性を重視したい。

古墳時代の遺物も遺跡の北部にわずかな集中がみられたが，おおむね「東原式土器」に相当するものである。

中世以降の遺物も若干みられた。多くは戦国時代～江戸時代初頭のものであり，麓が移転する以前（第２章参照）のものの可能性も考慮される。

近代のものとして近年注目される「馬のしりがい」(渡辺2009）もみられた。波板状凹凸面との関係も検討材料である。

第３節　地名との関わりについて

五味克夫氏は，「宇佐八幡宮側から派遣されてきた使者14人中の13人（註３）が正八幡宮に放火して宇佐に逃げ帰る途中，この地で八幡神号を炎上する煙の中に見て驚愕，大木の倒伏により圧死を遂げたのを憐れみ，塚を造ったという」伝説があり，古代後半期の事件であった可能性を指摘する（五味1994)。

武久義彦氏は,「大隅国府より北に向かう駅路」として，大水駅までの駅路（おおむね五味氏が想定したルートと同様)（註４）について考察を行っているが,その中で「想定駅路の西側に字『横大道』が位置する」ことを指摘している（武久義彦1994)。「横大道」は，本遺跡の小字であり，本遺跡周辺を指すと考えられる。

今回の調査で発見された道関連の遺構は中世以降のもののみであり,「官道」といえるものではなかった。しかしながら，本遺跡が古代の遺跡であることから古代の官道が近辺を通っていた可能性も少なくないと考える。

【参考文献】

池畑耕一1991「英祢駅考」『三島格会長古稀記念論集交流の考古学』(『肥後考古』第８号）　肥後考古学会

今塩屋毅行2011「日向国における古代前期の土師器甕とその様相－時間軸の設定を目指して－」『古文化談叢』第65集発刊35周年・小田富士男先生喜寿記念号（３）九州古文化研究会

上床真2000「薩摩・大隅の古代の竪穴遺構－竪穴式住居の終末に関する一考察－」『Fragments』第２号　さくら研究会

小田和利1996「製塩土器からみた律令期集落の様相」『九州歴史資料館研究論集』21　九州歴史資料館

木下良 2009『事典　日本古代の道と駅』吉川弘文館

金田章裕1985『条里と村落の歴史地理学的研究』大明堂

黒川忠広2006「赤色高台を有する黒色土器」『大河』第８号　大河同人

五味克夫1994「中世の大隅　－鎌倉･南北朝期の大隅の古道－」鹿児島県教育委員会編『歴史の道調査報告書』第二集

重久淳一2010「【郷土史への扉】古代の国道－大宰府への道－」『霧島市広報きりしま』Vol．95（平成22年３月号）

武久義彦1992「明治期の地形図にみる大隅国の駅路と蒲生駅家」『奈良女子大学地理学研究報告』Ⅳ

武久義彦1994「明治期の地形図にみる大隅国北部の駅路と大水駅」『奈良女子大学研究年報』38

東和幸2002「波板状凹凸面に関する第３の見解」『四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古希記念論文集　同刊行会

森田勉1983「焼塩壺考」『大宰府古文化論叢』下巻　吉川弘文館

渡辺芳郎2009「『器』以外の『薩摩焼』－糸巻形・管形磁製品について－」『南九州縄文通信』№20　南の縄文・地域文化論考　新東晃一代表還暦記念論文集

【註】

註１　日向の甕については，最近今塩屋毅行氏による考察（今塩屋2011）も発表されており，今後は本県の資料も整理して比較・検討を行う必要があろう。

註２　森田勉氏は九州における焼塩土器の検討を行っているが(森田1983)，ここでは以下の２点について注目する。

①「焼塩壺は内陸深くまで出土し，運搬具としての機能を荷なっていたことが知れた。出土分布をみると無秩序な在り方は示さず，官道沿いに集中する特質を有している」

②「焼塩壺は８世紀代に出現し，９世紀中頃になるとその姿を遺構上から消す。同時に玄界灘式製塩土器も徐々に数量を減じ，10世紀代になると土器製塩から塩浜製塩へと移行していったことを海の中道遺跡が物語っている」

この意見に対して，小田和利氏は焼塩土器を含む「製塩土器は官衙的遺物に値しない」として，官衙のみならず集落遺跡からの出土も多いことを明らかにした（小田1996)。

註３　最も古い記録の一つである『三國名勝図會』（天保14【1843】年編纂）には,「十三人」ではなく「三人」と記載されている（重久2010)。

註４　ただし，木下良氏は,「東西両路とは別に肥後国に直通する駅路ではない交通路」として，正式の駅路ではないことを主張する（木下2009)。

第７章　調査終了後の状況

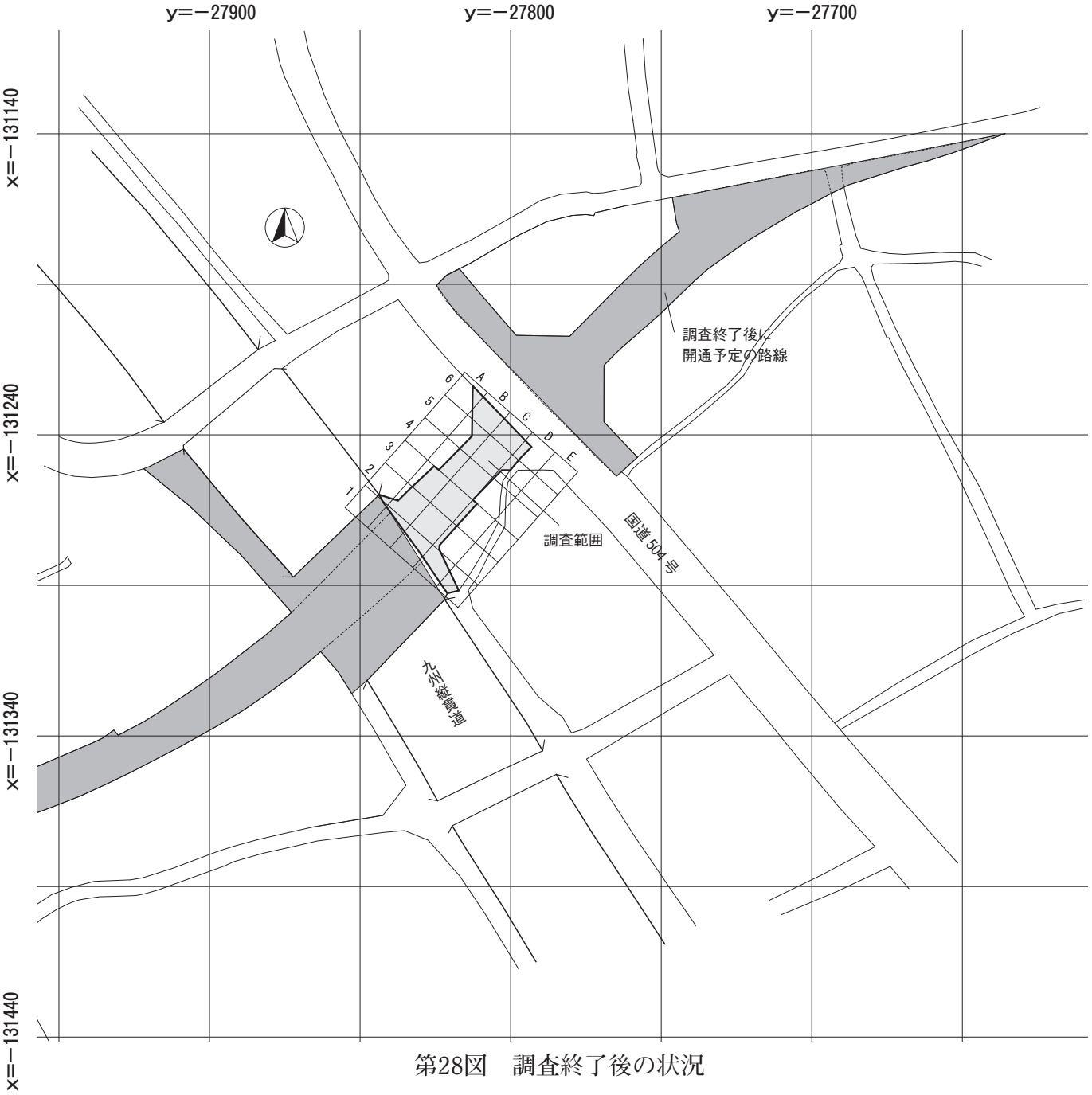
本遺跡の一部は，今回の道路建設によって記録保存を行うということになったが，遺跡の周辺も含めた今後の状況についてここで述べたい

今回の調査の結果，遺跡の南東側は，里道や耕地に関わるとみられる造成によって遺物包含層が残っていないことが判明した。

また，周辺の確認調査によって，遺跡の北側～北東側及び九州縦貫道を挟んだ対岸側には遺物包含層が存在しないことが確認された。

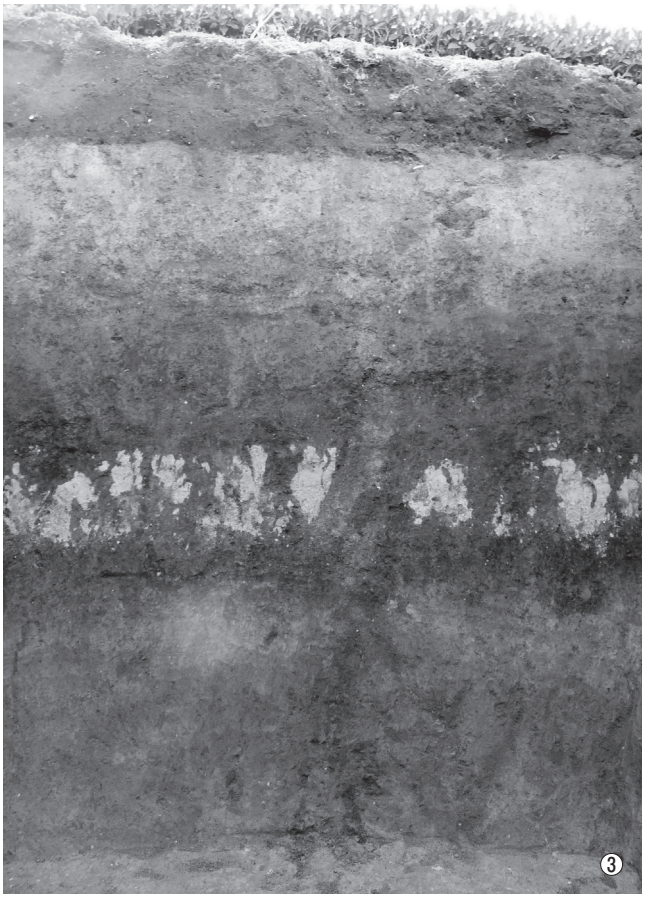
ただし，Ａ・Ｂ－２～７区の範囲については，調査結果から畝状遺構が調査範囲外に伸びていくことが想定されることから，遺跡の範囲が南西側へと広がる可能性がある。現在，この部分は畑地となっているが，今後注意が必要である。

本遺跡の調査終了後には，計画通り「県道伊集院蒲生溝辺線」が建設される予定である。



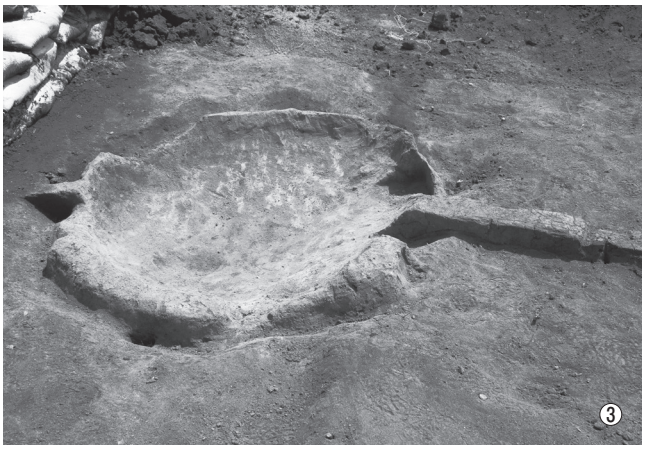
第28図　調査終了後の状況

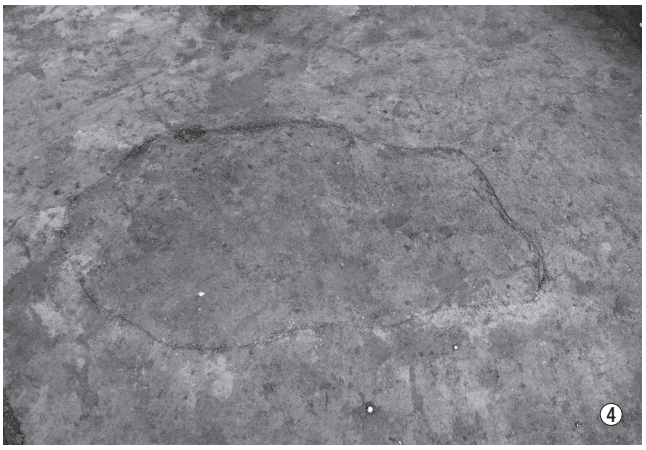
図　版

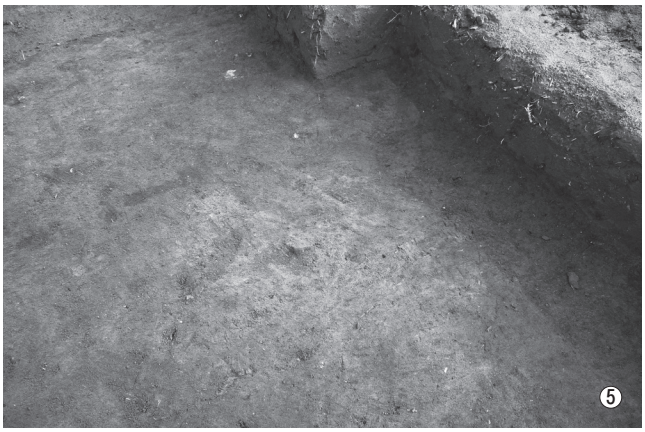


①調査風景（南から）
②調査風景（北から）
④柱穴跡半裁状況（B-2区）
⑥掘立柱建物根石検出状況（B-2区）

③土層断面図
⑤掘立柱建物根石検出状況（北から）
⑦掘立柱建物完掘削状況（北から）



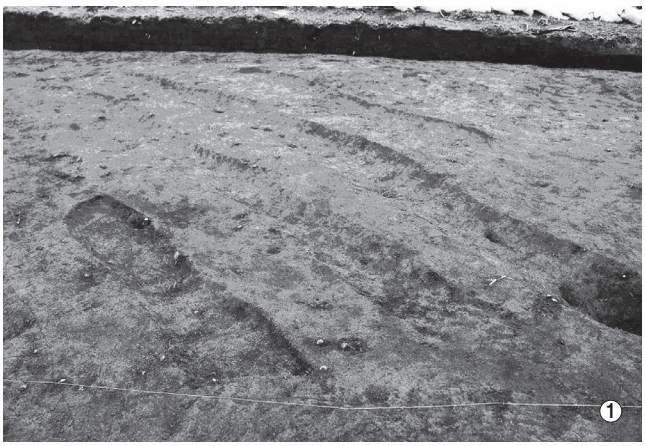


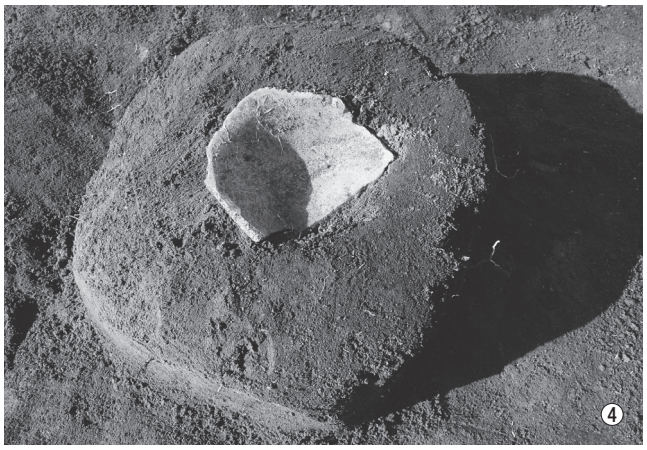
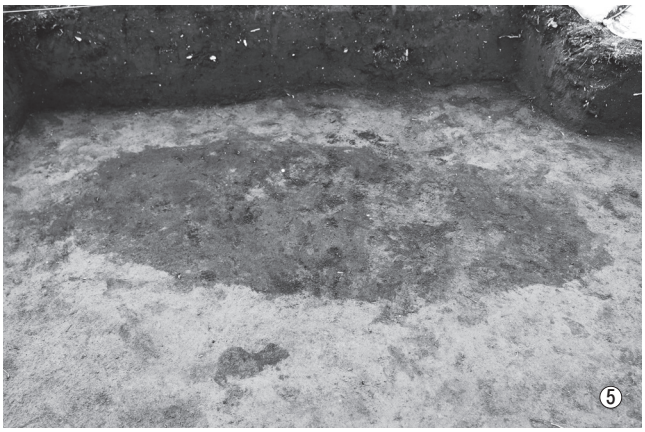


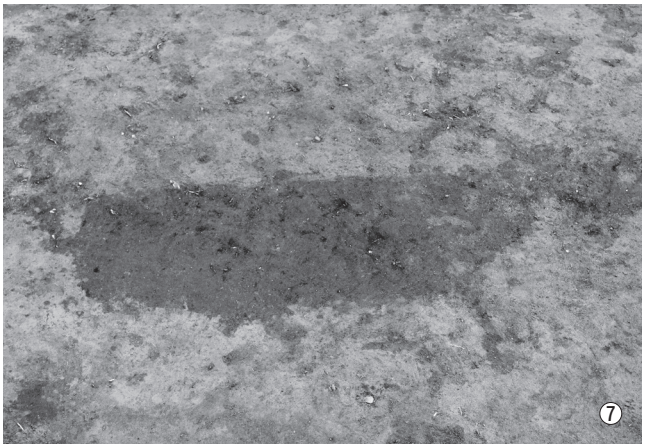
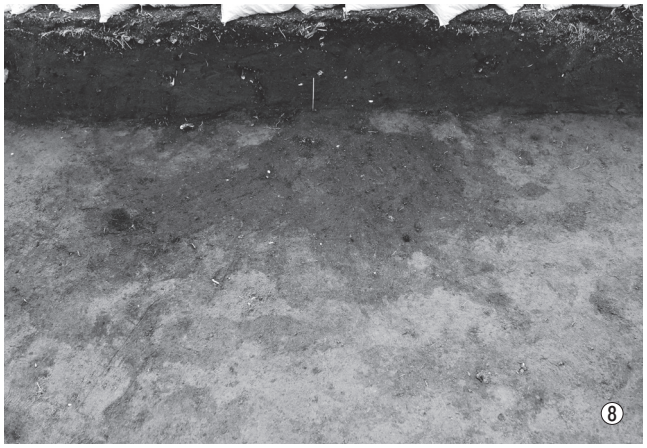
①土師器片出土状況（C-3区　北西から）
②焼土半裁（C-3区　北西から）
③地床炉完掘状況（C-3区　東から）
④焼土検出状況（C-3区　北西から）
⑤焼土検出状況（C-3区　北西から）
⑥焼土跡半裁状況（C-3区　北西から）
⑦18号土坑完掘状況（東から）
⑧19号土坑完掘状況（北東から）

①17号土坑発掘途中（南から）
④1号土坑　完掘状況

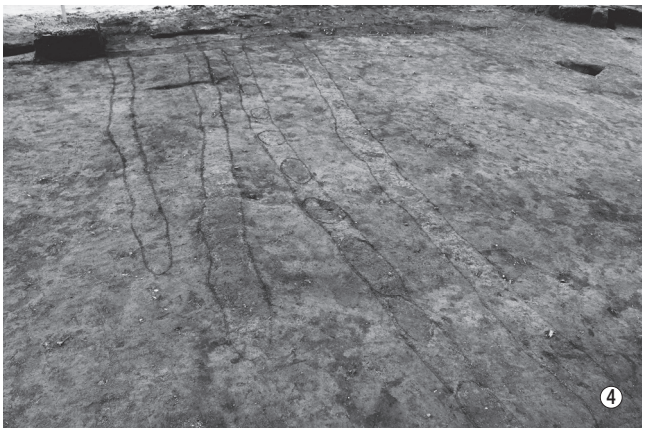
②17号土坑埋土堆積状況（南から）
③17号土坑完掘状況
⑤13号土坑完掘状況

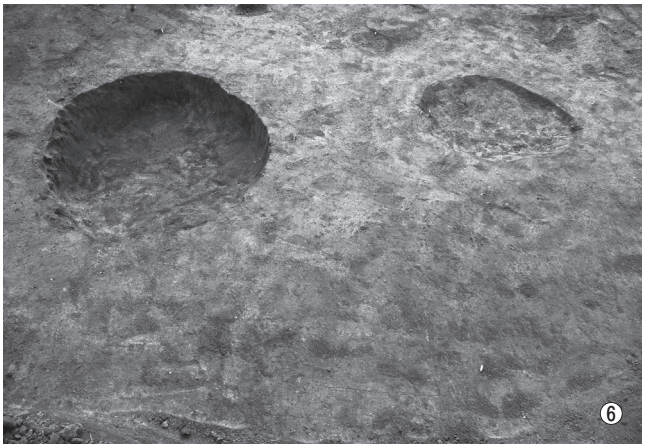


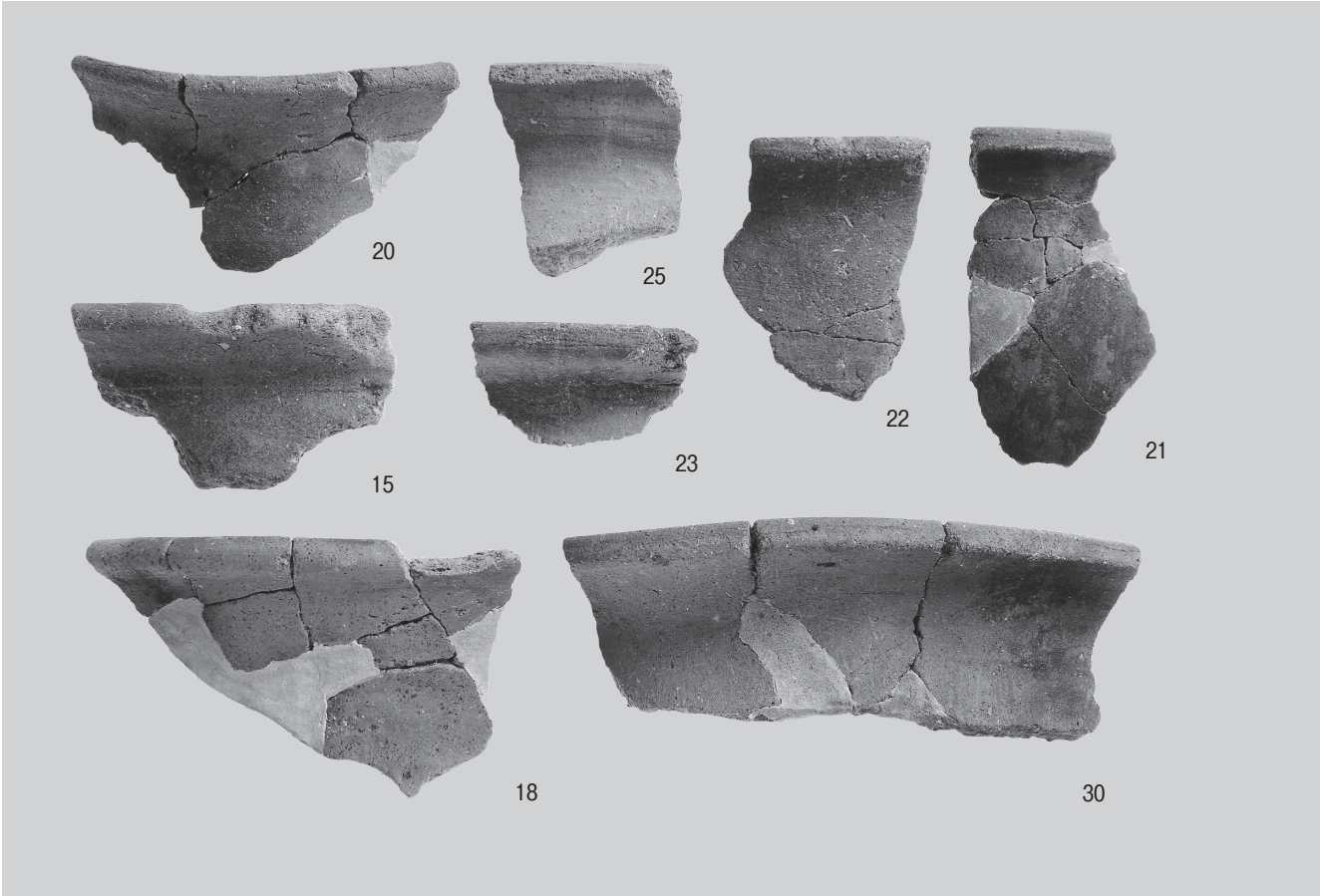



①畝状遺構完掘状況（東から）
②畝状遺構完掘状況（西から）
③畝状遺構完掘状況（南から）
④土師器出土状況（C-2区）
⑤16号土坑検出状況（B-6区　南から）
⑥10号土坑検出状況（B-4区　南西から）
⑦14号土坑検出状況（南西から）
⑧13号土坑検出状況（北西から）



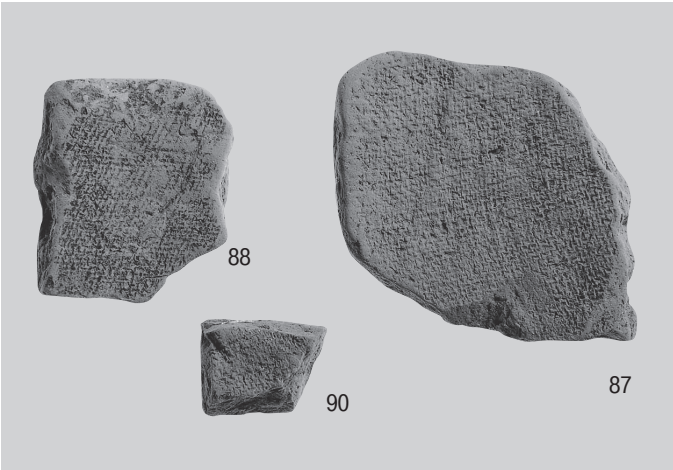


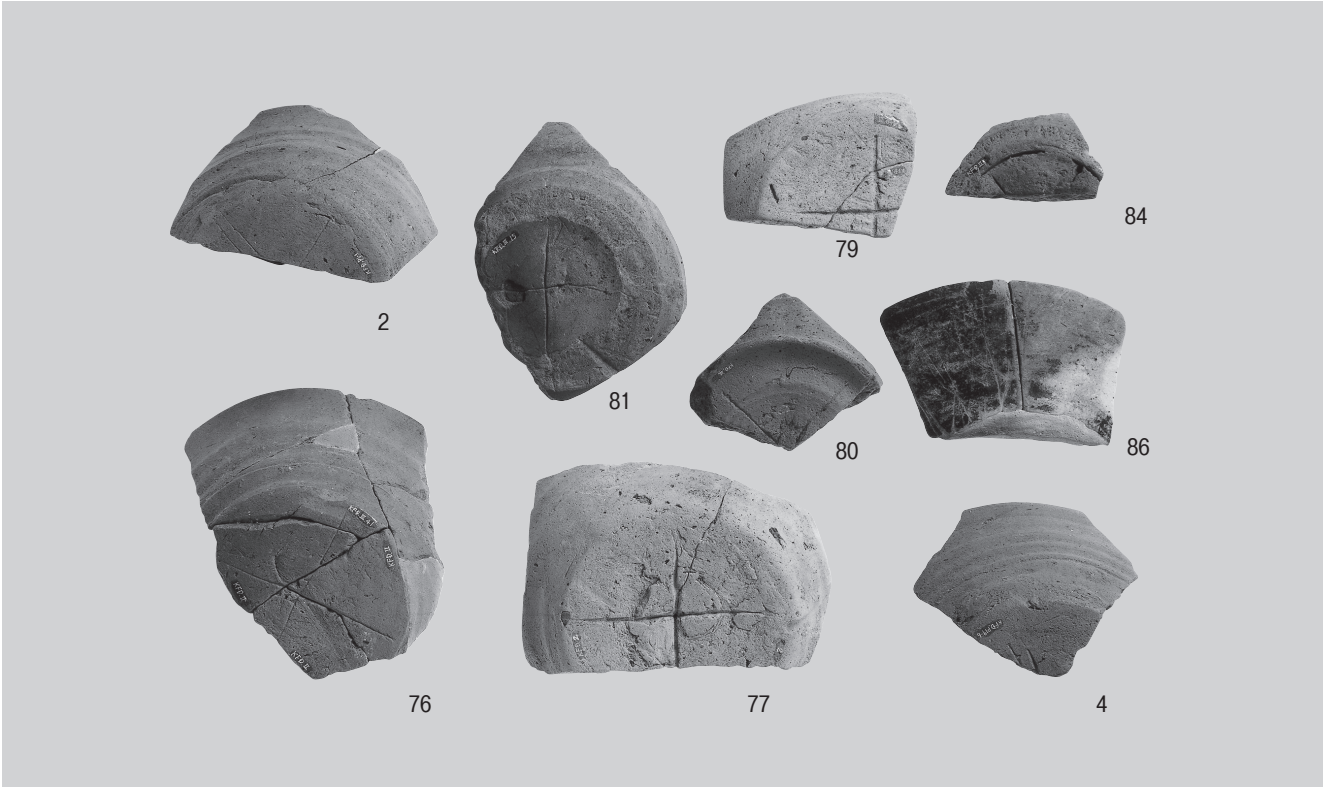
①遺物検出状況（南から）
②成川式土器出土状況（B-5区）
③溝状遺構検出状況（B-3,C-3区　東から）
⑤波板状凹凸面完掘状況（東から）
④波板状凹凸面検出状況（C-5区　西から）
⑦遺跡近景（南西から）
⑥ピット検出状況（C-3区　北から）

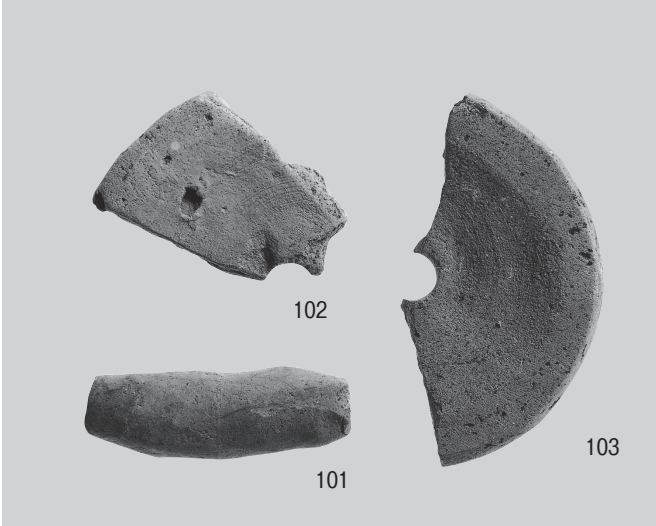

20
25
22
21
15
23
18
30

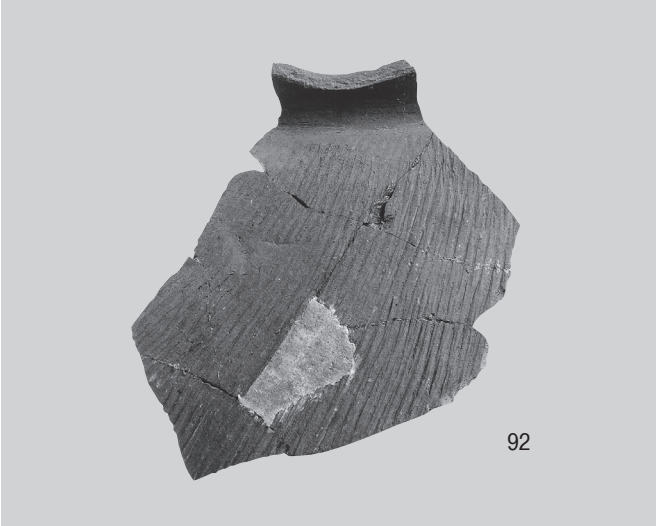
31
33
35
37
34
38
32

1


88
87
90


2
81
79
84
80
86
76
77
4

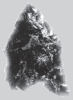

102
103
101


92

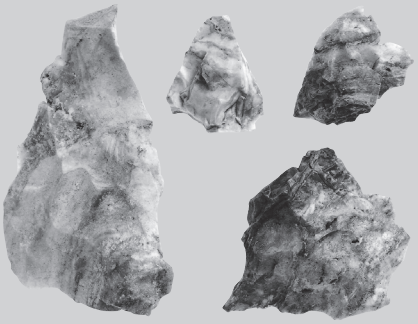
98

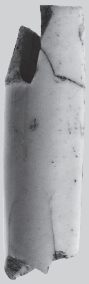
99

108



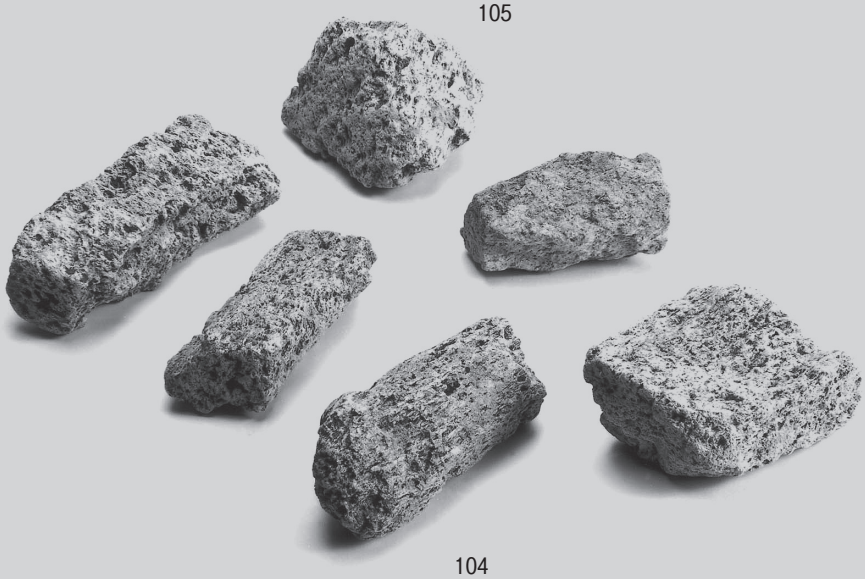
109





133

105



104

県道伊集院蒲生溝辺線（有川工区）道路改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

北麓原Ｄ遺跡

発行年月日　2012年１月

編集・発行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL 0995-48-5811　　FAX 0995-48-5821

印　　刷　㈱日　進　印　刷
〒892-0846　鹿児島県鹿児島市加治屋町16番20号
TEL 099-222-8291　　FAX 099-223-2715

鹿児島県